
父を求めて殺人推理

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父を求めて殺人推理

【Nコード】

N1912M

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

父親……かも知れない男性が殺された？ 血のつながらない父と父子家庭の高校1年生馬場理はイケてない父と共に大富豪の御曹司殺害のミステリーに挑む。殺されたのは本当に自分の父親なのか？ 母は何故父と結婚しなかったのだろう？

01、プロローグ／結婚の条件（前書き）

＊自己申告。この小説には推理する上で卑怯な設定を使用しています。そのヒントは明記してありますので注意してお読みください。
最後にあとがきで種明かしします。

01、プロローグ―結婚の条件

馬場忠穂（ばばただお）は喫茶店で明川理花（あけかわりか）を待っていた。

忠穂がアメリカ留学に旅立ってから実に4年ぶりの再会になる。

忠穂の心中は複雑だった。旅立つ前、理花は笑顔で「待っている」と言ってくれた。向こうに着いてからもたびたび電話やメールで連絡を取っていた。それが3ヶ月くらいして急に連絡が取れなくなり、どうしたのだろうと思っていると、メールで「ごめんなさい。あなたとわたしは合わなかったようです。わたしたちはもう会わない方がいいと思います。さようなら」と一方的に別れを告げられ、けっきょく、それっきりになってしまった。「待っている」と言った笑顔を思い出し、女心の不可思議さを思った。忠穂と理花は同じ大学の3年生で、恋人同士だった。彼女を置いてきた自分が悪いのだと諦めようとした。貧乏学生の自分が学費を出してもらって留学できるチャンスなどこれっきりだっただろうし、彼女を選んで大学に残っても、きつと、自分の将来を諦めた不満を生涯抱え続けることになっただろう。彼女が言うとおりに、自分たちは「合わなかった」のだろう。

それが、4年間あちらの大学での留学を終え、帰国が決まった途端に彼女から電話が掛かってきた。

『お久しぶり。ごめんなさいね、突然。あなたにお話があるの。うん、お願い、ね。会って：もらえないかなあ？』

忠穂は今さらなんだという腹立たしい気持ちもあったが、会うと答えた。急な別れの理由が知りたかったし、やっぱり、今でも彼女が忘れられなかった。向こうで忠穂は女に関して「硬い奴」とからかわれたが、それは理花がずっと好きだったからだ。

もう一度彼女に会いたい。

やはりその思いをずっと引きずっていたのだ。

現れた彼女を一目見て、忠穂はぎょっと胸に矢が突き刺さったように感じた。

理花は、大きなお腹をしていた。

「驚いた？」

開口一番彼女の言葉がそれだった。

「うん。びっくり」

「ふふ」

彼女はすっかり開き直ったような悪戯っぽい笑いを浮かべて忠穂に向かい合って座った。ウェイトレスにアイスティーを頼み、運ばれてきて、「ごゆっくりどうぞ」と行ってしまうと、さすがに緊張した様子で言った。

「お元気そうね？　よかったわ」

「うん。君も。……その、順調なの？」

「ええ。6ヶ月。お腹をけっぽられて痛いわ」

忠穂は、少し斜に構えて、理花を見つめた。理花は、4年前と変わらず綺麗だった。

忠穂は、俺は馬鹿だな、と内心自分をののしり、苦笑いした。

「幸せそうだね？」

「ううーん……、そう……なんだけどねえー」

理花は大きなお腹を撫で、モナリザのような不可思議な笑みを浮かべて忠穂を見つめると、言った。

「忠穂君、まだわたしのこと好き？」

「うん。なんだかすっごい敗北感を感じるけど、やっぱり好きだ」

「そう。嬉しいな。わたしも好きよ」

「そのお腹で言われてもなあー」

「ちよっと訳ありでねー」

うふふ、と笑い、じいっと忠穂を見つめると、静かな口調で言った。

「今でもわたしが好きなら、この子を自分の子どもとして受け入れて、わたしと結婚してくれない？」

忠穂は、さすがに不快を感じ、眉をひそめて理花を睨んだ。

「いきなり無茶言うなよ。なんだよ？その子の父親とは結婚しないのか？」

「結婚は出来なかったの」

「どうして駄目だったんだ？」

「理由は今は言えない。この子が大人になって色々なことを理解できるようになったら、その時あなたにもいっしょに話すわ」

「それまで、何も聞かずに俺にその子の父親でいろって言うのか？」

「そうよ。こう言っても信じてもらえないでしょうけど、わたし今も忠穂君のことが大好きよ？ 愛してるわ。あなたがわたしとこの子を受け入れてくれたら、わたしはすごく幸せよ」

「まいったなあー……」

忠穂は顎をのけ反らせ、天井を見た。扇風機のプロペラが緩やかに回っていた。

「いきなり子持ちかよ」

顔を前に戻すと、理花はニヤニヤ笑っていた。既に忠穂の答えが分かっているように。

「心配しないで。この子は絶対、すごくいい子に育つから。わたしが保証するわ」

忠穂は諦めて、口を曲げて笑った。

「参りました。幸い俺は身軽なんですね。どうせおまえ、それも見越してのことなんだろう？」

「関係ないわよ」

理花はほっとして、安心した笑顔を顔いっぱい浮かべた。

「身勝手で悪いけど、わたしは忠穂君に受け入れて欲しかったの。ありがとう。感謝するわ」

忠穂はふっと息を漏らし、頷くと、微笑んだ。

「悪かったな、4年間も放っておいて」

「ええ。わたしもいろいろ苦労したのよ？ これから、親子三人楽しく過ごしていきましょうね？」

「了解しました、奥様」

すっかり自信満々の彼女の笑顔を眺め、
やっぱりこいつにはかなわねえな、
と忠穂は可笑しくなった。

02、学生陸上のスター

スタジアムで県高校総体の陸上競技が行われている。4日間の日程の第2日目。

スタジアムの裏のサブグラウンドでは競技に参加する高校陸上部員たちがトレーニングやレース前のウォームアップなどを行っている。

そのトラックの外の一部に明るい紺色のトレーニングウェアを着た高校生たちの集まりがあった。

「マ〜コ〜ちゃん。相変わらずいいケツしてるねえ」

お尻をむにと触られて、1年生部員は上級生をジロツと睨んだ。
「やめてくださいよ、セクハラ部長」

「エヒエヒエヒエ」

メガネを掛けたイガグリ頭の変態部長は妖怪みたいな気色悪い声で笑った。

「マッサージだよ、マッサージ。先輩が硬くなった下半身を優しく揉みほぐしてあげちゃうよお〜？」

「誰の下半身が硬くなってるんですか？ 学校通り越して警察に訴えちゃいますよ」

また別の方から声が掛けられた。

「マコ〜」

「おまえもなあ」

1年生は自分を呼んだ同級生をしかめっ面で睨んだ。

「おまえもその呼び方やめろよ？」

「なんで〜？ みんなそう呼んでるじゃないよ〜？」

「おまえがそう呼ぶからだろう？ 名字で呼べ」

「ジャイアント」

「馬場くん、だ」

呼びかけた女子はぶーとふくれっ面をした。

「なによおー？ マコったら最近冷たいじゃないのよー？」

「ああ、うるさい、ダイコン」

ビュツと女子の跳び蹴りが飛んできて1年生は慌ててよけた。

「うわっ、あぶね。こおらっ、おまえスパイクだろーが？ 顔に当たったらどうすんだよ？」

「あーら、ごめんあそばせ。自慢の綺麗なお顔をケガしたらたいへんですものねえ？ ちなみにあたしは代根（しろね）よ、マコちゃん」

「ああ悪かったな、つい脚に見とれて間違えちまったぜ、タツキー」
「スケベ！ その呼び方もねー」

ポカッポカッ、と1年生二人は3年生に丸めたプログラムで頭を叩かれた。

「こら、いつまで痴話喧嘩しとるか。馬場、おまえもうすぐ召集だろう？ 準備しとけ。代根、おまえは今日はレースないんだから走り込んでおけ」

「「あの一、先輩」」

と二人は同時に呼びかけて顔を見合わせ、3年生及び周りの部員たちはニヤニヤした。

「なにかなく？」

「いや、」

男子の方がちょっと顔を赤らめながら言った。

「こいつ今日はトレーニングは抑えめにしてやってくれませんか？ おとといまで風邪で熱があったんで」

女子の方はちよつとびっくりして、3年生は

「そうだったのか？」

と訊いた。

「いえ、もう平気です」

と言う女子に男子は

「あ、悪い、風邪じゃなくて生理だった？」

「さっさと行け！ ドスケベ男子！」

再び跳び蹴りをかまされそうになり

「召集行って来まーす」

と笑いながら逃げていった。

「まったく、エロガキめえー、思いつきり第二次性徴迎えおってー」
まっ赤になっている1年生女子をニヤニヤ見ていた3年生はまじめな声で

「代根。本当に平気か？」

と訊いた。

「あ、はい。本当に大丈夫です。風邪、はすっかり治ってます」

風邪、を強調する女子にまたニヤニヤした。1年生からトレーニングを手加減してくれとは言いつらいだろう。

「ま、無理はするなよ。で、おまえはなんだ？」

「あつ、はい、あの……」

また赤くなつてうつむき、上目遣いでおねだりするように言った。

「あいつのレースを見たいなあー……と……」

3年生は笑った。

「おうおう羨ましいなあおまえら。ちゃんと解放してやるよ。どうせ俺たちも見に行くから」

「はあーい、ありがとうございます！」

1年女子は明るい声で言ってきたとお辞儀した。

北光（ほっこう） 高校陸上部員たちはメインスタンド向かって左の端に集まって出場選手のレースを応援した。

男子400メートル予選。400メートルはトラック1周なのでスタートとゴールは同じ場所だ。予選は8組で、各組上位2着と3着以下全レースで上位タイム8人までが準決勝に進出する。

北光陸上部からは2人が出場するが、1年男子は第5組に登場した。

「マコーー！ ファイトー！」

コースに出て練習のダッシュから戻ってきた1年生はスタンドの

応援に余裕の様子で手を振って応えた。

「こらあーっ！ 気引き締めろーっ！」

女子の声にきりっと真面目くさった顔を作って最敬礼した。あまり真面目な態度とは言えない。

しかし。

『オン・ユア・マーク』

ガチッガチッとスタートブロックにスパイクの足をかけ、ラインに手を付く。

『セット』

ぐっと前傾して静止する。

パンツ、と電子信管のスターターピストルがフラッシュし、8人の選手が一斉にダッシュした。

1年生は内側の第2レーンだ。

第1第2カーブを回って選手たちが向こうの直線を走るとスタンドからどよめきが起こった。

「うっひょ〜」

3年生は思わず口笛を吹きそうになり、痴話喧嘩の彼女は思わず目を丸くして顔に嬉しさを溢れさせた。

速い。

1年生は内側のコースにもかかわらず早くも先頭に迫る勢いでグイグイ加速していく。

スタンドの視線を一身に集め、第4コーナーを回ってラストの直線に入ってくるとぶっちぎりのトップで、もう既に軽く流し、余裕の1着でゴールした。

イガグリメガネの部長は腕を組んで「うーむ…」とうなり、
「美しい」

とつぶやき、周りの部員たちから思いつきり引かれた。

1年女子も思いつきり引きながら、でも頬を上気させて審判に礼をして帰ってくる男子をしっかりと目で追っていた。

「こら、手抜き」

「順位の決まった予選で全力出してどうすんだよ？」

「やな奴」

男子はバイバイと手を振ってゲートに入ってしまった。

「あれでこのタイムかよ」

スクリーンに表示された結果を見て3年生がつぶやいた。記録は51秒前半の平凡なものだが、ほとんど4分の1は流している。

「いやいやまったく、あの脚でどーしてあんな走りができるのかねえ」

顎に手をやりしたり顔の部長に仲間の3年は

「あんたはどこを見とるんだ」

と白い目を向け、ニツと笑ったイガグリ部長は

「よしみんな。1年にいいところ見せつけられて舐められるんじゃないぞー。行くぞ！オー！」

一人で手を上げてさっさと先頭に立ち、部員たちも笑いながら後続に続いた。

400メートルは最も距離の長い短距離走であり、人間がスプリント（全力疾走）出来る限界の距離だという。限界ぎりぎりの運動を強いられた筋肉は乳酸が大量に蓄積し極度の疲労を起こし、いわゆる「ケツ割れ」という臀部上部が割れるような激烈な痛みを感じることがある。ゴールした選手が四つん這いになって動けなくなっているのが時折見られるが、あれがそれである。大会のスケジュールにもよるが、決勝に進む者は今回の場合で言うところと10時、13時、16時と1日に3回走ることになる。最も過酷なトラック競技と言われることもあるゆえんである。

3組で行われる準決勝でも1年男子は2年3年の選手相手にまだ余裕を残して1着でゴールした。

「マコトくん、こっち向いてー」

と声を掛けたのは他校の女子生徒たちだ。彼は彼女たちの構える携帯のカメラに笑顔のVサインで答え、「キャー」ときいろいろ悲鳴

を上げさせた。

ゲート前まで戻ってくると同級生の女子に

「おーおー、モテモテだねえ」

と角の生えた笑顔で言われた。

「ふっふー。人気者は気分いいぜ」

と憎まれ口を叩きながら、男子はうん？と後ろの席に視線を向け、ちよこんと頭を下げた。

女子が振り向くと帽子を被った中年の男性が『おっ』とちよつと慌てた様子を見せたが、ニヤツと笑って手を振った。女子は誰だろう、どこかで見たような、と思った。

「タッキー。今そこ行くわ」

男子は言ってゲートに入っていく、

「え、ちよつと、こらあゝ」

仲間たちはスタンド裏のシートに帰ってしまい、一人取り残された女子は誰だか思い出せないおじさんに『やあ』と笑顔を向けられて『どうもゝ』と曖昧な笑顔を返し、『さっさと来やがれゝ』と男子を呪った。

トレーニングウェアを着た男子がやってきた。

男子は悪戯っぽい笑顔で

「こんにちは。またお会いしましたね？」

と中年男性に言った。中年男性の方も

「顔を覚えられちゃったかい？」

と悪戯の見つかった悪ガキのような笑顔を見せた。

ちよつとちよつと、と女子がすり寄ってきてこっそり訊いた。

「ねえ、誰？」

「知らない」

「はあ？」

呆れる女子を『なんだよ？』とこっちこそ呆れたように見て、男性に言った。

「中学……どころか、小学校の大会の時から毎回見に来てますよね

？ よその学校のコーチでもないみたいだし、ずいぶん熱心……と言うか、平日の昼間っから暇ですねぇ？」

ははは、と男性は愉快そうに笑った。

「馬場 理（ばば まこと）くん。それと代根 多喜子（しろね たきこ）くん。ま、一応はじめまして。わたしは熱心な陸上競技ファンで、とりわけ、馬場理君、君のファンだ。いかにも暇人に思われるのもしかだから自己紹介しよう。わたしは青陵（せいりょう）大学陸上部コーチの亀潟（かめがた）という者だ。これから、是非、よろしく頼むよ」

1年男子Ⅱ馬場理は相手の正体は分かったものの、やっぱり呆れて訊いた。

「大学のコーチって、小学生の大会まで一々見に行くものなんですか？」

「関係者に知り合いが多いからね、暇があれば顔を出すよ。おっと墓穴だ、自分で暇だと白状しちゃった」

はははと亀潟と名乗る男性は上機嫌に笑った。亀潟はにやけた口元でじっと理を見て言った。

「万全の仕上がりか。決勝が楽しみだね。大会記録、なんてつまらん物を狙っているわけじゃなからう？」

「さあ、どうでしょう？ あんまりでかい口たたくとしばかれますんで」

と言いながら理はとなりをおどけた目で見た。亀潟はニコニコ眺め、

「今の内に予約だ。大学は是非うちに来たまえ。君なら今の時点で内定を約束するぞ」

と笑いながらも本気の声で言った。するととなりの女子が言った。「いえ、駄目です。こいつ、東大経済学部に入学が決まっていますので」

亀潟は目を瞬かせ、

「ほお、君は頭もいいのか？」

と訊いた。

「ええ、もう嫌味なくらいの文武両道のスーパーマンぶりです。欠点はスケベなところだけです」

と女子が注釈した。

「誰が欠点だ。健康な男子がスケベでなくてどうする？」

「あんたはあけすけ過ぎるのよっ」

「むっつり助平よりよかろうが？」

「欠点その2はその口の軽さね」

「仲が良くてけっこうだね」

亀潟に言われて二人は赤くなった。

「ともかく、決勝進出おめでとう。記録、期待しているよ？ ついでにうちの大学のこともよろしく」

ニコニコ笑う亀潟に挨拶して二人は階段を上がり、裏側へ下りていった。

二人の後ろ姿を見送った亀潟は、人のいい笑顔を消すと、ジロツと上の通路に立って双眼鏡を手にしたスーツ姿の男性を見た。

スーツ姿の男性は手すりから身を乗り出すように階段通路に入っていた二人を見ていたが、ふと亀潟の視線に気付き、ばつが悪そうに横を向いた。

亀潟は体を元に戻すと、

「どうやら俺以外にも熱心なファンがいるようだな」
とうそぶいた。

03、母を捜す男

スタンド裏のコンコースには各校がブルーシートを広げてバッグを置いたり休憩したりするのに使っている。

午後1時のレースをまたいで理は昼食を2回に分けて取っていた。1年女子Ⅱ代根多喜子がいっしょにいた。

「はい。おかず。めぐんであげる」

とウインナーや卵焼きの入ったお弁当箱を差し出した。

「どうせあんたはまたコンビニのおにぎりでしょう？」

と、その通り、理はビニールを剥いた三角おにぎりを頬張っていた。

「仕方なから、店の売り上げに貢献せにゃ」

理の父はコンビニの雇われ店長をやっている。実は理が食べているのは店の前日の売れ残りのおにぎりだ。具材は保ちのいい梅干しとおかかだ。

「大会の日くらいねえー」

多喜子は呆れたが、

「バーカ。食い慣れた物がいいに決まってるだろう」

と、多喜子が用意してくれた箸を使ってウインナーをパクリと食べた。

「と言いつつ食べてるしー」

と多喜子が嬉しそうに言うのと、

「だから食い慣れたもん」

と卵焼きをつまんだ。多喜子は赤くなりながら

「このー、たかりの常習犯め。あんたはカラスか」と睨んだ。

「ふっふっふー、この俺にそんなこと言っているのかなあー？」

「なによお？」

「父さんだって大事な一人息子の晴れ舞台に売れ残りだけってのも

ひどいだろう？ 開けてみ」

理に示されたクローラーボックスを多喜子は引き寄せふたを開けた。中にはコンビニのデザート各種が入っていた。

「おおお、豪勢ええ」

多喜子は手を合わせて喜び、

「好きな食っていいぞ。全員分はないからな、他の女子にも教えてやれ」

「それじゃいったっきまあゝす」

多喜子はプリンアラモードのカップを取った。

「あんたどれがいいの？ 取っておくように言っとくよ？」

「俺はいいぞ。ま、大丈夫だと思うけど、食中毒なんて起こさないようにさっさと食べちまえ」

「駄目だよおー、せっかくお父さんが用意してくれたんでしょ？」

「いいよ。学生レコード更新のお祝いに新しいシューズねだる予定だから」

「おお、言ったな？ ビッグマウスめ。じゃあねー、もし本当に学生レコード更新できたらあ……、帰り道、あたしが何かプレゼントしてあげようか？……」

「へえー？ 何？」

「何がいい？」

「うーん……」

理はモグモグ口を動かして考え、多喜子は胸をドキドキさせて見守った。

「そうだなあー。綾瀬先輩の着替え写真」

バシーンと多喜子の平手が理の頭を張った。

「こおりのおー、エロ男子があゝ」

「あははは、冗談冗談。じゃあさー、本当に俺の欲しい物くれる？」

「なによおー？ ブラジャーとか言うんじゃないでしょうね？」

「くれるんなら欲しいけど」

「……………」

むっつり白い目で睨んだ多喜子は、理の綺麗な瞳にじっと覗き込まれて思わず狼狽した。

「まさかパンティー………」

多喜子は理のまっすぐな瞳を黙って見つめ返した。理が言った。

「おまえさあ、まだ………」

と、その時である。

「おお、いた！ こいつうっ…」

3年の先輩が大声を上げて向こうからやってきた。理の視線がそっちの方を向き、多喜子は内心『チッ』とお邪魔虫な先輩を睨んだ。青春ドラマにはお約束な展開である。

「馬場あゝ…」

どういうつもりか両手を広げて向かってきた先輩は、

「こおらっ、山崎い！」

柱の陰から出てきた3年女子の先輩にウェアの首を掴まれて引っぱり返された。

「あんたあ、せっかくのムードぶち壊しやがってえ、この、唐変木！」

「なんだよ、吉岡あ？ うわっ」

3年女子の後ろには柱の陰からわらわらと女子部員たちが現れて怖い顔でデリカシー欠如の3年男子を睨んだ。

「山崎先輩のバカ！ セっかくいいところだったのにいっ！」

「え？ な、なんだよ？」

女子たちの睨みに山崎はたじたとになった。

多喜子は呆れた。

「吉岡先輩。華子まで。あんたらこそそこで何してんのよ？」

「悪い、タツキー！ さ、続きをどうぞ！」

「できるかっ！」

多喜子はすっかりプンプン怒ってしまった。覗き女子たちのリーダー吉岡は仕方ないと肩をすくめ、

「マコくゝん。それ、いただいちゃっていいのお？」

「ええ、どうぞ」

「そいじゃ、いただきまあす」

と、女子たちはわらわらとクーラーボックスに群がってコンビニスウィーツをきゅきゅと取り合った。

「あのー、俺……」

一人寂しく突っ立つ山崎に、吉岡は

「あん？ 何よ？」

とエクレアをくわえて冷たく訊いた。

「俺も残ったんだよ、タイムで残り2人に入っさ。俺、初めて決勝進出したんだぜ？」

感極まって泣き出しそうな山崎に、同級生の吉岡は

「あつそ。おめでと。じゃ、頑張って」

とまったく無関心に言った。

「馬場あゝ」

練習仲間の先輩に泣きつかれ、理は

「はいはい、先輩。頑張りましたよね」

となだめるように穏やかに言った。

すっかりいつも通りのおちゃらけた顔に戻ってしまった理を見て多喜子はため息をついた。

恨みを込めて先輩吉岡に言った。

「なんかうちの部って緊張感なさ過ぎじゃありません？」

午後4時。女子の決勝レースが終わり、入れ替わりに男子がコースに出て練習を始めた。最初は皆長袖長ズボンのウェアを着たまま23本軽いダッシュをして感触を確かめている。やがてウェアを脱ぎ、ユニホームになるとスタートブロックを微調整して本格的にダッシュの練習をする。

北光高校のユニホームは黒地に赤と白のデザインが入った男子はランニングシャツにぴったりした短パンタイプだ。

審判によって練習が止められ、選手たちはそれぞれのスタート位

置に着いた。

選手紹介のアナウンスがされる。

『男子400メートル走決勝レースです。日本記録は1991年高野進選手の44秒78。ジュニア記録は2010年東洋大学有田希選手の45秒10です。このレースではジュニア記録更新が期待されます。ご注目ください。それでは選手紹介です。内側より第1レーンを空けまして、

第2レーン、北光高校、山崎勉選手』

山崎は緊張でガチガチになった顔で手を上げ、挨拶した。

選手たちが紹介されていき、

『第8レーン、北光高校、馬場理選手』

パチパチパチと大きな拍手が鳴った。スタート・ゴール地点のスタンドはびっしり観客が席を埋めている。特に前の方は各校入り乱れて女子が占領している。

理は手を上げ、スツとお辞儀した。

口元にリラックスした笑みを浮かべているが、目は、まっすぐ先を見つめ、さすがに真剣だ。

理は身長175cm。色が白く、あまり日焼けしないようだ。

柔らかな肩と脚をしている。他の選手のようにガチガチの筋肉をしていない。脚が長い。

第9レーンまで8人の選手が紹介され、いよいよスタート。

『オン・ユア・マーク』

各選手腰を下ろしラインに手を付く。

『セット』

膝を伸ばし尻を上げ、ぐっと前傾し、静止する。

間を置かず、

パアンツ。

スターターピストルが白くスパークし、8人一斉にスタートした。理のスタートダッシュは速い。まさに弾丸のように飛び出し、自然に体を起こすと飛ぶように大股でタータンをスパイクが「パタパ

タパタ」と軽い音を立てて蹴っていく。

選手たちが直線に入ってくるとスタンドは興奮にわいた。先頭で後続を引き離して走るのは理だ。圧倒的に速い。決勝を走る1年は理一人で、他はすべて3年生だ。

観客から思わず「すごい！」と声が漏れた。理の走りは歩幅がとにかく広い。バネの付いた足で軽やかに跳んでいるように見える。実際はスパイクで一步一步はるか後方へものすごい脚力で蹴り飛ばしている。

コーナーでも内側から追い立てられてくることもなくラストの直線も独走だ。しかし今度は流すことなくまったくフォームを崩すことなく脚の回転もトップスピードを維持したまままっすぐゴールを切った。

わーっつと歓声と拍手がわいた。2着以下がどどどつ、と駆け込んできて、理もさすがに肩を上下させてハアハアと大きく息をついていたが、座り込むようなことはなく、スクリーンに結果が出るのを待った。観客たちも正式な記録が出るのを今か今かと待ちわびた。出た。

『只今のレース、ジュニア記録が更新されました。1着第8レーン北光高校馬場理選手、45秒05のジュニア新記録です。おめでとうございました！』

わああーつとまた盛大な拍手が起こった。理も嬉しそうに満面の笑みで両手を上げて拍手に答え、大きなカメラを構えた報道カメラマンたちが寄ってきて盛んにシャッターを切った。ゲート付近に帰ってくるとテレビカメラを前にテレビや新聞のインタビュウを受けた。インタビュウから解放されると「マコトくーん！」と女の子たちの声が降ってきて、理はそれにも笑顔で手を振った。そんな女の子たちの声を押しのけるように

「マコー！ ナイスラン！」

と大きな声が降ってきた。理は親指を立てた手をぐっと伸ばし、声、多喜子に答えた。どうだ！という得意満面の顔に多喜子も『に

くっいたらしい奴』と鼻にしわを寄せながら嬉しくて堪らないように笑っていた。

上の方から双眼鏡で熱心にあのスーツ姿の中年男性が理を見ていた。彼はレースもずっと双眼鏡で理の姿を追いつ、今もじっと理の顔を見つめている。興奮した女の子たちの影に理が隠れてしまうと、ようやく双眼鏡を下ろし、

「間違いない…、彼だ！」

と興奮したように口走り、慌てて、新しいスター誕生にわく観客席を「すみません、すみません」と人を掻き分け必死に前に出た。

「すみません」

女子高生の白い目に睨まれながら最前列に出た男性は必死に理に訴えた。

「馬場理君！」

理は男性のただならない様子になんだろう？と見上げた。

「君に大事な話があります！是非、聞いてください！」

身だしなみの良い紳士の必死な様子に理は首を頷かせ、

「あっちで」

と北光高校の横断幕の張られたサイドスタンドを指さした。

男性は頷き、ほっとして笑顔になった。

多喜子は理の見上げる男性の横顔を不思議そうに見つめた。

中年紳士が人のまばらなサイドスタンドで落ち着かなく待っている、と、

「すみませーん、こっち」

と裏への通路の陰から理が手招いた。紳士は緊張した面もちで小さく頷き、足早に通路に向かった。

スタンド裏のコンコースはどこも学校のブルーシートでいっぱいだが、ほとんど人は出払っている。周りに誰もいないのを見渡して理は紳士を巨大なコンクリートの屋根の下へ招いた。

「すみません、こんな所まで呼び出しちゃって。なんだか深刻そう

な様子だったんで」

仲間内では大いばりで偉そうな理も年長者への礼儀はわきまえて頭を下げた。

「いやとんでもない。突然すみません」

紳士も頭を下げ、

「わたくし、こういう者です」

と、ていねいに皮の名刺入れから名刺を1枚取り出して理に渡した。

佐津川グループ会長室 室長 高美 俊尚

とある。

「高美（たかみ）と申します」

「はあ。佐津川グループの……。僕にどういうご用でしょう？」

「はい……。すみませんが確認させてください。あなたのお母様は馬場理花さん、旧姓明川理花さん、でよろしいでしょうか？」

「ええ」

「はい。…お母様は……」

「母は8年前に亡くなりました。僕が小学2年生の時に」

「そうなのですね。交通事故に遭われたのですね？ まことに残念です。まことにぶしつけではありますがこちらも至急を要することでああなたのお母様については是非お聞きしたいことがあるのです。お父さまはコンビニエンスストアで店長をなさっておられるのですかね？ 今日は何時頃お戻りになられますでしょうか？」

「今日は10時半頃帰ると思います」

「そうですか。では、遅くで申し訳ありませんが11時頃、お伺いしてもよろしいでしょうか？」

理は困った。

「そう言われても僕からは…」

「是非、よいとおっしゃってください。あなたに関することなので

す!……」

言ってから、紳士Ⅱ高美は、つい口が滑ったと苦い表情を浮かべた。理は冷静な目でそれを観察して言った。

「つまり、それは僕の父親について、ということですか?」

高美は後悔するような痛ましい顔になった。

「ご存じ……なのですか?……」

理は平気な顔で答えた。

「ええ、知ってます。僕と父は血はつながっていません。父から聞きました」

「そうでしたか……。それならば、言っではなんですが話が早い。そうです、あなたの父親に関することです。慎重を要することなのでここでは言えないのですが……。お父さまにお会いしたときにお話しいたします」

「それなら父を訪ねたらよかったのに」

「そうでしたねえ。しかし、一刻も早く自分の目であなたを確かめたかったものですから。確かに、お父上に先にお会いすべきでしたが、あなたを見たら、いても立ってもいられなくなってしまっ……」

高美はどこか懐かしいような目をして微笑んだ。

「いや申し訳ない、まだそうと決まったわけではないのですが、あなたにお会いできて嬉しかったです。それでは今夜、よろしいでしょうか?」

理も仕方なく笑って答えた。

「ええ、いいでしょう。父が帰ってきたら驚かしてやりますよ」

高美は微笑みながら、ふと、心配そうな陰を作った。理は察して言った。

「まあ……大丈夫でしょう。息子から言うのもなんですが、父もなかなか面白い人間ですよ?」

「そうですか。それはお会いするのが楽しみです。それでは、よろしくお願ひします」

高美は頭を下げ、もう一度しっかり理の顔を脳裏に焼き付けると、微笑んで外に向かって歩き出した。

紳士が行き過ぎるのを待って、多喜子は柱の陰から出てきて理に近づいた。

「こら、盗み聞き」

「聞こえてない聞こえてない」

多喜子は慌てて手を振った。

「でも、誰？」

「ん~~~~」

理は名刺を見せてやった。

「佐津川グループ会長室室長？」

ふうーんと多喜子も消えていった紳士の背中を目で追った。

「さすが上等なスーツ」

「おまえ紳士服なんて分かるのか？」

「なんだって一級品は見れば分かるわよ」

「へえ、そりゃ大した鑑定眼で」

「で？ そんな偉い人があんなになんの用なのよ？」

「偉いのか？」

「偉いでしょー？ あの佐津川グループの会長の直属のナンバー1でしょ？」

ふむと理は考えた。高美は柔和な笑顔を見せていたが、上品な顔立ちと鋭い知性を感じさせるきりつとした目をしていた。年は40後半といったところか？

室長というのは単なる秘書という役回りとも違うのか？

「やっぱ、偉いかなー……」

理は興味津々といった感じの多喜子を見て、なんでもないことのようにぽつりと言った。

「実はさ、俺と父さん、血はつながってないんだ」

「え……………」

言われた多喜子の方が衝撃を受けて顔が凍り付いてしまった。

「……………」

何か言いたいのだろうか言葉が出てこない。理は面白そうに眺め、ふっと優しく微笑んだ。

「実はそうだったんだよ。いずれ分かるときが来るかも知れないからって中学に上がるときにな。血液型の上では母さんがA型、父さんがB型、で、俺がAB型で、ばれないんだけどな、まあなんのきっかけがあるか分からないからな、教えておくって」

「……やっぱり、ショックだった?……」

多喜子は聞いてしまったのが後ろめたいように落ち込んだ顔で訊いた。

「いやー、そうでもなかったなあー」

理はまるで人ごとのように過去の自分を思いだして言った。

「面白いなあ、って感じだったかなあ?」

「はああ?」

多喜子は呆れ返った。

「あんたとことん超然としてるわね? 自分の身の上まで面白いがるわけ??」

「しょうがねえじゃん」

理はニヤニヤ怒る多喜子を見て言った。

「自分の生まれなんて自分でどうこう出来る訳じゃなし、俺は俺だ、変わりやしねえもん」

「おーおー、さすがオレ様キングね」

「それになー」

理は首を傾げ、遠くを見る目をして、微笑んだ。

「俺、子供心にも父さん母さんに愛されてるって分かったからな
……………」

多喜子をクリッとした目で見て、

「ほら、俺ってやたら可愛い子だったじゃん?」

多喜子もニヤニヤ笑った。

「そーそー、よく女の子と間違われたもんねー？ あ、それは今もか？」

「うー、部長のセクハラ思い出した。あの人の目は洒落にならなくて怖いぞ？」

「そうだよね」

多喜子は自分を納得させるように言った。

「あんたたち、すごい仲のいい親子だったもんね？」

「そうだな」

理は多喜子から目を逸らし、嬉しそうに笑った。

「それで……、あなたの実のお父さんは、誰なの？」

「分かんない」

「教えてもらえないの？」

「いや、父さんも知らないって」

「はあ？」

多喜子はまた頭が混乱した。

「そんなこと……ないんじゃない？ あなたのお父さん、あなたが誰の子かも知らないであなたを自分の子どもとして育ててたって言うの？」

「まさにその通り」

「本当かなあー？ 自分だったら……かなり抵抗あると思うし、お母さんだって……」

多喜子は言いづらそうに上目遣いで理を覗き見た。

「母さんが何を考えていたのかは、謎だ。父さんと母さんはまだ俺が母さんのお腹の中にいるときに結婚したんだ。その赤ん坊の父親が誰なのか？ それは訊かない約束だったってさ。でも俺が大人になったら教えてくれる約束だったそうだけど、その母さんが事故で突然死んじゃって、真相は母さんといっしょに墓の中ってことになっちまった」

「そうだったんだあ……」

多喜子は長いつき合いの中で幼なじみの家族にそんな秘密のあつ

たことを思ってやはりちよつと暗い気持ちになってしまった。

多喜子は理の手の名刺を見て、また上目遣いで理を見た。

「もしかして、あなたの本当のお父さんが……………」

「うーん…」

理は名刺をぴらぴらさせて言った。

「そうなのかな。ま、今夜はつきりするだろう」

理は男子400メートル優勝の表彰を受けた。本日の日程もほぼ終わり、スタジアムを後にする学校も多かったが、表彰の行われるメインスタンド中央はまた女子高生を中心にいっぱいになった。

表彰台の一番高いところで贈呈されたトロフィーを高々掲げて手を振る理の顔は得意さで明るく輝き、出生の秘密が明かされるかも知れないという不安などまるで見受けられなかった。

ちなみにいっしょに走った3年の先輩山崎は8位入賞で賞状を受け取り男泣きに泣いてスタンドの温かい失笑を買っていた。

北光高校はスタジアムと同じ市内にある。市外の高校の生徒たちはまとまって貸し切りバスや路線バスに乗っていったんそれぞれの学校に向かうようだが、理たちは簡単に現地集合現地解散だ。

家が近所の理と多喜子は路線バスに乗り、バスを降りてからもいっしょに歩いた。

家の近所まで来て、空が赤く染まり辺りが薄暗くなった中、多喜子は思いきったように言った。

「マコ。あのさ、優勝と、ジュニア記録更新のプレゼント……………」

「ああ、そっか」

理は立ち止まり、多喜子に向かい合い、多喜子はじっと理を見上げた。

「うん、ま、いいや」

理のあっさりした返事にドキドキしていた多喜子は拍子抜けし、
「なによそれえ〜」

と眉を寄せた。

「んー、じゃあさ、今度映画見に行こうぜ？」

「うん！ いいよ。付き合ってあげる！」

機嫌の直った多喜子に理は意地悪く笑って言った。

「思いつきり怖いホラー映画な？」

「えーっ、やだよそんな悪趣味なのぉー」

「そうか？ 暗闇で思いつきり怖がられるんだぜえー？」

理が何を想像しているのか分かって多喜子はスポーツバッグを振ってドン！と理のお尻を叩いた。

「あんたの頭じゃエロしか詰まっとらんのか！」

「あっはははー。じゃあなー、また明日」

理は逃げるように軽く走って分かれ道で多喜子に手を振った。

「うん。また明日」

多喜子もなんだかんだで笑顔で手を振った。理の背の高い後ろ姿を見送って、嬉しそうに頬を染めて自分の帰り道を歩き出した。

04、血のつながらない父

10時半、予定通り父忠穂が帰宅した。

「よお、ニューヒーロー。ニューレコードおめでとおっ!」

玄関から忠穂は上機嫌だった。

「なんだ、もう知ってんの?」

「ああ。近所のおばさん情報。夕方のニュースで映ったってさ。よお、このやろう、女の子の声援がすごかったらしいじゃないか? いやあ羨ましいねえ」

アルコールを飲まない忠穂がすっかりナチュラルハイでいい気分になっている。

「はいはい。鼻が高いだろう? せいぜい出来のいい息子を自慢してくれ」

「店にでっかい写真張り出してみるか? 女の子のお客が増えるかな?」

「勝手にしてくれ。ところで父さん、これから客があるぞ」

「客? うちにか?」

「うん」

理は高美の名刺を差し出した。受け取った忠穂は首を傾げた。

「佐津川グループって、あの佐津川グループか? うちになんの用だ?」

「やっぱり心当たりないか? 俺の父親のことで話があるようだよ?」

忠穂はビクツとして息子を見つめ、目を瞬かせた。

「おまえの父親、この人なのか?」

「いや、本人じゃないだろう。ま、落ち着いて飯にしてくれ」

「なんか喉を通りそうにないけどな」

忠穂は手洗いをしてテーブルに着くと店の売れ残りの弁当を食べだした。セリフの割りにはパクパクとハイペースでご飯とおかずを

口に運んだ。理は「ゆっくり食べる。もたれるぞ」と注意して、高美との会話を話した。

「ふうーん、なるほどねえー」

忠穂はさっさと弁当を食べ終え、お茶を飲みながら言った。店から帰ってもこれから仕入れのチェックなどまだ仕事は残っている。

「会長……じゃあないだろうなあ？ たしか佐津川グループって先代が一代で築いたワンマン企業だろ？ その先代ってのがその会長さんだろうな？ なら、もうけっこうな年だろう？ いくらなんでもなあー……」

忠穂は妻との関係を考えてさすがに苦い顔をした。

「会長じゃなけりゃ、その息子か……」

どっちにしてもあまり面白くない顔の父に理は訊いた。

「佐津川グループって、でっかいんだよな？」

「ああ。母体は、運送業か？ いろいろ手を伸ばして、今じゃ化学工業から医薬品から小売業まで、かなり幅広くグループ会社を従えた県下随一の複合企業体だぞ？」

「金持ち？」

「超の付く大金持ちだろうぜ？」

忠穂は複雑そうな顔で息子を見た。

「実はおまえがその大財閥のお坊ちゃんだったとはなあー」

「そうと決まった訳じゃあない、と、高美さんも言ってたぜ？」

「なんだろうな、その含みのある言い方は？」

「至急の事情、とも言ってたからね、あんまりいい事情とも感じなかったな」

「そうか……」

忠穂は壁の時計を見た。

「じゃあ俺は軽くシャワーだけ浴びてくるわ。その高美さんが来たら待たせておいてくれ」

「わざと長シャワーして意地悪すんなよ？」

「んなガキみたいな真似するか」

忠穂はブスツと立ち上がり、理はニヤニヤ見送った。

忠穂は熱いシャワーを浴びながら、

『ま、あいつの人生だ』

と自分の気持ちをニュートラルに切り換えた。

しかし忠穂がシャワーを浴びて戻ってきてても高美氏はまだ来ていなかった。忠穂は

「遅いな？」

と時計を見て言った。11時を10分回っている。

「だな」

理も困った顔で言った。

「俺明日も早いんだけどなあ」

「じゃあ寝ろ。話は俺が聞いておく。どうせ俺は後2時間くらい起きてるから」

「そう。じゃ、よろしく」

おやすみー、と部屋を出ていく息子を見送って、

『眠れるのかよ？』

と忠穂は怪しんだ。きっと気になって寝付けないのだろうか……

『これで眠れたら大した大物だぜ』

と内心笑いながら、

『いや、あいつなら本当に眠っちゃうかもな？　なにしろあいつの

子だからなあ……』

とも思った。

果たして、仕入れ計画表を書き上げて2階の部屋の前でそつと様子を窺うと理はぐーぐーいびきをかいて眠っていた。

「大した大物だぜ」

忠穂は呆れ返った。

結局、高美氏は馬場家を訪れなかった。

朝、電話を取ったのは理だった。

電話を掛けてきたのは高美氏だった。

眠そうに顔をしかめながら忠穂は理が話すのを見ていた。

『昨夜はまことに申し訳ありませんでした。事情が、その、急変いたしまして、そちらへ伺うことが出来なくなっていました。まことに申し訳ございませんでした。また後日、日を改めましてご連絡させていただきます。まことに……残念です……。それでは、申し訳ございません、失礼いたします……。』

ほぼ一方的な会話を終え、高美氏は電話を切った。

「ださ」

と理は内容を伝え、忠穂は、

「なんでえ、それ？」

と言ったが、面白くなく顔をしかめ、表情を曇らせると言った。

「良くないこと……が起ったかな……」

忠穂は息子を心配したが、

「そうかもね。じゃ、俺、もう出るから」

とカバンを肩に玄関に向かった。

「早いな？もう行くのか？ 車で送って行くぞ？ 店に寄って差し入れ持ってけよ？」

「いや、コンビニならスタジアムの前にもあるから」

「なんだよお、他の店で金使うな」

「今日はさ、」

靴を履きながら理は父を振り返って照れた笑いを浮かべた。

「タツキーのレースがあるんだ。あいつ絶対すっげー緊張してるだろうからいっしょに行ってやる」

「そうかよ」

忠穂もニヤニヤ息子を見た。

「多喜子ちゃんによろしくな。しっかり応援してやれよ？」

「かえって緊張を煽りそうだけどな。じゃね」

「おう。おまえも頑張れよ」

忠穂は息子を笑顔で見送り、ドアが閉まってしばらくしてから眉間に深いしわを寄せた。

「嫌なことにならなければいいがな……。まったく、理花、俺に面倒押しつけて先に死んじまうなんて、俺は一生許さねえからな」

05、彼女の出番

県高校総体陸上競技会、大会3日目。

今日は多喜子の出場する100メートルがある。理も4×400メートルリレーの予選がある。4×400メートルリレーは今日の予選、明日の決勝の2本だ。

朝のウォームアップをしながら

「今日のカモシちゃんの状態はどうかナー？」

とイガグリ部長のスケベな手が理の太ももからお尻を撫で上げた。

「部長く」

「うむ、今日も完璧なようだな」

部長はムフフと気色悪く微笑み、

「いや、マジで、おまえの脚はどうなってるんだ？」

メガネの奥から鋭く下半身を見つめながら言った。

「昨日400、3本走って凝りも見られん。おまえはどれだけ特別な筋肉してるんだ？」

「さあ？」

理は肩をすくめた。そんなこと本人だって分かりようがない。

「こいつなんかもうガチガチだぞ？」

昨日念願の8位入賞を果たした山崎を指して言った。

「トレーニングウェアの上から見ただけでなんで分かるんだよお？」

と山崎は口を尖らせたが、

「バーロー、てめえ歩きがよたよたしてんじゃねえか？ 午後のリ

レー大丈夫かよ？」

と部長は睨んだ。

「ううー…、自信ない」

「マジでオーダー考えにゃならんな」

「そんなあ」

泣きつく山崎を足蹴にして部長は腕を組んだ。1年生の理は作戦

は上級生に任せて、多喜子に話しかけた。

「おまえは準決勝とか決勝とか考えなくていいから全力で行け。当たって砕けるだ」

「ええーい、うるさい！」

多喜子はヒステリックに早口で言った。相当ナーバスになっている。こいつは子どもの頃から内弁慶の上がり性だからなあと思っただ。

「相手は2年3年なんだからさ、勝負の駆け引きなんて考えられる実力はまだないだろう？」

「あんたは決勝進んで優勝して、おまけにジュニアレコードじゃない？」

「俺はどうやら特異体質みたいだからな。生まれながらのドーピングみたいなもんだ」

「えーえー、あんたは特別よ。まったくもう、嫌味な奴」

いつもの言葉も冗談ではなく本気みたいだ。理はリラックスさせるのを諦めた。

「じゃあ頑張れ。応援してるからな」

多喜子はふっと、自分が怖い顔に固まっていたのに気づき、慌てて「あ、ごめん…。ありがと…」

と言った。

「長いつき合いだよなあ俺たち」

理は腕を組んでニヤニヤした。

「うるさいなあ、もー…」

多喜子は顔を赤くして横を向いた。

理と山崎は夕方のレースに備えて体を休めておくように言われ、理は朝一番の女子100メートル予選の応援にゴール地点に向かった。

「おはようございます」

「よっ、おはよう」

「今日も朝からご苦労様ですねえ？」

「今日は君のレースは4時の1600メートルリレーだけか？」

「それまでいるんですか？ 大学の部のコーチはいいんですか？」

「勝手にメニニューをこなしているさ」

理は呆れて、地元の国立大、青陵大学の陸上部のコーチだという亀潟のとなりに座った。

「昨日はおめでとう。さすがサラブレッド、見事な走りだった」

「いえいえ。頑張っちゃいました」

「見たかい？」

亀潟は地元の地方新聞を差し出した。理は受け取って眺めた。

「いえ。うちは新聞は一日遅れなんですよ」

理が読む新聞は父が店で読んだお古だ。

「スポーツ欄を見たまえ。君が載っているよ」

開いてみると、でかかかとゴールをフィニッシュする理の写真とインタビュアーに答える上半身の写真が載っていた。理は眉を上げ、呆れたように笑った。

「地元の甲子園並の扱いですねえ？」

「当然だろう。高校1年生でジュニア記録更新だ、ひよっとすると来年にはもう35年ぶりの日本記録更新、世界陸上、オリンピック出場だって当然ありえるぞ？」

「どうでしょうね？」

理は新聞を閉じて亀潟に返した。

「僕は多分もう、そんなに伸びませんよ」

「おい、なんだよ、まだ1年のくせに、引退が見えたロートルみたいに言いやがって？」

「僕はね、なんというか、見えちゃうんですよ、自分の『先』がね」
理は涼やかな目になって言った。

「自分で言うのもなんですが僕は起用で、たいていなんでも人より上手く出来てしまうんです。どうすればいいか？ パツと道筋が見えてしまうんですよ。自分の体だってそうです、この体をどう使った

ら一番上手く、速く走れるか？ もう見えてしまっているんですよ。僕の記録が伸びるのは後ほんのわずかです」

「なるほどな」

亀潟は顎に手をやって無精ひげを掻き、ニヤリと優越的に笑った。

「君の欠点が分かった」

理ははて？という顔をした。

「君は器用すぎて自分の限界を突破するという、不器用な一般人が成長する上で何度も経験するチャレンジを知らないのだ。俺みたいな一般人は何度も『駄目だ』と思いながら『こんちくしょう』とその壁を這い上がって、ぶち破って、成長してきたんだ。君は、自分に甘いな」

理は新鮮な驚きを感じて目をパチパチさせた。

「そうなんでしょうか？」

「ああ、そうさ」

亀潟はコーチらしく自信満々で言った。

「君の潜在能力はまだまだ君が一般レベルで思っているようなものじゃない。君の内には素晴らしい無限の可能性が秘められているのだ。もっと高いレベルに立って自分を見つめ、引き上げろ！ 君の伸び代は学生レベル、日本レベルの物じゃない、世界レベル、人類レベルだ！ 頑張れよ！？」 君は自分が思っているよりずっとレベルの高い人間だ。この俺が保証するよ！」

理は亀潟の大げさな言いようが可笑しくて笑った。

「それはすごいですねえ？ なんだか本当にオリンピックに出られる気がしてきましたよ？」

「おう、そうだ、その通りだ。でも、大学はうちに来てくれよ？」

「考えておきます」

「よし。昨日よりだいぶうちの株が上がったな？」

二人は笑って、

「さて、そろそろ君の彼女の出番かな？」

レースに注目した。

二人は正確にはゴール少し手前の位置で見ている。向こうの方でスタートした選手たちが徐々に斜めに迫ってきて、横向きに通過し、ゴールしていく。予選は選手紹介のアナウンスもなく淡々と進行していく。

4組に多喜子が登場し、スタート、理たちの前を通過して、ゴールした。選手8人とも大きなばらつきなくゴールに駆け込み、多喜子は上位だったが順位は微妙なところだ。

「どうだ？」

亀潟は理に訊いた。理は身を乗り出し、

「代根ー、ナイスラン！」

と大きな声を掛けてやった。多喜子は驚いて振り向き、ニッと笑ってVサインをした。亀潟はニヤッと笑った。

「てことは？」

理は答えなかったが、顔は明るく微笑んでいた。スクリーンにすぐに結果は出ない。レースが進行し、だいぶ経ってから前の方のレースの結果がやっと出た。

4組で多喜子は2着だった。準決勝進出である。

「おっ、よかったな」

亀潟はけっこうな厚さの本のプログラムをチェックして言った。

「23年に混じって準決勝進出はたいしたもんだ。だがなあ……」
ゲート付近で結果が出るのを待っていた多喜子は「よしっ」と両手を握って喜び、理と応援してくれていた女子たちに小さくガッツポーズを見せ、別の誰かに笑顔で手を振った。理はうん？とゴールの方を見た。

「ああ。ちょっと失礼します」

理は立ち上がり、そちらに向かった。

「おはようございます」

笑顔で挨拶する理に、

「マコちゃん。おはよ。昨日の試合、テレビと新聞で見たわよお？」

「かつこよかったじゃない？」

「あはははは。どうも」

理はまいったなあと頭を掻いた。日よけのつば広の白い帽子を被り紫色のサングラスを掛けてニコニコ笑っている、多喜子の母だった。

「最近ご無沙汰ねえ？　また前みたいにうちに遊びにいらっしやいよお？」

「いやあ、この年になって女子の家に遊びに行くのはちょっと……」
厚顔無恥の理もさすがに彼女の母親相手にセクハラトークは出来ない。

「あら？　色気づいちゃってえー。うふふ、マコちゃんならお家に入ってくれてお婆さんは大歓迎よ？」

うふふと笑いかけられて、理の方がまいったなあとやられた顔になった。多喜子の母はなかなかおしゃれで、明るくチャーミングな人だ。今は髪に隠れているが（小）悪魔のように尖った耳が多喜子とそっくりだ。小柄な人で、この点娘は大違いだ。理も背が高いが、多喜子もクラスの女子で一番高く169ある。つい猫背になる癖があるので理はよく「背筋を伸ばせ！」と腰を叩いて公然とセクハラネタにしている。

仲のいい母娘だ。近所の幼なじみで母子ぐるみの公園づきあいであつたこともあり、小2で母を亡くした理は多喜子の母を見て、ああ母さんも生きていたら今頃は、とよく思ったものだ。母の葬式では多喜子の母もぼろぼろ涙をこぼしていたのを印象的に覚えている。たしか理の母より4つ年上で、今年47歳だったと思う。今の47歳なんて若いものだ。

「マコちゃん、ますます理花さんに似てきたわねえ？　そっくりね？」

と、多喜子の母は懐かしそうに言った。

「おかげさまで、男女を問わずモテモテです」

「まあっ。いいわねえー？」

母はニコニコ笑い、理に訊いた。

「あの子、準決勝はどうかしらねえ？　ずいぶんマコちゃんにライバル心を燃やしていたみたいだけど、身の程知らずって言うか、相手は2年生3年生だものねえ？」

「簡単じゃあないでしょうけど、でも1年で予選突破しているのは他にもいますよ。タツキーのタイムだとレース次第ってところでしようね」

「そう。じゃあ一生懸命応援してあげなくちゃね」

ね？と多喜子の母は理に笑いかけた。理も笑って

「はい。応援します」

と答えた。多喜子の母は理がいた席を見て、

「あちら、どなた？」

と亀潟のことを訊いた。

「青陵大学陸上部のコーチですって」

「ああ、そうなの。たしか中学の時の大会でも見た覚えがあるなあって思ったんだけど？」

「暇なコーチですよねえ？」

理は笑って、

「僕、青陵にスカウトされてるんですよ？　君なら既に内定だって」

「あらいいわねえ？　でもマコちゃんは東大経済学部でしょう？」

「違いますって」

「東大じゃあ……」

多喜子の母は競技の終わったトラックを見た。

「さすがにあの子には無理でしょうねえ……」

理は口を曲げてどうしようかなあと横目で多喜子の母を眺めて考え、ええい言っちゃえ！、と顔を向けた。

「ねえお母さん」

多喜子の母はうん？と理を見上げた。理はちよつと赤くなつて多喜子の母の顔を窺いながら言った。

「僕をタツキーの家庭教師に雇いませんか？」

「アルバイト？」

「お代はお茶菓子でけっこう。雇ってもらえたら、大いばりでタッキーの部屋に入れますからねえ」

「あら、」

多喜子の母はニヤツと理を睨んだ。

「さすが大胆ねえ？」

「母親の監視付きでさすがに大胆なことなんて出来やしません」
うそぶきながら理も顔をまっ赤にしていた。母は笑って。

「ま、多喜子と相談してからね。勝手に決めたらあの子絶対怒ってへそ曲げるから」

「前向きな検討をよろしくお願いします。お母様」

「はい」

多喜子の母は楽しそうにニコニコ笑った。

お昼の準決勝、理はサイドスタンドの端に回って真っ正面から見た。ここは学校の団体応援は禁止されている。理の他に他校の女子生徒が2、3人ずつ仲間の応援に来ていたが、理を見て『きゃっ』と嬉しい悲鳴を上げていた。

準決勝は3組。各組上位2着とタイムでプラス2名が決勝に進出する。多喜子は第1組に登場した。

スタートし、全力で走り、ゴールした。ゴールの瞬間多喜子は『どうだろう？』という不安の表情をした。

正面から見ている理も順位は分らない。

「代根！、ナイスラン！」

理が声を掛けてやると多喜子は軽く手を上げ、ぎこちない笑顔を見せた。多喜子は母親にも手を振った。

2組目が走り終わったところでスクリーンに1組の結果が表示され、多喜子は3位だった。

最終3組が走り終え、2組3組の結果が出て、多喜子は祈るような顔でプラス2名の発表を待った。

残念ながら多喜子の名前は出なかった。多喜子はガツカリして、うなだれてゲートに入ろうとした。

「タッキー」

すぐ上から声を掛けられて多喜子は反射的に顔を上げた。理が優しい顔で見下ろし、言った。

「おまえ頑張ったぞ。自己記録更新だろ？ いい走りだったよ」

多喜子は青白い顔を前に向けるとゲートに入ってしまった。

理はしょうがない奴め、と腰に手を当て、ふと振り返って多喜子の母と目が合って苦笑いした。

理は下へ下りて多喜子を捜した。

多喜子は競技ユニホームのまま柱の陰でコンクリートの壁に向かって肩を震わせていた。ぞろぞろ歩く高校生たちがあーあと見て見ぬ振りをしていく。

理は多喜子の後ろに立ち、しばらく待ったが、

「こら、猫背」

と声を掛けた。

「胸を張れよ。おまえはベストを尽くしたんだからさ、勝った相手を称えてやれよ？」

「うっ、うっ、うるっ、さい！……」

多喜子はぐずぐずとすすり上げながら言った。

「どうせあんたなんか、わたしの気持ちなんか……」

肩をしゃくり上げる背中に、

「おーおー、負け犬の気持ちなんか知りたくねえよ」

と憎まれ口を言い、理は地面に投げてあるスポーツタオルを取って肩に掛けてやった。

「おまえは頑張ったって。おまえは負け犬なんかじゃないよ」

多喜子は向こうを向いたまま手を後ろに伸ばして理のトレーニンググウェアの胸を掴むと顔を見られないように素早く振り返り、理の胸ぐらを掴んで

「わあああん」

と声を上げて泣いた。

「おーお、よしよし」

理が頭を撫でると多喜子はますます大声を上げて頭を理の肩にくっつけた。理は両手を多喜子の肩に置いた。

「頑張ったよ、タッキー」

あーあ、見られてるだろうなーと背中に人の行き交うのを感じ、『俺たちって、青春だなあー』
と思った。

多喜子に鼻をかませて、顔を洗わせて、みんながアップしているサブグラウンドに連れていった。

「多喜子。惜しかったわね？ でも、ナイスラン！」

先輩に誉められて多喜子は赤い目で照れくさそうに笑った。女子の先輩は後ろの理と見比べて

「ほっほおー」

といやらしく笑った。

理はテントで休んでる山崎の所へ行った。

「先輩！ やりましょうね、決勝進出！」

「うえー」

とイガグリ部長にやりこめられた山崎はやる気のなさそうな返事をした。

「無理だろう？ おまえと青木はいいけどさあー、俺と井上じゃあなああーん」

とまるっきりやる気が失せてしまったようだ。青木というのがイガグリ部長の名前だ。部長は3000メートルの選手だ。

「ああー、そうですか？ ……先輩、表彰台に上がってみたいくありません？」

「表彰台ー？」

寝そべっていた山崎がいささか光を取り戻した目を上げた。

「そりゃなあ、一度くらい上がってみたいけどさあー…」

「上がりましょうよ？ 俺は上がる気満々ですよ？」

「ほんとなあ？」

「ええ。ただし、いくら俺でもリレーで一人で表彰台には上がれませんからねえ？ 走りましょうよ、全力で！、限界の壁をぶち破って！」

「なんだよ？ おまえってそう言うキャラだったっけ？ まあまだ2ヶ月だけのつき合いだけどさあー」

山崎はむっくり起き上がって理の顔を覗き込んだ。

「行けると思うか？」

「行きますよ、俺はね。何せ俺には無限の可能性ありますから」

「はああ？」

山崎は目を輝かせて自信満々の理を見ているうち、ヒツ、と笑い出した。

「俺はこれがラストだもんな。よおし！ やるぜ、1年坊主！」

「やりまっしょお！」

「こおらこら、おまえら二人だけでなに盛り上がってんだよお？」

部長と井上もやってきた。リレーメンバーは理以外の3人は3年生だ。

「よし、やっぱこの4人で行くぞ。山崎い、てめ、死ぬ覚悟しろよ？」

「おまえら卑怯者だな？ おまえらは長距離じゃん？」

「そうだ、俺たちに期待するな」

「天下御免の卑怯もんだな？」

理は仲のいい先輩たちの憎まれ口の言い合いをニヤニヤ見ていた。

「よし、馬場。やっぱおまえに任せるわ」

「周回遅れだけは勘弁願いますよ？」

「するか、アホ！」

4人で笑い合い、

「よおーし！ 行くぞお！」

部長が出した手に3人手を重ねた。

「ほっこー、ファイツ、」

オーッ！、と、グッと手を押して、声を上げた。

盛り上がる男子リレーメンバーに女子たちから

「がんばれよー」

とからかい混じりの声援が飛んだ。

夕方の4×400メートルリレー、女子は1着で決勝進出を決め、男子も2着で決勝進出を決めた。

第1走を必死で走った山崎は

「俺、陸上やって良かったよお」

と大喜びし、他の二人も「やったぜえ！」と盛り上がった。

アンカーの理はハアハア息をつきながら、スタンドを見上げるとニツと笑い、勝利の親指をグッと立てた手を多喜子に突き出した。

多喜子は『よしっ』と口で言ってガッツポーズを取った。

理は『どうだ！』と腕をまだ熱心に観戦していた亀潟にも向けた。

多喜子は、あ、いたんだ？、と亀潟を見てちょこんと挨拶した。

多喜子の母は残念ながらも帰ったようだ。

帰り道。理は途中のスーパーで多喜子にアイスをおごってやり、二人で食べながら歩いた。

「おまえさ、あのコーチと話してたろ？ 何話したんだ？」

あの後亀潟は多喜子を手招いて何事か話していた。理はちよつと気になっていた。

「あたしは中距離の方が向いてるんじゃないかって言われた」

多喜子はちよつと不服そうに言った。

「うん…、そうか……」

「なによお？」

睨む多喜子に理は言いづらいなあと目を泳がせながら言った。

「たしかにそっちの方が向いてるかなと思ってさ」

「えー、そうかなあ？」

多喜子はふてくされて下を向いた。

「なんだよ？ そんな顔すんなよ？」

理はアイスを囓って、言った。

「おまえはバネもあるし持久力もある。中距離が向いていると正直俺も思うがなあ？」

「その代わりショートトラックに欠かせない爆発力がないって」

「嫌なのか？ 中距離？」

「嫌じゃん、負けるみたいで……。あんたこそ、どうして100じやなくって400なのよ？ 速いくせに？」

「俺はスタートが駄目だ」

「ええ？ うっそお？」

「俺は100じゃトップになれねえよ。400が一番身体能力を発揮できる……って言うかライバルが少ない」

「ジュニア記録出しておいて何を言いやるのよ」

多喜子は肘で理を小突いた。理は笑い、言った。

「そもそもさー、なんで陸上部入ったんだ？ おまえ高校はテニスがいいなあって言ってたじゃん？」

「だって……、そう言って誘ったのにあんたが陸上部入っちゃったじゃん……」

「テニスはおまえの方が上手いからやだ」

「今やあたしの唯一あんたに勝てる勝負なのにい……」

理は多喜子の蹴りを笑ってよけた。多喜子は「フンッ」と鼻息を荒くし、ちよつと悔しそうに言った。

「テニスだって、どうせ本気でやればすぐあたしよか強くなるくせにさ……」

「さあ、どうかな」

「あんたってさ、1対1の勝負は避けるよね？」
痛いところを突かれて理もむっつりした。

「そりゃそうよね、誰と何やっても勝っちゃうんだから、そりゃ友だちなくすわよね？」

多喜子はわざと怒らせることを言って理の顔を覗き込んだ。

そうだ、こいつは何をやっても本当に上手だった、と多喜子は振り返った。

多喜子は5月生、理は1月生で、子どもの頃は多喜子がお姉さんで背も高く、たいていなんでも多喜子の方が上手に出来た。

ところが。ああ、そういうばあんなことがあったっけと思い出すのは小学4年生の時だった。

教室の掃除をしていて、たまたま数人の男子と女子は多喜子が一人居る教室にいた。多喜子はその頃から背が高く、自分より背の低い男子たちが「やーい、のっぽ」と多喜子をからかった。多喜子は「なによ、ちび」とやり返したが、これが男の子たちのプライドをひどく傷つけてしまったようで、本気で怒ってしまった。「なんだよ女子のくせに」と迫ってくる男子たちは、多喜子自分の方が背が高く運動神経も良くて強いと思ったが、本気で怒った顔で迫ってくる男子たちはやはり怖かった。

そこへ理が現れたのだ。理は男子たちの後ろから

「そうだ、でかいからって威張るな、女」

と言った。多喜子は幼なじみの理までがと悲しくなったが、理はずいとお前に出て多喜子を指さし言った。

「てめえ、威張ってられるのも今のうちだからな。ぜってえーすぐにおまえより背が高くなってやる！」

と思いつき力んで言った。当時はまだ多喜子の方が5センチも背が高かった。多喜子は「ちび」の理がいきがるのが可笑しくって思わず噴き出した。

理の登場で男子たちは「今に見てろよデカ女！」と現時点での「負け」を認めることになって、他の女子たちも帰ってきて一件落着となった。

5年生になって、春の身体測定の時には理の方が5ミリ高くなっ

ていて、「ざまあしろ!」と大いばりした。「はいはい、よかったね。悔しいわ」と呆れ返ったふりをしながら多喜子は内心嬉しかった。それから多喜子は背が伸びたが、理はもっと伸びた。

子どもの頃は何をやっても自分の方が上手かったのに、理は何もかもみーんな自分を追い越していく……。

多喜子から目を逸らしていた理は、はあっと息をついた。

「天才ゆえの孤独だよな……」

「自分で言って哀愁に浸るなよ」

多喜子はアイスの残りをぺろぺろ舐めて食べてしまった。

「ま……、あたしはさ、子どもの頃から慣れてるからさ、あたしは、あんたを見捨てたりしないからさ……」

言いながら多喜子は下を向いた。

「猫背」

「うるさい」

家々の壁を夕陽がまっ赤に染めている。

理が思い出したように言った。

「そうだ、おまえじゃあハードルやれよ? おまえ反応はいいからな、上手いんじゃないか?」

「そっか。ハードルも短距離だもんね? やってみよっかな?」

多喜子は新たな希望にっこり微笑んだ。

「やっと機嫌治った。あーめんどくさい」

「うるさいなあ」

二人の家の分かれ道に来た。

「じゃあな、また明日」

「うん、また明日」

06、意外なつながり

4日間の大会の最終日。

理はコンビニで父から差し入れのクーラーボックスを渡されて多喜子とは別のバスに乗った。父が店長をするコンビニは家から歩いていける距離だったが家の近所とは別のバス路線になる。

スタジアムコンコースの青シートにカバンを置き、サブグラウンドのテント前に行くと部員たちが集まり、多喜子ももう来ていた。

「よっ、おはよう」

と挨拶すると、

「うん……、おはよう……」

と、どうも多喜子はぼうっとした元氣のない様子で返事した。理はやっぱ昨日決勝に進めなかったのが堪えているのかなと思ったのだが……。

4×400メートルリレー決勝は大会最後のレースだ。最終日は終わるのも早く、3時にはすべて日程が終わる予定だ。

高校生たちには3日間の大会の慣れと疲れと、ああ今日でお終いだなあ、という祭りの後の寂し的な雰囲気漂っている。

理もさすがに脚に疲労を感じ、リレーメンバーの先輩たちと軽いアップとバトンパスの練習をして、無理のないように過ごしていた。正午に弁当Ⅱ相変わらずコンビニの売れ残りおにぎりを食べに北光高の青シートに上がると、いそいそと多喜子がやってきた。

「はい、おかず」

と自分の義務のようにお弁当箱を出してくれて、理は

「サンキュー」

と箸を受け取った。

「あのさー、マコ。あのー…、お父さんの話、どうなった？」

「ああ、あれ」

理は肩をすくめてみせた。

「あれつきり。案外あっちの早とちりの人違いだったのかもな？」

理はこともなげに言っておかずとおにぎりにパクついたが、多喜子はなんだか、

「そうなんだ……。あのさ、ひょっとしてね、いや、違いかもしれないんだけどー……」

と、はっきり言いたいことを言わない。

「なに？」

おにぎりをモグモグしながら訊くと。

「いやあー…、やっぱり違うかなあー……。あのさ、マコの実のお父さんって、佐津川家の、重要人物かもしれないんだよねえ？」

「かもな。推測だけど」

「それでさ、………今、たいへんなことになってるかもしれないんだよねえ？………」

多喜子は理の顔を窺いながら慎重に訊く。

「そうみたいだな。至急、と言いながら、事情が急変して、ってぱったり連絡をよこさないんだからな」

「そう………なんだよね……。あのね、マコ」

「なに？」

「間違ってたらごめん！」

多喜子は最初に手を合わせて理を拝んだ。

「あのね、もしかしたらあたし、マコのお父さんかも知れない人、知ってるかも知れない……」

多喜子は不安そうに理の反応を見た。

「ふむふむ。それで？」

理はおかずに箸を伸ばしながら促した。多喜子は理が食べるのを眺めながら話した。

「お父さんの友だちでタツミさんっていう人がいるの。お父さんの高校時代からの親友で、ずっとテニス仲間で、あたしも子どもの頃

からお父さんに連れられてよくテニス場で会ったの。去年までずっと、月1くらいで会ってたかな？ 今年になってから、あたしも受験と入学で忙しくて、お父さんもなんだか用事があるとか言っ
て別の所に出かけているみたいで、しばらくずっと会ってなかった
んだけど……、実はタツミさん、病気だったらしいのね。去年の末
からずっと入院していたらしいの」

多喜子は理の表情を窺い、理は口をモグモグさせながらふむふむ
頷いて先を促した。

「あたしずっとタツミさんは名字で、お父さんにもタツミおじさん
ってなんて名前なの？ って訊いたことがあるの。そしたらお父さん
は『あいつはタクロウって言うんだ』 って教えてくれたの。でもそ
れ、嘘で、ほら昔食いしん坊の俳優がいたじゃない？ その食いし
ん坊に掛けてのあだ名だったのね。そのタツミおじさんが……、危
ないらしいの。昨日お母さん途中で帰っちゃったでしょ？ お父さ
んに携帯で呼ばれて、いっしょに入院している病院に行ったんだっ
て。かろうじて意識を取り戻して、お父さんお母さんに頷いてみせ
たけど、それっきりだったって……。それでね、わたしも子どもの
頃からずっと仲良くしてもらって、よくアイスとかケーキとかおご
ってもらって、ラケットももらったりして、だからおまえも万が一
の時にはお通夜に挨拶だけでもしてほしいって。それで教えられた
の、タツミおじさんの本当の名前。おじさんね、本名は、」

多喜子はじっと理を見つめて言った。

「佐津川 辰巳、っていうんだって。佐津川グループの会社の社長
をいくつも兼任する、佐津川グループの現当主と言ってもいい、会
長さんの長男なんですって」

理は口をモグモグさせて、

「ふうーん」

と言った。

「あのー…、それだけ？」

モグモグ、ごっくんと飲み込んで、理は言った。

「やっぱ違うんじゃないか？」

「？ あんたの实のお父さんじゃないってこと？」

「そう。俺が実の息子なら、せめて一目だけでも、って呼ばれるんじゃないか？ 放ったらかしってことは、やっぱり俺は違ったってことじゃないの？」

「そっかー…、じゃ、違うんだ…。」

多喜子は自分を納得させようとしたが、やっぱりどうしても納得しきれないようだった。理は言った。

「それに、俺、多分その人に会ったことあるぜ？」

「えっ!？」

「覚えてないのか？ 小学校の…3年の時かな？ 日曜におまえんちに遊びに行ってきた、これからテニスに行くって言うんで、おじさんがいっしょに来るかい？って誘ってくれて、いっしょに連れてってもらったじゃん？ それで俺もラケット借りていっしょにテニスしたぜ？」

「そう……だったっけ？」

「覚えてないのか？」

理は多喜子を不思議そうに見たが、ああ…、と思いついてニヤリとした。

「分かったぞ。おまえ、俺に負けたのが悔しくて忘れてるんだ？」
多喜子はむっとした。

「テニスであんたにセットで負けたことなんてないわよ!」

「ほおーらそうやってムキになる？ だから忘れてるんだよ。タツミさんって、背が高くて、筋肉質で、髪の毛の量が多くてすごく癖があって、イケメンの人だろう？」

「…そう……。よく覚えてるわね? ……」

「最初俺とおまえで試合して、俺はおまえに一方的に負けたんだ。そしたらタツミさんが俺にコーチしてくれて、次の試合で俺が勝ったんだよ。そしたらおまえ、インチキだあ! って大泣きして、みんなでなだめるのに必死だったんだぜ?」

「……うっそだあ、そんなことないよお………」

「あつたんだよ。俺はタツミさんに教わってアングルショットばかり打ってさ、それでかろうじて勝ったんだよ。そうしたらおまえはそんなのインチキだあ、って怒って泣いちゃったんじゃないか?」

「……………あつた……………かな? ………………」

「どうやら多喜子は思いだしたようで赤くなった。ギロリと理を睨み、

「あんなのインチキだ」

と子どもの頃と同じことを言った。理は肩をすくめた。

「はいはい、すみません。だから俺はちゃんとリターンしてるだろ?」

「あ……………」

多喜子は髪を振り乱した。

「悔しい……………」　　なによおっ、じゃあ今もあたしの方がテニス強いのはあんたがアングル狙いを封印してるからなの?　　キイ……………」

多喜子は理を絞め殺しそうなポーズを取った。理は笑って、いたわるように多喜子を見つめた。

「おまえは、大丈夫か?」

「え?」

「ずいぶん良くしてもらったんだろ?　泣くおまえをなだめるのにそのタツミさんが困ってたのを覚えてるよ。おまえ幼稚園児みたいにイヤイヤをしないでずいぶんタツミさんも困らせてたよなあ?」

「そう……だったかなあ……………」

多喜子は急にしゅんとした。

「お父さん、なんであたしを病院に連れていってくれなかったんだろう？」

「多分タツミさんの方が遠慮したんだろう。なんの病気だった？」

「急性白血病だった」

「そうか……。じゃあ、無菌室に入ってたんじゃないか？ 面会も制限されていたろうし、きつと…、子どもの頃から知っているおまえに病気で弱った自分を見せたくなかったんじゃないかな？」

「そっか……。うん……。素敵な人だったものねえ……………」

「頭のいい人だよな？」

「うん？」

「教えるのが上手かったもん」

「そうだね」

多喜子は今になって親しい人の入院というショックが収まって、その人が今日明日にも死んでしまうかも知れないという悲しみがじわじわと溢れてきたようだ。

瞳の潤んできた多喜子に理は

「泣いてもいいぜ？　そういうのは表に出しちゃった方がすっきりするぞ」

と言った。多喜子は潤んだ目で恨めしそうに理を睨んだ。

「あんたこそ平気なの？　ねえ？　本当にタツミおじさんはあんたのお父さんじゃないの？」

理は考え、言った。

「ふうー……。ん。そういうこともあるか……」

タツミさん……と言うより佐津川家が欲しかったのは、長男の息子という後継者じゃなく、タツミさんの近親者かも知れない」

「どういうこと？」

「白血病の治療は化学治療と骨髄の移植だ。骨髄は確か白血球の型が合わなくちゃ駄目で、これは遺伝で決まるから、どうだったかな？、2分の1×2分の1で、兄弟同士で4分の1の確率、親子は……かなり下がるだろうな？　それでも赤の他人よりはだいぶ可能性

は高いのか？ タツミさんに兄弟はいるのかな？ いたにして、けつきよく合わなかったんだろうなあ？ それで治療のために少しでも可能性の高い肉親……子どもを、捜していたんじゃないかな？ しかしそれもタイムリミットに間に合わなくなってしまって、今さら捜し出す必要もなくなった……、と」

「あんたさあ……」

多喜子は涙も引っ込んで冷めた哀れな目で理を眺めた。

「実の父親かも知れない人に、そういう見方しか出来ないわけ？」
理はいつも通りのクールな目で多喜子を見た。

「仕方ない。俺がタツミさんに会ったのはその1回きりだもん。実はあれが父親だった、なんて今さら言われても、ふうんと思わないよ」

「実の父親なのよ？」

「と、決まったわけでもないしな」

「あんたさ、お母さんが亡くなったときも泣かなかったよね？」

「そうだったな」

多喜子は理をじいっと見て、

「ごめん」

と謝った。

「あんたがそういう冷たい人間じゃないのは知ってる。ごめんなさい。実の父親に対しても……、わたしなんかには分からないあんたなりの気持ちがあるんだよね？ ごめんなさい」

「いいよ。俺もどうも自分が変な人間らしいのは気付いているから」
「変じゃないよ。頭が良すぎて色々考えちゃうだけだよ」

多喜子は自分の浅はかな感情と言葉にすっかり自己嫌悪に陥ってしまった。

「あたしって、最低だ……」

「おまえこそ、混乱しているだけだ。よく知ってる人が亡くなりそうなんだ、それが当たり前だろう」

「うん……。ごめんね？ うんっ、もうよそう！ あたしはあた

しで一生懸命生きよう！ 仲間を応援しよう！ きつとタツミおじさんもそれを喜んでくれるわ！」

「そうそう。おまえは元気が一番だ」

「なによそれ？」

理のふざけた言葉に多喜子もようやくいつものように笑った。

「あたしもお弁当食べちゃおうと」

自分の弁当箱を開いて食べはじめた多喜子を理は静かな目で眺めた。

良さそうな人だったな、と心の中で佐津川辰巳氏のことを思いながら。

自分があの人に出会ったのはあの一度きりで、あれは全くの偶然だった。辰巳氏の親友である多喜子の父が、それと知って誘ったわけではあるまい。たぶん……………。

4×400メートルリレー決勝、北光女子チームは2位で大喜びだった。総じて女子の方が成績がいい。

男子決勝がスタートし、第1走の山崎が走った。山崎は相当筋肉が疲労し、もう限界のようだった。400メートルファイナリストではあるが、5位とかなり出遅れて第2走者井上にバトンタッチした。1600メートルリレーは第2走者からオープンコースだ。井上は1500メートルの選手だ。スタミナは問題ないが、短距離のスピードではない。第3走者部長青木。青木も3000メートルの選手だ。

審判に順番を指示されスタートラインに並んだ理は冷静を通り越してひどく冷めた目で必死に走っている仲間を眺めた。自分でもひどく冷淡な目をしているのが分かる。多喜子が見たら怯えるだろうと思う。理は自分で分かっている、自分は表面が冷めているときこそその感情はぐつぐつと煮えたぎっているのだ。

『くそ……………』

理はひどく不機嫌で、怒りに充ちていた。その原因がなんなのか、考えたくもない。

1位2位と内側から続々バトンが渡されて各校エースたちが走っていく。目をつり上げて必死の形相で走ってくる青木を見て、理の怒りがカッと表面に燃え上がった。俺は俺だ、走るのは、この俺だ！

「馬場！」

自然なダッシュでバトンを受け取った理は猛烈な加速でコーナーに突っ込んでいった。

ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ

自分の体内で呼吸をカウントしているが、空気は吸い込まない。無酸素状態でひたすら走るマシンと化して全力疾走してトップスピードを極めていく。

ハッハッハッ

自分の呼吸音しか聞こえない。全神経が走ることだけに集中される。1人越し、2人越した。理のスピードはまだ上がる。

・・・・・・・・・・・・・・・・

もはや無音だ。視界も白く狭まっている。自分の走る道しか見えない。

俺は超える、前を走る俺の想像上の理想の走りを、越え、突き抜け、更に先へ。

突然足下の地面が消え、眼前に灰色の壁が現れ、理はわっと反射的に手をついて、抑えきれずに肩からぶつかり、斜めに弾かれ、平衡感覚を失って転倒した。イテッ、と思ったら脚を激痛が突き抜けた。まっすぐ伸びたまま強張り曲げられない。つった。ビシビシビシッ、と激痛が臀部に駆け上がった。イッテエー、と理はのたうち回った。ケツ割れだ。初めてのことだ。頭がガンガンに痛んで、吐き気がした。腹部がビクビクと痙攣を繰り返した。死ぬ、と思った。ようやく聞こえてきた耳にワーワーと人の声がうるさい。

ああ、くそお、うるせえ……………

苦悶しながら、理は意識を失った。

目を覚ますとベッドに寝かされていた。

「マコ？ 大丈夫？」

多喜子がひどく心配そうに覗き込んだ。

「はいごめんね。これ見て」

白衣の男性が理の目をこじ開けペンライトを揺らした。

「はい、オッケー。軽い脳しんとうだと思いますが、23日は静養して、運動は控えるように。少しでも目眩などしたらすぐに病院で検査を受けること。よろしいね？」

医者は理に言い渡し、

「どうもお世話になりました」

顧問の教師が理に替わってお礼を言った。

「まったく無茶苦茶しやがって」

顧問の歴史教師は顔をしかめて呆れ返ったように言った。

「え……と、俺、ゴールしたんですか？」

「それも分からないのか？」

「うーん……」

理は起き上がろうとして、

「無理しないの」

と多喜子に押さえつけられた。

「ゴール、したのか？」

「したよ、もちろん」

多喜子は泣き笑いの顔になって言った。

「優勝だよ？ ナギ、5人も抜いて、1等でゴールしたんだよ？」

ものすごい歓声だったんだよ？ それなのにあんたそのまままっすぐ走って、審判が止めるのも間に合わないで壁にぶつかって倒れて、痙攣して……、もうー、バカあー、すごい心配したんだからねえっ！」

多喜子は最後は怒って理を叱った。

「へー、そうだったんだ……」

ちっとも覚えてないが…、理はそんなに熱くなった自分が可笑しくなって笑ってしまった。

「馬鹿だな、確かに」

ふっふっふっふ、とすっかり笑いのつぼにはまってしまった理を一生懸命睨んでいた多喜子の表情が、次第にほどけて、まっさらになった。

笑っていた理は多喜子の異変に気付いて、真顔になって訊いた。

「どうした？ 何かあったのか？」

「……………亡くなったって。タツミおじさん……………」

「そうか。残念だな」

「うん……。通夜は明日だから、わたしもそのつもりでいてくれって」

「そうか」

理はよいしょと起き上がろうとし、差しのばされる多喜子の手を断って自力で起き上がった。

「それじゃあさ、俺も連れていってくれよ？」

「……行く？」

「ああ。もう一度、ちゃんと会ってみたい」
多喜子は悲しい顔で

「うん」

と頷いた。

07、再会

翌日登校した理は大人気だった。同級生のみならず2年3年の先輩女子たちからも「マコトく〜ん」と声を掛けられ、色紙を持参され何枚もサインし、握手攻めにあった。笑顔で快く応じる理を男子どもは「いいよな〜」とうらやましがり、多喜子は呆れ返り、ちょっと心配そうに見ていた。多喜子とはクラスも同じ1年A組だ。

放課後、元々軽いアップだけの予定で、理と多喜子は挨拶だけで練習は休んだ。ここでも理は大人気で、また感極まって涙する山崎に両手をがっしり握られ、セクハラ部長はご機嫌で理の学生服の尻を撫で回した。記録は大会新記録で、理の計測タイムは400メートル決勝を更に3秒近く縮めるまさにオリンピック級の走りだった。表彰式では山崎が優勝カップをもらい、またも大泣きしたそうだが今度はちゃんとした盛大な拍手をもらったそうだ。ちなみにカップや賞状はいったん顧問が学校に持ち帰り、後日全校集会で改めて他の部と合わせて表彰式が行われる。

部への挨拶を終えた理と多喜子はいっしょのバスに乗り、多喜子の家に向かった。

多喜子の家は古い住宅街にある庭付きの一戸建てだ。

「ただいまー」

と玄関に入る多喜子に続いて

「お邪魔します」

と理が入った。

ワンピースの礼服を着た多喜子の母が出てきて理を見て驚いた。

今日は髪を後ろにまとめている。

「あら、マコちゃん」

「こんにちは」

「どうしたの？」

多喜子の母は娘に目で訊いた。

「マコトもタツミおじさんのお通夜に出たって」

多喜子の母は首を傾げて理に訊いた。

「マコちゃん、辰巳さんをご存じだった？」

多喜子は理の「実の父親」の秘密を家族に話していない。理は神妙な顔で答えた。

「子どもの頃一度だけお会いしました。でも実は僕が用があるのは会社の人で、先日奨学金のことでお話をいただきまして、その相談を」

と、適当な嘘をついた。

「ああ、そうなの。マコちゃん優秀なものねえ」

と母は納得し、そこへ黒の礼装姿の多喜子の父が出てきた。

「おお、理君。お久しぶり」

「おじさん。お久しぶりです」

多喜子の母には中学卒業式、高校入学式で会っているが、父とは一年以上会ってなかったと思う。多喜子の父もテニスが趣味だけあって肩のがつしりした胸板の厚い体をしている。多喜子はどちらかというと母親似のようで、父親は角張った頑丈そうな顔をしている。

「理君も辰巳の通夜に出てくれるのか？」

「一度、お会いしたことがありますよね？」

「ああ、そうだったね。あの時は多喜子が泣いてたいへんだったっけ？」

父親はよく覚えているようで娘を見て懐かしそうに笑った。

「お父さんまで言わないでよお」

と多喜子は頬を膨らませ、

「じゃ、あたしも着替えてくるから」

と階段を自分の部屋へ上がっていった。

「僕はこれでかまいませんよね？」

理は黒い学生服を着ている。衣替えの時期を迎えてほとんどの生徒はワイシャツや半袖シャツになっているが、頑固に学生服を着て

いる者も少数だがいる。理は今日は特別だ。

「うん。かまわないよ。君も来てくれればあいつも喜ぶだろう」

多喜子の父は立派に成長した理を眩しそうに目を細めて見て、優しく、寂しそうに笑った。

「マコちゃん、上がって。麦茶くらい出すわよ」

「それじゃ、お邪魔します」

理は数年ぶりの彼女の家に照れくさそうに靴を脱いで上がった。

式は7時からということで、礼服に着替えて下りてきた多喜子とけつきよくみんなで軽く菓子パンを食べて腹ごしらえをした。話題はやっぱり理の二つの優勝のことで、多喜子の母は、
「リレーもテレビで見たわよ？　すごかったわねえ！？」　100年に1人の逸材ですって！」

と興奮して言った。

「なんだかみっともなかったみたいですねえ」

と理は苦笑いした。理は多喜子の父に訊いた。

「おじさんは辰巳さんとは高校からの親友だそうですね？」

「ああ、そうだよ。俺とあいつもテニスでダブルスを組んで国体に出て準優勝したんだぞ？」

「高校生ですか？」

「ああ、そうだよお？」

「どうだ？という感じで自慢そうに言った。」

「ええっ？　お父さんってそんなにすごかったの？　知らなかった」

と多喜子も楽しそうに目を丸くし、父親は得意満面になったが、
「ま、本当にすごかったのは辰巳の奴なんだけどな。俺はなんかあいつと相性がよくてな。テニスを離れても友だちだったし。あいつは本当にすごいからなあ、何しろ……」

宙を見上げて考え、妻と目を合わせてニヤリと笑い、娘には

「ま、後で教えてやるよ」

と言った。

「えー？ なになに？」

と聞きたがる娘に、

「うん…、まあ…、帰り道にでもな」

と微笑み、皆に寂しさを思い出させた。

6時を回って多喜子の父の運転する車で葬儀場に向かった。

佐津川グループ傘下の会社の経営する大きな葬儀場だったが、さすが佐津川グループの実質的当主の通夜だけに参列者が多く、少し離れた第3駐車場に駐車して歩かねばならなかった。

多喜子の父は長机を3つ並べた受け付けに香典を渡し記帳した。理も記帳だけさせてもらい、受け付けの男性に高美の名刺を差し出し、

「この人がいたらお会いしたいのですが」

と告げた。男性は名刺と記帳の名前を見比べ、

「少々お待ちを」

と他の者を係に呼んで、式場の方へ向かった。

理が列から離れて待っていると、

「理さん」

呼びかけられて理は振り返った。ビシッとした礼服の似合う高美がいささか迷惑そうに顔を曇らせて立っていた。

「理さん。さすがに行動力もおありのようだ」

「すみません、お忙しいところお邪魔しちゃって。その後なんの連絡もないからどうしたのかなあ？ って」

理の反応を見る目に高美は難しそうに眉を寄せ、下を向いた。

「実は僕も辰巳さんを知っていたんですよ」

「えっ」

高美はひどく驚いた顔を上げた。

「たまたま偶然、幼なじみのお父さんが辰巳さんのご友人で、僕も一度子どもの頃テニスに誘われてお会いしたんです」

「あ……………」

高美は思わず口を半開きにし、いかにもしまったという感じで二度三度頷いた。

「ああ……………、そうでしたか……………、代根さんの娘さんでしたか……………」

「ご存じでしたか？」

「ええ、そりゃあ。名前だけはよく存じております。辰巳さんの親友の方ですからねえ。いや、まさかあなたが代根さんのお知り合いとは、うっかりしていました」

「失敗、ですか？」

「いや、そんなことはないが……………」

高美は表情を和らげ苦笑した。

「では代根さんとごいっしょに？」

「ええ」

理は捜して、少し離れて理を待っている三人を見つけ、高美も理の視線で見つけると、『ああ』と頷き、深々とお辞儀した。多喜子の父も不思議そうにしながらお辞儀を返した。

「僕も辰巳さんにお会いしていつてかまいませんよねえ？」

「それはもちろん。会っていつてあげてください。あのこちらの事情については」

「後で、ということ。お忙しいのでしょうか？」

「ええ、まあ」

「僕も、前知識なしに会ってみたいので。自分の父親かも知れない人に」

高美はなんと言っているのかまた難しい顔になった。考え、言う。「それでは、ご焼香を済ませたらそのまま会場を出てくれますか？わたしもタイミングを見て抜け出していきますから」

「分かりました。では後ほど」

理は軽く挨拶して待っている三人の所へ行った。高美ももう一度多喜子の父母にお辞儀して自分の仕事に戻っていった。

「今の方は？」

「会長お付きの偉い人。高美さんって方です」

「そう……」

多喜子の父も心当たりがあるようで頷いた。

多喜子はじつと張り詰めた目で心配そうに理を見ている。多喜子も母親同様黒のワンピースを着て髪を後ろで黒のリボンでまとめている。子どもがこういうかっこうをするとひどく子どもに見えるか大人っぽく見えるかどちらかなと思うが、多喜子は大人っぽいなと思った。

広い会場に500人もの弔問客がパイプ椅子に座り、こりゃあ時間か掛かるなあとと思ったが、高美の計らいで前の方の席に案内してもらえた。

白菊に飾られた真つ白な祭壇に遺影が掲げられている。

軽く斜めを向いて微笑む顔は、爽やかな好男子だった。

享年47歳。

写真は耳の辺りを中心に4割方白髪で最近のものと思われるが、表情ははつらつとして若々しかった。

えらいハンサムなおっさんだなと理は思った。彫りが深く、線がくつきりして、クラシカルな言い方をすれば和製アラン・ドロンだ。自信にあふれながら嫌味がなく、強さに裏打ちされた優しさを滲ませ、上流階級のお坊ちゃんの良い面だけが現れている。

僧侶が入場し、読経が始まると後ろの方のあちこちからすすり泣きが聞こえた。前の方はお偉いVIPさんたちで、後ろの方は平民たちだろうからパフォーマンスではなく心からの涙だろう。現在のところまったく非の打ち所のない好人物だ。

読経が進み、前の席から順に促されて焼香に立った。前の方ではあるがだいぶ待たされ、理たちの番になった。

立ち上がり真ん中の通路に進み、列に並び、1人分ずつ進んでいく。多喜子の父、母、多喜子の順で席の最前列に並ぶ遺族に挨拶し、

焼香し数珠を持った手を合わせ、再び遺族に挨拶して横へ進んで、外側を回って自分の席へ戻っていく。

焼香を済ませ遺族に挨拶する多喜子の父は目を赤く潤ませ、泣き出すのをこらえる歪んだ顔をしていた。多喜子の母は切なそうに眉を寄せてぽろぽろ涙をこぼし、ハンカチで口元を覆っていた。多喜子も悲しそうにぽろぽろ涙をこぼしていた。

理の番になった。左手に並ぶ遺族たちに軽いお辞儀をした。一番内側の老人は分かる。佐津川グループ会長佐津川大吉氏だ。そのとなりの老婦人が奥さんか。さらにとなりで泣いているのが辰巳氏の奥さんか。その向こうは辰巳氏の兄弟たちか？

さっと見て遺族たちの印象を焼き付けた理は、前に進み、いよいよ辰巳氏と面会した。

白木の箱の窓が開いて故人が顔を見せている。

ああ、ずいぶん痩せているなあと理は思った。写真で見るとより10は年寄りに見える。綺麗にお化粧をして、これでもずいぶん良く見せているのだろう。髪の毛も写真通りふさふさしているが、おそらくかつらだろう。苦しい闘病が思われて理も胸が痛んだ。

さて、自分はどうか感じているのだろうか？

理は今の心の状態を忘れないようにして、辰巳氏に目礼し、焼香を終えた。

再び遺族に挨拶し、あちらから挨拶を返されると横へ進んだ。

高美氏が立って式の進行を見守り、理が目で合図を送ると向こうも目蓋を閉じて答えた。

理はあらかじめ多喜子の父たちに断つてあるのでそのまま立っているスタッフたちに目礼しつつ式場を出た。

08、父？の最期

しばらくして高美が出てきた。

「あちらでお話ししましょう」

窓のあるちよっとした小部屋になった休憩所で向かい合って座った。

「まずは本日は辰巳さんのためにお越しいただきありがとうございます」

「いえ」

理は高美の顔を見つめ、首を傾げて訊いた。

「どうやらあなたは単なる会長の部下と言うだけでなく、辰巳さんとも個人的に親しいようですねえ？」

「ええ。わたしたちも幼なじみなんですよ。中学までいっしょでした」

「年も？」

「ええ。いっしょの学年です」

「そのコネで佐津川グループに？」

理の意地悪な質問に高美は大人らしい苦笑いで答えた。

「まあコネと言えばそうですね。我々の時代にはむしろ身元の保証と言うことでコネクションは積極的に採用されていました。まあ確かに、佐津川はその点現在も古い体質が残っていますかな？」

「それで？」

理は本質的な質問をした。

「僕は佐津川辰巳さんの息子なんですか？」

面と向かった質問に高美は駆け引きなしに困った顔をした。

「申し訳ないが、実ははっきりしないのです」

「そりゃ困りましたねえ？」

理は思いつきり渋面を作って詰問した。

「じゃあなんで僕が辰巳氏の息子らしい、ってことになったんです

か？」

「はい……。」

辰巳さんが倒れたのは去年の暮れのことです」

「急性白血病だったとか？」

「そうです。大事な方ですから、すぐさま治療のため最高の処置が施されましたが、経過は思わしくなく、ついに医者から余命を宣告されることとなりました。お父上である会長の嘆きはそれはそれはいへんなもので、医者たちになんとしても命を救えと迫ったものです」

「辰巳さんに兄弟は？」

「弟さんと妹さんがおられますが？」

「二人の型は？」

「型」

高美は何とも苦々しく笑い、白状した。

「そうですね。辰巳さんは投薬と放射線治療を施されながら、骨髄移植のためのドナーを捜されていました。まずはご兄弟Ⅱ弟さんと妹さん、そのお子さまたち。しかしいずれの方々も白血球の型が合わず、ドナーにはなり得ませんでした。わたしも調べてもらいましたが残念ながらお役に立てず。会長は、ええいどこまでも役に立たん奴らめ！、とそれはお怒りになられましたなあ」

「それはまたひどい言いようじゃありませんか？」

「そうですねえ……」

高美は苦笑し、暴露した。

「弟さんと妹さんは、会長が期待されたほど優秀な方々ではありませんでした。そうした失望もあって、優秀なご長男辰巳さんにはそれはそれはご期待が大きく。一方で無能者と邪険にされた弟さん妹さんは当然面白くなく、兄辰巳さんをことあるごとに悪く言われていたようです。そんな噂が耳に入ってますます会長はお二人を遠ざけられ、という悪循環で。それでついそのように悪し様に言ってしまったのでしょうが……。」

「なんです？」

「いえ……。まあ、それで父親の嘆きを見かねた辰巳さんが、ついに告白なされたのです、自分には子どもがいるかも知れない、明川理花さんという女性を捜してほしい、と……………」

「なるほど。それが僕が辰巳さんの子どもであるらしい根拠なわけですね？」

「そうです。明川理花さんはすぐに見つかりました。結婚されて馬場理花さんになっておられました。残念ながら8年前に交通事故でお亡くなりになってらっしゃいました。馬場理花さんには一人の息子がいた。16年前に馬場忠穂氏と結婚されてその息子さんと言うことですが、お二人が結婚されたわずか3ヶ月後に生まれています。俗な言い方で『できちゃった婚』と思われるわけですが、問題なのは、馬場忠穂氏はその4ヶ月前までアメリカの大学に留学されていて、留学中の4年間、一度も日本に帰ってきていないのです。一方で明川理花さんもその4年間一度も海外に出ていません。つまりそこから導き出される答えは……………」

「僕は馬場忠穂の実の子どもではない」

「と、いうことになりますね。そこで我々……と申しますかわたしは、俄然あなたが辰巳さんの実の息子さんではないかと考え、あなた自身を調べました。どうやらあなたは非常に優秀な方らしい。そしてわたしがあなたこそ辰巳さんの実子に違いないと確信したのは、先日スタジアムで見たあなたの素晴らしい走りです。わたしはあなたに間違いない！と興奮したものです」

「何故です？ 辰巳さんが高校時代テニスをやっていて国体で準優勝したというのは聞きましたが？」

「そのレベルではありません。辰巳さんは高校卒業後5年間、海外でプロテニスプレーヤーとして活躍されていたのです。名前は母方の名字タツミ・サイトウを名乗っておられましたが、世界ランクで20位にも入ったことのある大活躍をされました。トップレベルのテニスはコートの上のボクシングと言われるほど過酷なスポーツで

す。スピード、パワー、バネ、反射神経、頭脳、そして高いレベルの持久力。あなたは、その資質をすべて備えている！ あなたこそ、佐津川辰巳の後継者に相応しい！！」

高美は興奮気味に目を輝かせていた。

「5年間プロとして主にヨーロッパで活躍されて、5年のシーズンが終了すると共にプロを引退され、日本に帰ってこられました。当時謎の日系人プロテニスプレーヤーの突然の引退は話題になったものです。その後辰巳さんはお父上とのかねての約束どおり佐津川グループの後を継ぐ修行に入られました。5年間の間にも通信制でアメリカの大学のカリキュラムを受けられて博士号を修得なさいました。たいへん優秀で、努力家です。佐津川グループの小さな部署から始めて、次第に大きなプロジェクトを、ついには主要な会社の社長を兼任するまでになっておられました。実に、素晴らしい方です」熱く褒め称える高美に対して、一方理は冷静そのものだ。

「プロテニスプレーヤーですか。僕が辰巳さんの息子である根拠としては弱いように思いますがねえ？ 僕を捜していたのは、実は骨髄提供のドナーになってほしいからじゃなかったんですか？」

高美ははっと興奮が一気に冷めて肩を落とした。

「正直に申し上げて、最初はそのつもりもありました。会長の意向はとにかくなにかなんでも辰巳さんの命を取り留めることでしたから。しかし……、それが手遅れだろうというのはわたしも、辰巳さん自身も、感じていましたから……」

「入院して半年ですか？ 僕を捜すのにずいぶん掛かりましたねえ？」

「いえ、ですから、辰巳さんはずっと理花さんの存在を黙っておられたのです」

「ああ、辰巳さん夫婦にお子さんはいないんですね？」

「おりません、残念ながら。黙っていたのは子を成せなかった妻への遠慮もあったのでしょうね。辰巳さんがご自分に子どもがあるかも知れないと明川理花さんの名前を明かしたのは今からわずか2週

間前のことです」

「たったの？」

理もさすがに驚いた。先ほど顔を拝見したところではその頃にはかなり末期で、やせ衰え、移植なんて受ける体力は残っていないかったのではないかと思われる。理の驚きを見て高美も悲しく微笑んで言った。

「ええ。ですので、おそらく辰巳さんは最期までお子さんのことは秘めたまま逝ってしまったわけのつもりだったのでしょう。それをつい言ってしまったのは、お父上の嘆きもそうですし、ご兄弟のこともございますし、やはりつらい化学治療でつい弱音を吐いてしまった、というのが真相でしょう。」

さきおとつい容態が急変いたしましたして、私も駆けつけましてお宅へお伺いできずに失礼してしまっただのですが、なんとか意識を取り戻されたときにあなたを呼ぼうか尋ねたのです。そうしましたら辰巳さんは首を振って、『すまない。あれはやはり自分の思い過ごしだ。俺に子はいないよ』とおっしゃって、あなたに会おうとはなさいませんでした。そして昨日、とうとうお亡くなりになりました。ちょうど、あなたがリレーのアンカーを走っていた頃です。わたしもニュースで見ましたが、素晴らしい走りでしたね？ 良いはなむけになったでしょう」

臨終を思い出したのか、高美は目を潤ませて顔を斜めに伏せた。

佐津川辰巳という人はずいぶん愛されていたんだなあと思は感じた。

「理さん、どうでしょうねえ？………」

「なんです？」

「あなたが辰巳さんの実の子どもかどうか、はっきりさせませんか？」

「どうして？」

「どうして、とは？………」

「高美さんは、あんまり僕に会いたくなかったんじゃないですか？」
高美はうっと言葉に詰まった。理が訪ねてきたのを知って高美は最初ひどく迷惑そうな顔をしていた。

「いや、お見それしました。……そう、また面倒なことになっては思ったのですが……。」

あなたは……」

高美はこちらこそ不思議そうに理を見つめた。

「あなたこそ、自分の父親が誰か、知りたくはないのですか？」

「さあ？」

理は両手を上に開いた。

「もちろん興味はありますがね、野次馬根性的な」

「野次馬……ですか？」

高美は理の本心を計りかねて怪しむように首をひねった。

「僕は父親は馬場忠穂で満足してますので。しがないコンビニの雇われ店長ですがね。僕が知りたいのは父親のことより母のことです」

「お母様、馬場、理花さん？」

「ええ。何故お腹の子、イコール僕、の父親と結婚せずに父忠穂と結婚したのか？ その理由は是非知りたいものだなと思います。ま、知ったところで何が変わるものでもないでしょうけれどね」

「何も変わりませんか？ 佐津川グループトップの息子かも知れないのですよ？」

「それに関わる気はありません。面倒、って、そういうことなんでしょう？」

高美はため息をついて椅子に沈み込んだ。

「ええ。そういうことです。しかし」

高美は改めて理を見つめて言った。

「あなたとお話してわたしも気が変わった。やはり佐津川グループを率いるのは佐津川辰巳の息子こそが相応しい。理さん。是非、辰巳さんとの血縁関係を明らかにしていただけませんか？」

「つまり、遺伝子検査？」

「そうです」

「ちなみに辰巳さんの血液型は？」

「O型です」

「じゃあA B型の母とA B型の僕で整合性はあるわけですね？」

「その通りです」

「どうでしょう？」

「是非、よろしく願います」

高美は改まって頭を下げた。

頭を下げられて理はどうしようかなあと困った。先ほど見た佐津川家の人々に、理はあまりいい印象を受けなかった。まあ家族が亡くなったばかりで明るい顔もないだろうが、なんというか、嫌な陰をそれぞれから感じたのだ。まともにいい印象を受けたのは奥さんと思われる泣いていたご婦人だけで。さすが天下の佐津川家の御曹司が妻に迎えるだけにかんりの美人だった。

「理さん？」

期待されて、

「それはまあ、父と相談してから」

と理はお茶を濁した。

「ああ、失礼。それもそうですね。わたしも一度きちんとご挨拶に伺わねば。しかし、あなたも、是非前向きに考えておいてください」
「あはははは……。前向きな野次馬根性でも発揮しましょうかねえー？」

と、元氣のないわざとらしい笑い方をして言った。

「理君」

理を呼ぶ声に高美もビクツと振り向いた。休憩室の外に多喜子たち家族三人が立っていた。

「多喜子の学校もあるし、我々も先に帰らせてもらうことにするよ。君も、もういいかい？」

遠慮がちに訊く多喜子の父に高美は立ち上がり、お辞儀した。

「はじめまして、になりますか？ 佐津川会長の秘書をしております高美と申します。

代根 敬助様、でいらっしゃいますね？」

多喜子の父も懐かしいような笑顔を浮かべてお辞儀した。

「辰巳君から兄のような人がいるとよく聞いていましたが、あなたが、そうですね？ 高美さんですか？ お会いできて嬉しいです」

高美も同じ笑顔を浮かべて言った。

「病院にもお見舞いに来てくださっていたのですね？ わたしはとうもいつもすれ違いだったようで。辰巳さんに代わりましてお礼申し上げます。ありがとうございます」

「辰巳君は……残念ですねえ」

「まったくです。良い人を亡くしました」

故人の大事な友人二人はお悔やみの言葉を言って慰め合った。

「本日はお忙しいところおいでくださいます、まことにありがとうございます」

「いえ。あなたとはまた日を改めてゆっくりお会いしたいものですね」

「ええ。是非。その時を楽しみにしています」

高美は理を見て言った。

「あの件、是非良い返事を待ってます」

「弱りましたねえ」

理は困った笑いをし、高美は微笑んで、それではと代根家の家族にお辞儀して長く留守にしまった職場に戻っていった。

駐車場へ向かう道すがら多喜子の父は理に訊いた。

「あの件って、奨学金？ ひょっとしてどこかに留学でもするのかな？」

「いやあ……」

理は嘘をついたのを申し訳なく思い首を掻いた。並んで歩く多喜子と目で相談し、

「実は僕、辰巳さんの子どもかも知れないんです」と白状した。

「ええっ?……」

妻と並んで前を歩いていた多喜子の父は驚いて振り向いた。四人は道の途中で立ち止まった。

「君が……、辰巳君の子どもだって? それはいつたい……どういうことだい?」

「ああー、実はですねえー……」

理は両親の面倒な秘密を思っただけ今度は頭を掻いた。

「僕、父の本当の子じゃないんです。母の、父と結婚前にできた子でして……。父も僕が誰の子か知らないんですが、どうやらそれが辰巳さんらしいという話でして……」

「本当かい? それは……驚きだ」

「驚きました?」

理はとぼけて訊いた。

「辰巳さんから母とのそれらしい話って聞いたことありません?」多喜子の父は難しい顔をして考え、

「いや……、聞いたことはないなあ……」

と言った。

「そうですか。じゃあ印象的にどうです? 僕、辰巳さんの子に見えます?」

理は自分の顔を指さして言い、多喜子の父は眉を寄せてじいっと理を見つめ、

「さあー……。分からないなあー……。何しろ君のことだって子どもの頃から知ってるし、まさかあいつの子だなんて思ってたこともないしなあ……。……」

と難しそうに言った。

「それ……。本当なのかい?」

「ううーん……。高美さんは『間違いない!』って言ってましたけどねえ?」

「そうかあ……。身近にいたあの人がそう言うなら……。そうなのかあ……」

多喜子の父は突然現れた親友の息子に戸惑いながら真偽を計るようにじいっと見つめた。

「すごいよねえ？」

と多喜子が言い、父親は、

「え？ なに？」

と訊いた。

「だって、マコがタツミおじさんの子だったら、嬉しいじゃない？
：まあ、なんか事情がありそうだからあんまりわいわい喜んじやいけないのかも知れないけど……」

多喜子はそう言いながらやはり嬉しそうな顔をした。たった今最期のお別れをしてきたところで、親しい人の命がこうしてまた身近に引き継がれていることを思うと嬉しいのだろう。

「そうと決まったわけでもないんだけどね」

「それは、はっきりしないのかい？」

「ええ。ですから高美さんは僕に遺伝子検査を受けてはっきりさせてもらいたいって」

「ああ、そういうことなのか」

多喜子の父はグーの手を口に当てて考え込んだ。

「そうだなあ……。そうした方がいいだろうなあ。理君も分かっただろうが、佐津川グループは大きな財閥だ、その血筋となると、色々な思惑を持った人間がいるだろう。歓迎する者も、そうでない者も、両方いるだろうな。そうした者から自分を守るためにも、自分の血筋をはっきりさせた方がいい」

多喜子の父もそうしなさいと言うように頷いた。

「そうですか。じゃあやっぱり、調べてもらいましょうかねえ」

「うん、それがいいよ」

多喜子の父は安心したように微笑み、四人は再び歩き始めた。
歩きながら、何を夢見ているんだか下を向いてニヤニヤしている

多喜子の肩を小突き、睨む多喜子に理は言った。

「辰巳さん、ずいぶんいい人だったみたいだな？」

「うん……。そうだね……」

多喜子は、しんみりと、微笑んだ。

09、父と子の会話

理はいったん多喜子の家に寄ってカバンを取り、いいと言うのを家の前まで車で送ってもらった。馬場家は整備された20年前の新興住宅街にある。ストンとした四角の、代根家に比べればずっと小さな家だ。

理が帰宅してしばらくして父、忠穂も帰ってきた。

「どんな人だった？」

「気になる？」

「そりゃーな、母さんとエッチしたかも知れないヤローだろ？」

「こらこら、息子に向かってなんつーデリカシーのない言い方しやがる？」

忠穂は手洗いしてコンビニ弁当を食べ、理もお湯を沸かしてカップラーメンを食べるところだ。

「どうだったんだよおー？」

「すっげーハンサムで、すっげー優秀で、すっげーいい人だったみたいだよ？」

「ああそうかよ、良かったな」

「何がどういいんだか」

理はズルズル麺を啜った。忠穂は魚のフライをガブツとやって、「おまえが本当にその人の子なら、跡取りにして話にもなるんじゃないか？」

「俺がその人の子だったら父さんはどうだ？」

「おお、そりゃ嬉しいね。せいぜい育ての父親を大事にして贅沢させてくれたまえよ？」

と、にくったらしく言った。

「あーあ、心にもないことを。本当はすっげー悔しいんだろ？」

「おう。はらわた煮えくり返っちまうぜ」

「その火に油を注ぐようで悪いんだけどね、俺に遺伝子検査受けて

くれないかって言うんだ。かまわないか？」

「おまえの問題だ。かってにすりゃいいさ」

「なんだよ、すねるなよ」

理はもうちょっとかまってくれよと話を続けた。

「じゃあさあー、本当に俺が辰巳さんの子で、佐津川家に養子に入ってくれ、なんてことになったら、どうする？」

「だからかってにするがいいさ」

「冷てえなー。俺はさ、父さんの子じゃないのかい？」

忠穂は口をモグモグさせながらむつつり理を見た。理は可愛く目をクリクリさせて訊いた。

「俺がいなくなったら、父さん寂しくない？」

「でかくなった息子なんざ邪魔なだけだ。……と言いたいところだが……、」

「なあに？」

「母さんがいなくなるみたいで寂しい」

理はニツと笑って言った。

「俺毎日部長に尻触られてセクハラされてるんだぜ？　ちなみに部長は男な。それどころかさ、下駄箱にラブレターが入ってるんだぜ？」

『君を見て、ああこの世には美少年という物が実在するのだなと感動しました。弟になってください』

って男の先輩からさ。まあ？　この美貌なら？　男にもそういう気を起こさせちゃうのも、分かる気がするけどさ」

忠穂も可笑しくて笑った。

「てめえでそれを言うかよ？」

「美しいだろ？　俺って？　なにせ、母さんそっくりだもんな？」

「ああそうだな。おまえが母さん似で俺は嬉しいぞ」

「父親までそういう目で俺を見るな」

「いいじゃねえか、血はつながってないんだから？」

「俺が男だってことを忘れるんじゃないぞ？」

「だったら早く結婚して女の子を産め。俺が育ててやる」

「孫を紫の上にするつもりか？ エロ爺い」

「ばあか。その子が大人になる頃には俺もすっかり本当の爺になって役に立たねえよ」

「分かんぞお、最近の子は発育がいいからなあ？」

「そうだな。いくら早くって言っても高校生のうちに多喜子ちゃんとエッチなんかするんじゃないぞ？」

「あんたなあゝ、息子の彼女までエロい目で見てんじゃないぞ？」

「いや、見るだろう、ふつう」

「真顔で言うな。本当に心配になる。だいたいなあ、あんたが再婚すりゃあいいだろう？ ピチピチの若い美人のママなら大歓迎だぜ？」

「おまえこそ中身はただのエロガキか？ 若いピチピチの美人がこんなしがない父子家庭に嫁に来るか！？」

「俺がナンパしてやろうか？ 僕の若過ぎるママになってください、って？」

「この美人の皮を被った不良エロ息子め。再婚なんてする気はない！」

「いいじゃねえかよ、もう。8年だぞ？ いいかげん母さんの思い出に浸るのはやめて、美人の嫁さんとエッチして、自分の子ども作れよ？」

「……うるせ。もうタイムオーバーだよ」

「まだ43じゃねえか？ ちゃんとさー、自分の人生に立ち返れよ？」

「高校生の分際で父親に説教すんじゃないぞ」

「そりゃあコンビニの店長だって悪くないけどさ？ 父さんなら、もっと才能を生かせるいい仕事があるだろう？」

「あるかよ、この就職難のご時世に」

「あーあ、4年間もアメリカの大学に留学してえ？」

「おお、そうだな。俺が身の程知らずの馬鹿だったよ」

「そんなことないだろう？ 前の会社やめたの、母さんが死んだシ

ヨックが原因だろう？」

忠穂は以前地元のエレクトロニクス部品製造の中堅会社に勤め、花形の商品開発部にいたのだ。

「まあな。だが、最先端技術なんてのは8年どころか、1年、半年でもものすごい進化をしてるんだ、今さらもうとても追いつけねえよ」

「そりゃそうかもしれないけどさ。でもさ、父さん、なんかすごい発明をしたんだろ？」

「は？ なんのこったい？」

「前に言ってたじゃん、おまえは将来のことなんて心配しないでいいぞ、おまえには成人したらおまえの物になる貯金がある、って。俺がなんの金だって訊いたら、特許料だ、って言ってたじゃん？」

「ああ、それか。それは俺のじゃねえよ。母さんのだ」

「え？」

理は驚いた。

「母さんのなの？ なんの？ ひらめきの便利グッズ？」

「そんなじゃねえよ。そうだな……」

忠穂はすっかり身に付いた早食いで弁当を食べ終わり、しげしげと理を見つめて言った。

「母さんが処方箋薬局の薬剤師だったってのは知ってるな？」

「うん」

「そりゃ嘘だ」

「なんで？」

「母さんが説明するのがめんどくさいって嘘ついていて、俺もそれを引き継いだ」

「じゃ、本当は？」

「製薬会社の研究員だ。カネギ製薬、知ってるだろ？ あそこだ」

「あれって本社ここだった？」

「本社は東京だろうがな、こっちの大学に共同研究室ってのがあったんだよ」

「青陵？」

「いや、違う。越岡の国際悠久（ゆうきゅう）カレッジ」

「越岡？ 母さん毎日車で出勤してたじゃん？」

「ああ。駅まで車で行って、新幹線で通ってたんだ」

「新幹線通勤か。豪勢だな？」

「おう。母さんは、その研究室の室長だったんだ」

「ひえ〜。あったま良かったんだあ？」

「おう。おまえの学年トップの頭脳は父親譲りじゃねえ、母さんのおかげだ。その研究室も会社が母さんを入社させるためにわざわざ用意したって噂だった。だから今はもうないよ」

「そっかあー……、そうだったのかあー……」

理は感慨深く言い、父親を見ると言った。

「なるほどねえ……。俺、父さんって実はすごい優秀な人だったんだって買いかぶってたんだけど…、母さんから見たらてんで小物だったんだなあ……。…」

「こらっ。どういう感心の仕方してやがる！」

「その上、俺似の、超美人で？」

「あくまでおのれが基準かい？」

「父さんが母さんの言いなりに俺を引き受けても、無理ないわけか？」

「おまえなあゝ、あんまり父親を見くびるなよおゝ」

「あのさあ」

理は笑いながら、澄んだ目で父親を見て訊いた。

「母さんって、どんな人だった？」

「美人」

「それは分かってる」

「ものすごく優秀だった」

「それも分かった」

「楽しい人だったな」

「そうだね。俺の母さんになる前からそうだった？」

「変わらねえよ。明るく、いつも楽しそうにニコニコしてる人だっ

た。おしゃべりだったな。一人でぺらぺらしゃべって、どんどん話
が変な方向に飛んでいった。面白い人だなあって思ったよ」

「ふうーん。惚れてたんだ？」

「ああ。べた惚れだったな」

「なんで父さんなんかを好きになったんだろうねえ？」

「うるせーよ。……そうだな、俺がべた惚れだって、バレバレだっ
たからじゃないか？」

「同情？」

「ちげーよ。俺といっしょだと……、楽しかったんだろ、母さんも
……」

「そういうことにしておこうか」

「そうなんだよ！」

怒る父親を楽しそうに眺めて理は言った。

「自分の子どもが欲しかっただろ？」

「うん？」

忠穂は理の視線をうるさそうに斜に睨んで答えた。

「そりゃまあな」

「なんで作らなかったんだよ？」

「それはな……」

忠穂は仕方なくまともに理を見て言った。

「俺がそういう気持ちを見せると母さんが悲しそうな顔をしたから
だ」

「ううーん……、エッチ拒否？」

「いや、エッチはしっかりしてた。ただし、NGの時は絶対拒否さ
れた」

「なんでかな？ 母さん、父さんを好きだったんだろう？」

「愛していたさ」

「なのに子どもは作らせない？」

「自分の子どもはおまえ一人でいい、って言ってな」

「それ以上は負担が大きいから？」

「おまえをちゃんと愛してやりたいから、ってさ」

「父さんはそれで納得したの？　しょせん他人の子だよ？」

「母さんの子だ」

忠穂はまじめな顔で息子を見つめて言った。

「母さんにとっておまえは特別な子だったんだ。正直俺はそれを面白くなく思ったこともある。しょうがなくおまえの父親をやっていた気持ちもあった。だがなあ……、子どもってのがみんなそうなのか、おまえが特別だったのか分からんが、父親やってるうちにどんどんおまえが可愛くなってきた。俺がおまえを可愛がっていると母さんも喜んだしな。ま、今はこんなでかいエロガキに育っちゃったが、子どもの頃のおまえは、それこそ天使みたいに可愛かったからな」

「いやあ美人に生まれてよかったなあ」

「ばあか」

「それでもさ、やっぱり不満があっただろ？　自分の子どもを持ってない？」

「まあな。だが、母さんが死んで、その気持ちも消えた」

理はじつと父を見つめた。忠穂も息子を見つめて言った。

「母さんは本当におまえを可愛がっていたからな。おまえ、母さんが死んだとき、まったく泣かなかっただろう？」

「うん。そうだったね」

「ずいぶん心配したんだぞ？　どうかしちまったんじゃないかと？」

「あれはさ、」

理は顔を逸らして照れ笑いを浮かべて言った。

「信じてなかったんだ、母さんが死んだなんて。子どもがてらにテレビの真似して推理してさ、死んだのは替え玉で、母さんは本当は生きているに違いないって疑ってたんだ」

「そうだったか。ひどい事故だったからな……」

忠穂は痛ましく思い出して顔をしかめた。

「おまえには……母さんを会わせられなかったからな……」

「ひどい状態だったんだろ？」

「ああ。俺だってそれが母さんだなんて信じられなかったからな。何かの間違いだ、誰か、似た車の似た誰かの間違いに違いないって……信じたくなかった……」

「でも、母さんだったんだろ？」

「ああ。間違いなく、な。」

右折信号の交差点に直進の車が突っ込んできたんだ。まっ赤なスポーツタイプの外車が、派手にクラクションを鳴らしながら猛スピードで突っ込んできた。避けると思ったんだろうな。運転していたバカ者はアクション映画の主役にでもなった気でいたんだろう。だが、トラックが右折してきて、赤いスポーツカーは避けられずに後部に激突した。斜めに弾かれたスポーツカーは左車線で止まっていた母さんの車にまともに突っ込んだ。母さんは即死だ。瞬間的なショックで、痛みを感じる間もなかっただろうことが唯一の救いだな。遺体は母さんだった。それは、間違いない」

「そうか。母さん、まさか自分がそんなところで死ぬなんてまったく思いもしなかっただろうな」

「ああ、まったく。でなきゃこんな面倒な問題に答えも残さずに逝っちゃうもんか」

「だね」

二人はすっかりしんみりしてしまった。理が気を取り直すように話題を変えた。

「母さんの取った特許ってなんだ？」

「ああ、……めんどくせえ。遺伝子療法って分かるか？」

「うーん……。病気の患部に遺伝子を注入して細胞に正常な働きをするよう促す、ってな感じ？」

「まあそんなとこ……なんだろう。それでだな、その問題の細胞に正確に確実に遺伝子を注入する方法ってのが難しいらしいんだが、その画期的な方法を、母さんは開発したらしいんだ」

「それってさ……、ノーベル賞ものの発明じゃないの？」

「そうかもな」

「それってさ、研究室、っていうか、企業のものにならないの？」

「そうだな、母さんの持つてるのは特許の一部なんだろうが。母さんは基礎理論を大学時代に論文で発表していたんだ。あまりに画期的すぎて、大学の教授も付いていけなかったようだな」

「へえー、母さんって本当に天才だったんだ？」

「その通り。天才だ」

「父さんたちどんな会話してたんだよ？」

「いや、もっぱらしゃべるのは母さんで、俺はもっぱら聞き役だ」

「話なんて分からなかっただろう？」

「ちんぷんかんぷんだ」

「よく結婚してもらえたねえ？」

「うるせえよ」

「じゃあさ、特許料なんて、一部でも莫大な額になってるんじゃないのの？」

「いずれはな。特許ってのは金儲けに利用されて初めて金になるもんだ。母さんの技術もまだマウス実験段階で、実際の医療に使われるまでには至っていないんだろう」

「母さんが死んで8年も経つのに？」

「母さんが死んじゃったからそれだけ経っても実用化されないんだろうぜ。俺たちばかりじゃなく医学にとっても重大な損失だったわけだ。もっとも医療技術は俺のやってた機械技術と違って結果が出るのも時間が掛かるし、その結果を何重にも検討して安全性を計る必要があるからな、それだけ時間が掛かるんだろう」

「そうかあ、母さんってつくづくすごい人だったんだなあ。知らなかったよ」

「だからだなあ」

忠穂はおっほんと咳払いしてわざとらしい渋面を作ってた。

「おまえはわざわざ佐津川家に養子に入る必要なんてないんだ。母さんの子として大いばりしてりゃあいいんだよ」

理はニヤニヤして言った。

「うん。そうするよ。父さん、」

「なんだ？」

「俺の父さんでいてくれてありがとうよ」

「フン。その感謝の気持ちを忘れないで、将来母さんに代わってせいでいい金儲けして親孝行しろよ？」

「うん。そうしたら父さんに美人のメイドさんを雇ってやるよ」

「そういうつまらんことは考えんない」

「酒も飲まないのに頬を赤くしている父を見て理は楽しそうに微笑んだ。」

10、血筋の暴露

日曜日。

理は約束していた多喜子との映画デートに出かけた。

父忠穂は今日も朝からコンビニに出勤している。

お客の少ない日曜午前は忠穂が一人で店にすることが多い。今日も一人でレジに立ち、近所の常連のおばちゃんの話し相手をさせられていた。

「『ウィークリーサンデー』のスポーツコーナーで理ちゃんの40メートルとリレー、映ってたわよー？　すごいわねえ？　全国テレビよ？　理ちゃんもいよいよ全国的なスターね？　かっこいいからアイドルに、なんてスカウトも来るんじゃない？　それに比べてうちのバカ息子ときたら、高3で大学受験の準備しなくちゃならないのに、まったくもう、部屋でテレビゲームばかりやって。今どき大学なんて一流を選ばなければどこでも入れるなんて言ってるねえ？　私立なんて行かせてやる金ないからね！　って言うんだけど、ねえ？　まったくやる気ないの。ほんと、バカで困っちゃうわ。理ちゃんはいいいわねー？　スポーツ特待でどこだっ入るでしょう？　頭だっいいし、やっぱり東京の大学行くの？」

おばちゃんのおしゃべりに内心辟易しながら忠穂は愛想笑いを浮かべて言った。

「いやあ、どうでしょうねえ？　あいつもものんびりしてますからね、ぎりぎりまで決めないで、けっきょく地元の大学、ってことになるんじゃないでしょうかねえ？」

「あら、じゃあ青陵？　青陵だっいいわよねー？　国立ですものねえー？　親孝行でいいわー。それに比べてうちのバカと来たら、うちを出て一人暮らしするってそんなことばかりはねえー？　まったく…」

おばちゃんは店内に一人だけいる男性客に目を留めて、

「あら、また話し込んでちゃって。ね、ね、今度理ちゃんのサインちようだいよお？ 色紙持ってくるからさ。じゃ、また」

とにこやかに頭を下げ、弁当とお茶を持った男性客にも挨拶してようやく出ていった。

「いらっしやいませ。お弁当は温めますか？」

「はい。お願いします」

「はい。それでは2点で840円になります」

男性客は千円札で払い、お釣りを受け取ると、弁当が温まるのを待って、言った。

「すみません。馬場 忠穂様でいらっしやいますね？」

「はい。そうです」

忠穂も男性が弁当を選ぶふりをしてずっと忠穂が一人になるのを待っているのに気付いていた。

「わたくし、高美と申します。佐津川グループ会長室室長を務めている者でございます」

と、名刺を渡した。

「はい。息子から聞いています」

忠穂の慇懃無礼といった態度に高美は恐縮して頭を下げた。

「この度は勝手をいたしましたして申し訳ありませんでした。お父さまに断りなく息子さんに会ってしまい、配慮に欠いておりました。まことに申し訳ございませんでした」

慇懃無礼を決め込んでいた忠穂は、理から「いい人だよ」と聞かされていた高美にひたすら恐縮されて頭を下げられ、まいったな、と降参した。

「まあいいですよ。あいつも知っていることですし。緊急を要する病気じゃあ、あなたを責めることもできません」

「お心遣いありがとうございます」

高美はあくまでいいねいにお礼を言ってようやく顔を上げた。

「それでは改めまして、息子さん、理さんが佐津川辰巳の実のお子

さんであるかどうか、サンプルをいただきまして遺伝子検査をさせていたきたいと思うのですが、許可をいただけますでしょうか？」

忠穂は肩をすくめた。

「ええ。いいですよ。あいつも口では色々言ってるが、内心では自分の父親のことを知りたがっているでしょう。わたしはかまいませんよ」

「そうですか。ありがとうございます」

素直にほっとした表情を浮かべる高美に忠穂は、なるほどいい人だろう。高美も、辰巳と同年であるから47歳、48歳？か、細面の痩せ形で、上等のスーツを着こなすなかなかのハンサムだ。ただきれいに櫛の通った頭は白髪が8割ほどで、老けた印象だ。

「理さんは、なかなかユニークな発想をされる方ですね？」

理の頭の良さを辰巳の遺伝だと思い込んでいる高美はニコニコして言った。一方の忠穂も

「ええ。あいつはちよつと頭が良すぎるもので」

と内心舌を出しながら答えた。高美は素直にニコニコ頷き、言った。

「将来が楽しみです」

「ちよつと待ってください」

忠穂はまたむっとした気持ちを思いだして言った。

「もし理が佐津川辰巳の実の子だったとして、理をどうするつもりですか？」

高美は顔を曇らせ、申し訳なさそうに言った。

「いずれは理さんを未亡人の養子に迎え入れ、佐津川グループを継いでいただきたいと」

「それは、あいつの決めることではありますが、あくまであいつ自身に決めさせて下さい。それに……、えつと……、未亡人の養子に、ですって？ それは、かなり気まずい関係になるんじゃないですか？」

「それは形式上のことになると思いますし、辰巳さんの妻でしたら、まあ私が言うのもなんですが、できた女ですから、上手く立ち振る舞ってくれると思います」

忠穂は高美の言い方に首を傾げた。

「辰巳さんの奥さんというのは、どういう方ですか？」

「辰巳さんの妻は、私の妹なんです」

「あ、なるほど、そういうことでしたか」

忠穂は納得した。理は辰巳の未亡人らしき女性を「美人だった」と言っていたが、高美の妹ならそれも納得だ。

「なるほど、あなたは辰巳さんの兄のような友人で、身内でもあるわけですか？　すると、理の義理の伯父になるかも知れないわけですね？」

「そういうことになりますね」

忠穂は高美の人物を今一度推し量った。グループ後継者の伯父となればその権力は更に強固になるだろうが……、この人はそういうことを考える人だろうか？　忠穂にもどうも誠実で人のよいひたすら苦勞人に思える。

「辰巳さんには兄弟がいるんですよね？　そちらから後継者を選ぶという考えはないんですか？」

「それが、まったくお恥ずかしい話なのですが」

高美は顔を苦悶させて、諦めたように言った。

「実は今佐津川グループはグループ解体の危機を迎えているのです。いえ、グループ企業の業績は好調です。まあこれから先は不透明ですが。」

解体を言っているのは当の会長ご自身なのです。会長はそれはそれは辰巳さんを高く評価されておりまして、一方で弟さん妹さんをまるで低く見ておりまして。確かに、弟の大樹さんは任せられた会社を倒産に追い込んでしまい、妹の星華さんは嫁いでおられますが浪費癖が激しくたびたびご実家に無心に訪れる有様で、お二人とも会長の覚えめでたからずというのも無理ないところではあるのです

が、会長は辰巳さんが倒れられて命が危ないと分かります、お二人に向かつて言い放たれたのです、

『おまえたち、兄が死んで自分たちに美味しい席が転がり込んでくるなどと思うな？ 辰巳が死んだら、佐津川グループは解体し、おまえらのような役立たずどもは放逐してくれる！ おまえらに文句を言う権利なんぞないぞ！ 佐津川グループはこのわしが築いた城だ！ その主には辰巳以外おらんと決めておる！ おまえらみたいな馬鹿に任せるくらいなら、財閥は解体し、わしの遺産はすべてしかるべき所に預け、おまえらにはびた一文やる気はないからそう思え！』

と、それはそれは激しい言いようで。子のない辰巳さんが倒れられて、その後がまを思って内心ほくそ笑んでいたお二人に、会長は我慢がならなかったのでしょうか。

そうして辰巳さんがとうとうお亡くなりになり、お二人はまさかと思われていたようですが、会長はわたくしと幹部たちをお集めになるとグループ解体の事務手続きの開始をお命じになられ、お二人の慌てようはそれはひどいもので……」

「じゃあなんですか？ 理を養子に迎えて佐津川グループを継がせるというのに二人は？」

「むしろ歓迎されるでしょう。もちろん心中面白くはないでしょうが、グループ解体が免れ、自分たちが放逐されずに済むとなれば反対はできないでしょう」

「兄貴の隠し子が命綱ですか？ なんと情けない話ですなあ？」

「申し訳ございません」

「いや、あんたが謝ることでもないでしょう？」

「いえ、理さんのことで。辰巳さんが最初から理さんの存在を認め、素直に迎え入れていれば今日このようなことにもならず済んだでしょうに」

「妹さんに遠慮して、ですか？ 理が生まれたのは理花が27の時です。その時辰巳さんは…32歳ですか？ 当時奥さんとは？」

「既に結婚してりました」

「それで理花は理を身ごもったまま身を引いた、というわけですか？」

「申し訳ございません」

「まったく、けしからん話ですな」

「申し訳ございません……」

忠穂はじいっと高美を観察した。忠穂の視線に苦悶した高美は、これまた悲愴な決心をしたように話した。

「馬場様……」

これからここで話すことはくれぐれもご内密に、馬場様の心の中にだけおしまいになって、けっして、理さんにもお話しにならないでください」

高美の必死な確認を求める目に忠穂は頷いた。

「妹は幼い頃より会長によって辰巳さんの許嫁に決められておりました。それと申します理由が、私どもの母でした。実は……」

私は母と会長佐津川大吉の間に生まれた子なのです」

「なっ……」

忠穂もさすがに驚いた。

「それじゃあなた、辰巳さんの実のお兄さんで？ それじゃ、あなたの妹さんというのは？ …」

「妹は私ができた後めあわされた男性との間の子で、会長の血筋ではありません。」

母は若い頃佐津川家にメイドに雇われておりました。そこで会長のお手つきになって腹に私ができ、母は佐津川家を出され、別の家に保護されました。ところが母の妊娠が発覚してしばらくして、今度は奥様にもお子さまができたことが分かり、会長は私を自分の子として家に迎えるのを断念なさいました。そこで部下の優秀な男を母にめあわせ、私をその男性の子として生ませました。私が生まれて3ヶ月後に辰巳さんが生まれ、佐津川家の跡取りの長男となりました」

「なんですかあ、そりゃあ!？ それじゃあなんだ、会長と辰巳さんは親子二代に渡って婚外の子をはらませて、それを認知せずに放り出したってことですかあ!？」

「面目次第もございません」

「だからあんたが謝ることじゃあないが…、ええい、くそっ!」

忠穂は腹を立て、腕を組んでそっぽを向いた。苛々と足踏みし、ジロリと高美を睨んで言った。

「だいたいあんたもなあ、実の父親と弟でしょうが？ 本当ならあんたが当主の長男として佐津川家を継ぐ権利があるでしょうが？」

「それは、言わない約束なのです」

「ああ、頭に来る！ あんたも怒りなさい!!」

「はあ……」

高美は怒る代わりに困ったように笑い、忠穂はますます苛々したが、当の高美自身がこれでは、呆れてため息をついた。

「あなたは、自分の立場を悔しく思わないのですか？」

「私は…。あなたたち親子ほどではないが父となった人は良い人で、わたしをちゃんと自分の子として育ててくれました。それに実の父も自分が本当の父であることを告げ、すまないと謝ってくれました。今現在もこうしていっしょに仕事をしているわけですから、まあ、幸せなことです」

「あっそう。……それで、妹さんを辰巳さんの許嫁に？」

「はい。妹が辰巳さんとの間に子をなし、いずれ佐津川家を継げば、私にとっても血のつながった甥なり姪なりが私の代わりに後を継いでくれるようなもので、私にとっても母にとっても異存はないわけでした」

「辰巳さんと妹さんは？ そうした事情を知っていたんですか？」

「妹は知りません。いえ、内々気付いてはいるのかも知れませんが、言いません。辰巳さんは知っています。よくわたしにすまないねえと言っていました」

「夫婦仲は？」

「良好でした。言っではなんですが妹は母親似のなかなかの美人でしたから」

「それなのに辰巳さんは理花と？」

「面目次第もございません」

忠穂はこの人はここでいったい何度頭を下げてただろうなあと考えた。

「実は…、妹は子どもを産めない体なのです……」。

一度ひどい流産をしまして、それで母胎を著しく傷つけてしまい、治療を続けたのですが、どうも、いけませんようで……」

「それは、お気の毒でしたね」

「ええ…。上手いかないものですねえ……。妹は一時ひどく落ち込んでおりました……。辰巳さんは理花さんとその時に出会われたのかと……」

「なるほど。辰巳さんは一時の気の迷いで理花と関係を持ったものの、やはり奥さんへの愛を思い出し、奥さんの所へ帰っていき、理花もそんな事情を知って潔く身を引いた、と」

「そういうことではないかと思えます。申し訳ございません」

「だからあんたが……。もういいや……」

分かってしまえばなんと前時代的な話だろう。面白くもなんともない。

忠穂は店を見渡した。だあれもお客がいやがらない。暇な店だ。

「ああ、すっかり話が長くなってしまいました。お忙しいところすみませんでした」

「かまいません。ごらんの通りですから」

高美は苦笑し、表情を改めると確認した。

「それでは、理さんの遺伝子検査にご同意いただけますか？」

「どうぞ。ただし、佐津川家のことはあいつ自身に決めさせること。いいですね？」

「心得ました」

高美はしっかりと頷き、思い出したように訊いた。

「念のため、理花さんの髪の毛など、残っておりませんか？」

「いや、そうした物は残していません」

「そうですか。ま、あくまで念のためですから。念のため、理花さんのご両親にお尋ねしようと思います」

忠穂は苦笑した。

「あなたもたいへんですねえ？ まあ、特に気むずかしい人たちではないが……。あまり歓迎もされませんよ？」

「致し方ありません」

と、高美も苦笑を返し、

「それでは。失礼いたします」

とお辞儀して、

「はい、どうぞ」

と、弁当を受け取ると店を出ていった。

忠穂はぼうつと暇な店内を眺め、ぼつりと言った。

「不妊治療か……。もしかして、そっちなか？……………」

11、遺産のサンプル

大型ショッピングセンターのシネコンでSFアクションファンタジー大作の3D映画を見た理と多喜子はスパゲッティとピザの店で昼を食った。

最初恋愛映画が見たいと渋っていた多喜子は迫力ある立体映像に子どもみたいに大喜びで興奮していた。一方理は自分で見たいと主張して譲らなかったくせに見終わって渋い顔で首をひねっていた。

「3Dって良かったか？」

「うんっ！ すっごい迫力あったじゃない？ 滝に落ちていくシーンなんて吸い込まれそうになって思わず後ろにガタン！ って身を引いちゃったわよ？」

「そうかい…。なんか俺はイマイチ立体的に見えなくってさー、今回は期待してたんだけどなー、あーあ、なんかすっげー損した感じー」

「あはは、残念だったわね？ マコって目悪かったっけ？ ふだん視力が気にならなくても左右どちらかが悪いと立体的に見えないらしいわよ？」

「そうかい。目は悪くないと思うんだけどなー…」

理は左右片方ずつ手で目を隠して離れた所を見比べた。

「どっちもふっつうに見えるけどなあ？」

「あんたってさ、目も特殊なわけ？」

「目より頭かな？ 頭が良すぎて騙されてくれないのかな？」

「あっそ。あーあ、あたしは馬鹿で良かったあー」

多喜子はイヒヒと笑ってピザにかぶりついた。大盛りスパゲッティとピザを二人で仲良く皿に取り分けて食べている。多喜子も女子にしては大型なので遠慮なしにしっかり半分確保している。

「へいへい。頭が良すぎるのも善し悪しだな」

映画には不満のある理だったが、多喜子が楽しそうなのでフツッ

と微笑んで機嫌が直った。

「あたしのこと馬鹿にしてるでしょー？」

「してないよ。楽しいんだよ、タッキーを見てると」

多喜子はぼとりと手からピザを落とすとまっ赤にゆで上がった。

「な、なによお、マコの、バカあゝゝ」

理は可笑しそうに笑った。

「やあー、やっぱおまえはいいなー、素直で。あははははは」

「やっぱり馬鹿にしてるうゝゝ」

「してないしてない。そうだ、あと適当にぶらついたら、おまえんち行っっていいか？」

「なんの用よゝ？」

「お父さまお母さまに正式なおつき合いの許しをもらいに」

「せゝ、正式って、な、なによおゝゝ？」

「真に受けるな、冗談だ」

「このおゝゝ」

「おじさんお婆さんはいるか？ 辰巳さんと母さんのことで訊きたいことがあつてさ」

「うんゝ。いると思うけどゝ。マコ、遺伝子検査って受けたの？」

「いや、まだ。高美さんも忙しいんだろ？ んじゃ、いい？」

「うん、いいよ」

「ついでにおまえの部屋も入っっていい？ 女子高生の生の匂いを嗅いでみたい」

「どこの匂いを嗅ぐつもりよ！？ 絶っ対、駄目っ！！」

「いいじゃんかよー？」

「駄あー目っ！！！！」

ウインドショッピングを楽しんだ二人は3時を過ぎて多喜子の家に着いた。

多喜子の父と母は理の訪問に驚いた。

「マコがお父さんお母さんにタツミおじさんとマコのお母さんのこ

とについて訊きたいことがあるんだってさ。聞いてやって。はい、おみやげ」

と焼きたてミニクロワッサンの袋をダイニングの座卓に広げて

「お湯、沸かすね」

と軽くなっているポットを確かめて台所へ向かった。

テーブルを挟んで理と向かい合った多喜子の父母は改まって娘のボーイフレンドと面と向かってなんとなく居心地悪そうにした。

「お父さん、お母さん」

理に呼びかけられて二人とも『うつ』と顔を引きつらせた。理は悪戯っぽく笑って言い直した。

「おじさん。おじさんは辰巳さんが日本に帰ってきてからコンスタントに会っていたんですよね？」

「ああ。2週か1ヶ月ごとにはたいてい会っていたよ」

「僕の母さんのことは本当に何も聞いたことありません？」

「いや、なかったよ」

「そうですか。ま、あれば不倫関係でしょうからね、いかに親友といえどおいそれとは言いませんか？」

お婆さん

「え？ わたし？ な、なに？」

なんだかひどく緊張して慌てた様子の多喜子の母に理は不思議そうな顔をした。

「お婆さんは母さんと仲良かったですよ？ まさかとは思いますが、母さんから僕の出生の秘密を聞いたりなんかは？」

「いいえええ、とんでもない。マコちゃんはお父さんの子だとずっと思っていたわ！」

「でしょうねえ。びっくりですよ？」

「え、ええ、びっくりしたわねえー、まだ疑ってるくらいよ？」

「あはは。でも、僕が父の子じゃないのはどうやら確かみたいです」
「お父さんともあんなに仲良かったのにねえー…」

「いやいや」

理は多喜子の母が何かドロドロの昼ドラ風勘違いをしているようなのに苦笑して手を振った。

「父は最初から分かっていて僕の父親になってくれたので。……あの、母とはいつからのお知り合いでした？」

「ええ、それは……」

母親の視線に理は部屋の入り口でなんだかドキドキした顔で立っている多喜子を見た。

「何してんの？」

「いや、なんかお邪魔しちゃ悪いかなって」

「いや、かまわないよ。お湯は大丈夫？」

「笛が鳴るから平気」

「あつそ。じゃ、お座んなさい」

「それじゃお邪魔しまーす」

多喜子はどっちに座ろうか迷って、母のとなりに座って理を見つめた。理は、

「それで？」

と母親に話を振った。

「え、ええ。理花さんと知り合ったのは、赤ちゃんのマコちゃんを乳母車に乗せて散歩しているところに出会ってね。こっちもこの子を乳母車に乗せていたから、あらこんにちはーって。理花さんお医者さんでしょ？」

「ああ、医者っていうか、研究員だったみたいですわね？」

「ああ、そうだったの？ 色々詳しいからこの子の育児のことで相談に乗ってもらったり、マコちゃんといっしょに遊んでもらったりしてね、仲良くなったの」

「あたしがマコと遊んでやってたんでしょ？」

と横から多喜子が口を尖らせた。理が

「はいはい、お姉ちゃん」

といなすと、多喜子の母はクスッと笑った。

「あなたたち二人、兄弟みたいに仲良かったわよねー？」

「タツキーが威張りん坊でケンカばかりしていたような気がするけれど？」

「子どもの頃はあたしの方が偉かったのよっ」

「今じゃすっかり立場逆転だもんなー？」

「むかつくなあゝゝ」

「理君」

笑っている理に多喜子の父が遠慮がちに訊いた。

「それで、辰巳が父親だというのは分かったのかい？」

「ああ、いえ、まだです。高美さんも忙しいようですし、検査は時間が掛かるみたいですからね、2週間くらいは掛かるんじゃないでしょうかねえ？」

「そうか、そんなに掛かるのかい？ それは、気になってしょうがないだろうねえ？」

「いやあ、僕よりなんだか周りが騒いでいるようで。ねえ？」

と多喜子に振ると多喜子は顔を赤らめてうそぶいた。

「そりゃあ、気になるのが当然じゃない？ だってえ…、ねえ？」

と多喜子は父と母に振った。二人は困ったようにぎこちなく苦笑して顔を見合わせた。父が言った。

「そりゃあわたしはね、君が辰巳の息子だったら嬉しいよ。あいつもやっぱり子どもは欲しかっただろうからねえ」

「そんな話をしたことありました？」

「いや…、結婚当初はね、わたしからも早く子ども作れよなんてからかったりしたが…、その後はね…。わたしがテニスに多喜子連れていくとあいつは喜んで、ずいぶんこの子を可愛がってくれたよ」

と、父は愛しそうに娘を見つめ、多喜子は恥ずかしそうにうつむきながら嬉しそうに微笑んだ。

多喜子の父は穏やかに微笑む顔で理を見て言った。

「ま、結果が分かったらわたしたちにも教えてくれたまえよ。一応あいつの身内のようなつもりだから」

「ええ。お知らせしますよ。でも、」
と再び多喜子に。

「違っててもあんまりあからさまにガッカリするなよなあ？」

「どうしてあたしがそこまでガッカリするのよ？」

「どうしてだろうねえ？」

「こいつうゝ」

台所でピーッとやかんのホイッスルが鳴った。多喜子は「おつと」と台所に立っていった。

「理君」

多喜子の父が再び訊いた。

「他にわたしたちに何か訊きたいことはあるかね？」

「いえ、こんなところで。実はそれを口実に娘さんの家に遊びに来たかっただけで」

ぬけぬけ言う娘のボーイフレンドに、母親は心配そうに遠慮がちに言った。

「あのね、マコちゃん。この間の家庭教師の件なんだけど……、やっぱり同じ年頃の男の子を年頃の女の子と部屋に二人切りにするのはやっぱりちょっとね……」

「ああ、そうですか。いえ、なに、あれは冗談ですよ。あんまり心配しないでください」

「あら、そうだったの？ おほほ」

ほっとした様子の母親に笑いかけながら、理は内心、さすがに警戒されたか？、とちよつと急ぎすぎたなと反省した。

なんとなくぎこちなく沈黙が続き、多喜子が紅茶を入れてくると当たり障りなく両親は多喜子が小さい頃にいっしょに見に行つて以来すっかり見に行つてないという3D映画の話をし、興奮気味に説明する娘に父母は楽しそうに相づちを打ちながら聞いていた。

高美はタクシーを30分ほど乗り、馬場理花Ⅱ旧姓明川理花の実

家明川家を訪れた。

明川夫妻に理花以外の子はなく、今も老夫婦二人で古ぼけた昭和の日本家屋に住んでいる。

呼び鈴に出てきた夫人に「ごめんくださいませ」と戸を開け、名刺を差し出して名乗り、

「お孫さんのことでお伺いしたいことがございまして」と部屋へ上げてもらった。

パソコンで何やら作業していたらしい夫も呼んでもらい、茶を出された高美は孫の理が娘理花さんと佐津川辰巳の間の子らしいと事情を話した。話を聞いた夫婦は驚き、顔を見合わせた。高美は尋ねた。

「娘さんから理さんの父親のことはなんと？」

「なんとも何も、」

突然のことに驚いた祖父は怒ったように言った。

「理は忠穂君の子だとばかり思っておった。娘があちらに遊びに行ったときにできた子だと。わしらは挨拶に来た忠穂君にそれは君順序が違うんじゃないか？と説教したが、理花の奴め、お父さん今どきそんなの古いわよと平気な顔で言っておった。まさかそれが、忠穂君の子じゃあないなんて、露とも知らなかった」

祖父は頑固そうな顔で高美を睨んだ。

「本当に理は忠穂君の子じゃあないのか？」

高美は申し訳なさそうに頷いた。

「それは忠穂さんがご自分で認めておいでです。理花さんは忠穂さんがあちらにいる間一度も国外へ出てはいません」

高美は当然祖父母も理が忠穂の実子ではないと知っているものとはばかり思い込んでいて、教えてくれなかった忠穂を恨んだ。やっぱり自分のことを恨んでいるのかと。

「ううゝむ、信じられん」

祖父は鬼瓦みたいな怖い顔で目を閉じ、腕を組んだ。肩幅の広い大柄な人だ。半袖から伸びた腕も硬く筋肉が付いて、若い頃は何か

スポーツをやっていたように見える。

考え込んだ夫を不安そうに見る夫人も背が高い。こちらもなんとなく印象としてスポーツ選手だったように見受けられる。理の高校1年生にしてのスーパースリートぶりは辰巳の遺伝ばかりでもないらしい。見た目が母親そっくり（高美は製薬会社の主任研究員プロフィールで理花の顔を見ていた。なるほど理そっくりの美人だった）の理に比べ、祖父母はあまり似ていない。まるで美人の女顔の理に対し、こういう言い方もなんだが、二人とも間延びした長い顔をしていた。やはり二人の顔もスポーツ選手を連想させる独特の雰囲気醸し出している。「あの」と高美は切り出した。

「そこで理さんが佐津川辰巳の実の子であるかどうか確定するために、理さんの遺伝子検査をさせていただきます」

祖父は驚いた。夫人の方もだ。

「遺伝子検査だと？」

祖父の怒ったような言い方に高美はにこやかに注釈した。

「いえ、何も危険なことはありません。例えば、口の中の粘膜からほんの少し組織を採取し、その細胞の遺伝子のパターンを調べます。例えば本人に放射線を浴びせるような、そのようなことはございませんので……」

「そんなことは分かっとなるよ！」

祖父は馬鹿にするなど高美を睨んだ。

「そんなことを理や忠穂君は承知したのかね？」

「ええ。お二人には既に了承を得ています」

高美はすっかり怒ってしまったような祖父と夫人に言い出しづらそうにしながら言った。

「あのー…、それでですね、念のために、娘さん、理花さんの髪の毛のような物はお持ちではございませんでしょうか……？」

「そんな物はない」

「それでは念のため、お二人の髪の毛、1本ずつでけっこうですの
で、パターンの比較のためにいただけませんか？」

「わしらの遺伝子まで調べると言うのか?!」

「え? ええ…、あくまで念のため……」

祖父は立ち上がった。81歳の老人にしてはかくしゃくとして背が高い。大きな体で腕を伸ばし、玄関の方を指さし言った。

「帰れ! 帰ってくれ!」

祖母は夫の剣幕にあたふたして高美を気遣った。高美は頑固そうな老人の突然の怒りに呆気にとられてしまった。

「余計なことをするな! 今さら死んだ父親が名乗り出てどうする!? 理は理花と忠穂君の子だ! これまでそうして静かに暮らしてきたんだ、今さら、放っておいてくれ!」

「あ、あの、しかし……」

高美は困惑しながら老人に落ち着いてもらおうとしたが、

「さあっ、帰ってくれ!!」

どうやらとりつく島もないようで、高美は諦め、「申し訳ございませんでした。致し方ありません。おいとまさせていただきます」

と、きちんと正座して挨拶し、立ち上がった。

夫人に玄関まで送られ、

「すみませんねえ、孫のためにわざわざおいでくださったのに」と恐縮され、

「いえ、どうぞお気になさらずに。突然ああいう話を聞かされればお怒りになるのも無理ありません」

と微笑み、靴を履いた。

「きゃっ」

と夫人が悲鳴を上げ、なんだとびっくりすると、

「これこれタマや、突然飛び上がるのはおやめといつも言ってるでしょう」

と、肩から一匹の三毛猫を抱き下ろした。

「ああ、猫でしたか」

高美は笑った。

猫のタマは高美に寄ってきてふんふんとビニールの包みを嗅いだ。「ごめんよ。これは空だよ。おじさんが食べてしまったからねえ」忠穂のコンビニで買って途中公園で食べた弁当の空だ。公園のくずかごに捨てるのも悪いと思ってそのまま持ってきた。

「うちで捨てておきましょうか？」

「いえ、それは申し訳ない。きちんと我が家でゴミ出しします」タマは高美を見上げ、ねだるように「ニャーン」と鳴いた。

「かわいいものですね」

高美はタマの頭を撫でてやった。

「かわいいのはおねだりするときだけです？ こっちがかまってやろうとしてもそっぽを向いちゃうんですから」

「猫は正直ですね」

タマの頭を撫でていた高美はふと硬い表情になった。

「それじゃあね、タマくん。ごめんよ」

高美は立ち上がり、

「失礼いたします」

と深々頭を下げて夫人に見送られて玄関を出た。

表に出た高美はそっと自分の右手を見た。

指の間に長い白髪が1本挟まっている。

猫の体に付着していた、おそらく夫人の髪の毛だろう。

高美は日にかざして確かめ、後ろめたい気持ちを持ちながらそっとハンカチに挟んでポケットに入れ、歩き出した。

明川家は海岸沿いの静かな古い家並みにあった。午後の日差しの中、向こうで小さな子どもたちが遊んでいるほか人影もない。

歩いていた高美はふと振り返った。誰もいない。気のせいかもしれない。向き直って歩き出した。こんなことをしているから刑事ドラマのような気になって可笑しくなった。さてどこでタクシーを拾えるだろうかと考えていると突然後ろから何者かに抱きつかれ何か布で

口をふさがれた。ギョツとショックを受けた高美は、すぐに気が遠くなって体から力が抜けてぐったり意識を失った。

気が付くと小さな児童公園の木陰のベンチに寝かされていた。まだ神経がどこか戻ってきていないふわふわした感じで頭を振って起き上がった。くんくんと鼻を動かして嗅がされた臭いを思い出す。どうやら何か薬品を嗅がされて気絶させられたらしい。

カバンと、ご丁寧にゴミの袋までそのままだ。背広の内ポケットを探り財布を取り出した。札もそのまま入っているようだ。携帯電話も取られてない。中身を調べられたかどうかまでは分からないが、賊の狙いはなんだったのだろうか？とぼんやりする頭で考え、ハツと、腰のポケットを探りハンカチを取り出した。そつと開くと夫人の物と思われる髪の毛はなくなっていた。代わりに手帳のメモを引きちぎったような紙片が挟まっていた。

「馬場 理を調べるのはやめろ。彼は佐津川家とは無関係だ」

殴り書きの太い男文字だ。

高美はゾツとした。まさか自分が直接こういう危険な目に遭わされるとは思っていなかった。

青い顔で手を震わせ、自分を落ち着かせながら考えた。

「どういうことだ？ 大樹さんたちの差し金か？ なんで？」

いや…、この文章はしかし…、何者が？……………」

高美はそつと辺りを見渡した。まだどこかでじつと自分を監視している何者がいるのではないかと怯えながら。

12、母の契約

夕方、早番の父が帰宅するとなにやら上機嫌だった。

台所でご飯とみそ汁をよそってきた理は手洗いを終えた父がやってくると訊いた。

「なんかいいことあったの？」

「分かるか？」

「そりゃね、声を聞けば分かるよ」

「ふっふっふー。おお、理くん、豪勢だねえー？」

「ただのアジの開きだよ。いっつもコンビニの油っぽい弁当ばかりなんだから十分だよな？」

「けっこうけっこう。いやあ、出来のいい息子を持ってお父さん幸せだなあー。いったただっきまあーす」

とみそ汁を一口飲むと「美味い！」とご機嫌な笑顔で言った。

「母さんが何をしたか分かったぞ？」

母さんと辰巳さんは無関係かも知れん。いや、きっとそうだ！」

いかにも嬉しそうにご飯を食べた。理もご飯を食べながら訊いた。

「俺は辰巳さんの子じゃないってこと？」

「知らん。ま、そうであつたにしてもだ。」

あ、そうだ、午前中店に高美さんが訪ねてきたぞ」

「そう。で、父さんの素晴らしい推理の根拠は？」

「そう、実に素晴らしい。」

母さんはおそらく、代理出産でおまえを妊娠したんだ」

「ああ、なるほど、子どもを産めない奥さんの代わりに？」

「なんだ、おまえ知ってるのか？」

「いや、タツキーのお父さんの話でそれとなく」

「そうか。じゃあ、いいか？多喜子ちゃんにもべらべらしゃべるんじゃないぞ？」

「イエッサー」

「よし。辰巳さんの奥さんは一度ひどい流産をして子供が産めなくなったらしい。それで産婦人科に通っていたらしいんだな。でも結局駄目で、どうしても子どもの欲しかった夫妻は自分たちの子どもを代理出産してもらうことにしたんだ」

「いや、父さん。俺が辰巳さんの子かどうかわからないけど、母さんの子であるのはほぼ100パーセント間違いないぜ？」

と理は自分の顔を指さして言った。

「ああ。きっと夫人は気の毒に卵巣が駄目になっちゃってたんだろ
うな」

理は反論した。

「それでもさ、卵は奥さんの身近な人から提供してもらうんじゃないか？ 姉妹とか、母親とか？」

「姉妹はいない。母親は……」

忠穂は言葉に詰まった。辰巳と妻の母に血縁関係はない。しかしその父との間には子Ⅱ高美をもうけているわけだから、その子との間にまた自分の卵で子どもを作るのは気持ち的な抵抗が強いんじゃないか？

忠穂は考えて言った。

「母親は、年だ」

「そう」

「うむ。母さんなら、研究室の主任を務めるくらいの秀才で、超美人だから、母親として文句無しだろう？」

「どこでどうして母さんと知り合ったんだ？」

「それは、誰か優秀な母親役を捜したんだろうな……、いや、そう
うだ！

不妊治療には夫の辰巳さんも通っていたんだ！ 念のため精子を調べて、子どもができないのが父親と母親どっちに原因があるか確認したんだ！ その精子の検査が母さんの所に回ってきたんだ！」
「それってもう母さんがカネギ製薬に入って研究主任になってから
のことだろう？ なんてそんな仕事が母さんとこに回ってきたんだ

？」

「だって……、母さんは遺伝子研究の専門家だろう？ 大事な佐津川家の跡取り問題だもんな、特別念入りになってことじゃないか？ って言うより単純に、夫妻の通っていたクリニックがカネギ製薬か国際悠久カレッジの関係だったんじゃないか？」

「なるほどねえ」

理は改めて代理出産というものを考えてみた。

子どもを作るには父親の精子と、母親の卵と、受精卵を育てる母親の子宮が必要だ。

母親の卵に父親の精子を受精させる方法として、父親の体から母親の胎内へ精液を射出するという昔ながらの原始的な方法もあるが、今どき婚姻関係のない男女でそれはないだろう。第一それでは遺伝的に依頼夫婦の 父親の子ではあるが母親の子ではない。子宮に精液を注入するのに必ずしも体を合わせる必要もなく採取した父親の精液を機械的に子宮へスポイトしてやればよい。

代理出産を依頼する夫婦の多くは子供を作りたくても作れない、生みたくても生めない夫婦たちであろうが、その原因はいろいろある。母親の母胎に問題がある場合、母親の卵に問題がある場合、父親の精子に問題のある場合。それぞれの原因によって代理母への依頼内容も変わってくるだろう。

母胎に問題がある場合、妻の卵を取りだし、夫の精子を採取し、人工的に卵に精子を受精させ、受精卵を代理母の胎盤へ着床させる。妻の卵に問題がある場合、代理母の子宮に採取した夫の精液を注入し、胎内で受精させる。または本人もしくは別の女性の卵を用意し、夫の精子を人工授精させて代理母の胎盤へ着床させる。この場合生まれてくる子は遺伝的に依頼夫婦の夫の子ではあるが、母は出産した女性もしくは卵を提供した女性になる。そもそも代理母を頼まず卵だけ提供してもらい妻が自分の子宮で妊娠すればよい。

夫の精子に問題がある場合、妻の卵に別の男性の精子を受精し、

代理母に産んでもらう。この場合遺伝的に依頼夫婦の妻の子ではあるが夫の子ではない。このパターンでも妻が別の女性に代理母を頼む必要もない。

夫の精子に問題はないが妻の母胎と卵に問題のある場合、一番最初のやり方になってしまいうわけだ。もし理が辰巳夫妻の依頼による代理出産の子ならこのパターンだろう。残念ながら理は辰巳の子ではあるが妻の子ではないわけだ。

理は考えて訊いた。

「で、誰が頼んだの？」

話によると明川理花の名前を知っていたのは佐津川辰巳だけらしい。

「そりゃあ辰巳さんだろうな」

「奥さんは？」

「そうか、…知らなかったんだろ…？　内緒で事を進めたんだろ？」

「うーん……。辰巳さんってそういうことする人かなあ？」

「なんだかんだ言って佐津川家の跡取りだ、長男として家を存続させる義務ってやつがあったんだろ…？」

「まあいいや。で、その俺が、どうして父さんの子になっちゃったわけ？」

「母さんの気が変わったんだろ？　そういうニュースがあるだろう？　代理出産で妊娠した母親役が、自分のお腹で赤ちゃんを育てている内に愛情がわいて生まれた子の引き渡しを拒否するって話？　母さんもそうして自分の子として育てたくなっただろう。母さんの場合卵も自分の物であるわけだしな」

「なるほど。一応筋は通るか……。しかしそれじゃあ訴訟にならないか？　母さんは契約違反をしたわけだろう？　大事な佐津川家の跡取りになるわけだから、あっちは黙っちゃいないだろう？」

「辰巳さんが個人的に決めたことなんだろうな。母さんからやっぱ

り自分の子として生んで育てたいって相談されて、辰巳さんも考えて、やっぱり奥さんへの愛を取ったんだろうな。子供の産めない奥さんに別の母親の子を押しつけるのがやはり残酷だと考え直したんだろう。奥さんを愛してたんだよ」

「美人だったからなあ。そりゃ無理ないか」

「だろう？ なにせ母親は……」

「……なに？」

「いや……」

忠穂は高美の出生の秘密を漏らしそうになって危なく言い直した。

「奥さんは高美さんの妹さんなんだろう？ なかなか渋いハンサムだったじゃないか？」

「うん。そうだね」

理が素直に答えたので忠穂は内心ほっとした。

「というわけだよ！」

忠穂はまたすっかり機嫌が良くなって言った。

「母さんは父さんを裏切って他の男と浮気したわけじゃあなかったわけだ！」

忠穂はすっかり納得したようだが、

理は

『そうかな？』

と思っていた。

どうも自分の感触として母と実の父の関係はそんなにあっさりしたもののようにとは思えなかった。

それでは何故夫忠穂との間に第二子を作ろうとしなかったのか？何故事情を話さず頑なに父親のことを明かさなかったのか？

何故実の父と結婚しなかったのかの理由は説明が付くとして、前二者の説明が付かないように思う。

しかしすっかり上機嫌でおかずに箸を伸ばす父を見ていて、まあしばらくはそういうことにしておいてやろうと思った。

「じゃあ、高美さんに遺伝子検査の返事、正式にお願いしちゃっていいな？」

「おう。おまえがそうしたいんならしろ。父さんはかまわないぞ」

「なんだよ、母さんが辰巳さんとエッチしてないって分かった途端にずいぶん前向きな返事だな？」

「いやあー、おまえの人生だもんな、父さんは老後の面倒見てもらえるんなら大歓迎だぞー？」

「現金だなあー」

食事の終わった理は部屋から高美の名刺を取ってきて、携帯電話の番号に電話した。

『もしもし』

「こんばんは、理です。遺伝子検査のことですが、父にも承諾を得ましたので受けたいと思うんですが」

『申し訳ない。事情が変わりまして、しばらく待っていただきたい』
「なんだ、またですか？」

『あ、いや、申し訳ありません。すみませんが事情を整理し次第ご連絡いたしますので、それまでそちらからの連絡はお控えくださいますか？』

「はあ…、承知しました」

『申し訳ありません。それと、……理さん、この件について外で話すのも控えていただけますか？』

「ええ、気をつけます」

『よろしく願います。それでは、失礼いたします』
切れてしまった。

「なんだ、また延期か？」

忠穂が呆れて言った。理は腑に落ちない顔で答えた。

「うん。なんだろね？ 妙に硬い声で、なんかあったみたい」

「ま、大財閥さまだもんな、いろいろあるんだろうぜ？」

「そうなんだろうねえ」

「おまえも、面倒なことに巻き込まれないようにせいぜい気をつけろよ？」

「なんかもう手遅れって気もするけどねえ？」

理は茶化しながら、高美のどこか怯えたような様子を心配した。

13、それは殺人だ！（？）

月曜。

一日の授業が終わり、さあて今日から練習復帰だ、と思っていた理は担任教師に言われ応接室に向かった。お客様がいらっしやってるそうだ。

あの人だろうなあと予想して

「失礼します」

とノックしてドアを開いた理は驚いた。

客は予想通り高美だったが、高美は一人ではなかった。

袴姿の老人がいっしょだった。

「君が馬場理君か。うむ、通夜に来てくれたのを覚えておる」

鋭い目を向けながら微笑んで首を頷かせてみせたのは、佐津川家当主にして佐津川グループ会長の佐津川大吉氏85歳その人だった。一代で大財閥を築いたその大人物の睨みにさすがの理もゴクリとつばを飲む思いがした。

「こんにちは。この度はご愁傷様でした」

「ああ、よいよい。高美。では行くぞ」

「はい」

と老人は杖をつき、高美は先に回って「失礼」と理の後ろでドアを開いた。

「あのおー、どちらへ？」

理がよけながら困った愛想笑いで訊くと高美が答えた。

「会長のお屋敷へ。皆様もお待ちですから、理さんもいっしょにいらしてください」

「いや、それは、ちょっと」

何やら妖しげな成り行きを警戒して理は言った。

「僕はまだこの誰とも決まったわけじゃあ……」

コツコツと杖をついてきた会長がギロリと睨んで言った。

「見れば分かる。君は辰巳の息子だ。さ、来たまえ」

うむを言わせぬ様子で老人は先に進み、高美は申し訳なさそうに目で頼んだ。

理は仕方なく老人の後を追った。

運転手付きのリムジンで理は会長のとなりに座らされてお屋敷へ運ばれた。会長は不敵に笑って理に話しかけた。

「君は頭もかなりいいそうだね？」

「僕なんか皆さんに比べたらしよせん井の中の蛙です」

「フン、頭のいい答えだ。頼もしい」

会長は元々そうなのか高齢で耳が遠くなったせいか、かなりの大声でしゃべった。

「君のその頭の良さを見込んで頼みがある。君、いわゆる高校生探偵というものをやってくれたまえ」

「は？ 高校生探偵ですか？」

「あるだろう、マンガで？ 子どものくせに生意気に大人顔負けの推理をしよる？ 君にそれをやってもらう」

「そんなマンガみたいな真似したことありませんよ？」

「なあに、君のその頭なら楽勝だろうて」

大吉氏は髭の下にいかにも腹に一物ありそうな笑いを刻み、目は獲物を狙う鷹のように爛々と輝かせて前を向いている。

理は、ああこのワンマン会長さんは自分が決めたことはテコでも動かさないんだらうなあ、と諦めた。

車は高速道路に乗って40分ほど走り、街を眼下に見下ろす丘の上の西洋屋敷の門扉をくぐった。

車寄せで下ろされ、自動ドアのように中から観音開きの戸が開かれ、黒服の男性に迎えられた。

「お帰りなさいませ、旦那様。ようこそおいでくださいました。皆様揃ってお待ちでございます」

深々礼をされて、理は生の執事という人を初めて見た。

案内されて広間に通されると、10人ほどの人々が窓辺に立ったり、赤いフカフカクッションのソファーに座ったりして待たされていた。

「お父さん。ようやくお帰りですか」

と寄ってきたのは、通夜の席で理も見ている辰巳氏の弟だろう。

面倒なので整理して言うてしまうと、主要な人物はこの次男大樹氏と、長女の星華夫人の二人で、後はその伴侶と子どもたちだ。プラス辰巳氏の未亡人。会長夫人はお見えでないようだ。

高美が二人を紹介すると父である大吉会長が大声で言った。

「つまりここにおるのがわしの遺産の相続者どもだ。が、わしはわしの物を何一つくれてやるつもりはないがな」

「お父さん。まだそんなことを。そりゃあ僕や星華は駄目な子どもかも知れませんがね、可愛い孫たちまで道連れに路頭に迷わすことはないでしょう？」

大樹氏は父親の同情を引くように自分の3人の子どもたちを示したが、会長は「フン」とまったく興味を示さなかった。社会人大学生らしい3人の男子女子たちも露骨に冷たい視線を返し、どうやら彼らに祖父と孫の温かい関係はないらしい。

嫌なところに来ちゃったなあと思っただ。

「さあ理君」

会長はいかにも悪巧みしている黒い笑いを浮かべて言い放った。

「こいつらの中から、父辰巳を殺した犯人を見付け出したまえ！」

「は？」

と理は首を傾げた。

「辰巳さんを、殺した、犯人？ですか？」

理は他の人々も見渡した。みんな驚くと言うより……、呆れ返った、うんざりした、非常に迷惑そうな顔をしている。

「あのー……」

と理は畏れ多くも会長に尋ねた。

「辰巳さんは半年間の闘病の末、病気で、亡くなったんじゃない？」

会長は顔を赤くし、肩を怒らせ、全身から怒りを発散して言った。
「違う！ 辰巳は殺されたのだ、ここにいるでしょうもないくずどもの誰かにな！」

理も困って高美に助けを求めた。高美もため息をつきたそうなのを我慢して言った。

「辰巳さんは無菌室に入って、弱りながらもなんとか小康状態を保っていたのです。それが先週急に容態が悪化して、けっきょくお亡くなりになりました。会長は、誰かが外から悪性の菌を持ち込んで辰巳さんに吸入させたとお疑いなのです」

「亡くなったとき、そういう症状だったんですか？」

「肺炎を起こされてました。」

白血病で亡くなる多くの方は感染症を併発してお亡くなりになるのです」

辰巳氏の病気で勉強したのだろう詳しく説明した。

「そもそも白血病自体が骨髄で造血幹細胞を正常な血液に成熟させることができず、腫瘍化した、いわば壊れた血液が全身に運ばれ、臓器の機能不全を起こし、免疫機構を破綻させてしまうという病気ですが、その治療のため、悪い血液を薬で死滅させます。当然正常な血液も道連れに全滅させてしまうことになりますので、病原体に対する免疫力はゼロになってしまいます。健康な人間にはまるでどうと言ったことのない軽い風邪が、命の危機に直結するのです。」

ですので、辰巳さんは無菌室に入られて、無菌室は厳重に管理されていきました。外からの物の持ち込みは禁止。どうしても持ち込みたい物は事前に十分な消毒をされます。面会も時間を決めて窓越しにインターホンで会話していただきます。辰巳さんの強い希望のある場合は入室を許可されますが、入室者は全身をメディカルスーツで包んで入室しなければなりません。辰巳さんご自身もマスクの着

用を命じられていました」

会長が不機嫌そうに口を挟んだ。

「全身服だとしてテープでシールドしておるわけでもあるまいに、物を隠す隙間なんぞいくらでもあるわ」

今度は弟の大樹氏が誇らしげに身の潔白を証言した。

「僕は一度も無菌室に入っていませんよ」

「フン、どうせそうだろうよ、この薄情者め！」

やぶ蛇の大樹氏は気まずそうに渋面を作ってそっぽを向いた。高美が説明を続ける。

「まあ、そうです、会長のおっしゃられる通り、いかに嚴重に管理された無菌室も完璧とは言えないんです。もちろん辰巳さんには感染症対策の薬品も投与されていましたが、とにかく……、難しいのです。現にそうして感染症で亡くなる方が多くいらっしゃるわけですから……」

高美は遠慮がちに会長の顔色を窺った。会長は顔に強い意思を表して自分の考えを引っ込めるつもりはないようだ。

「あいつは強い奴だった。小康状態を保ち、医者たちも経過は順調だと言っておったではないか？」

大樹氏がまた余計な口を挟んだ。

「予断を許さないと申ってましたよ？」

「やかましい！ 辰巳は治るつもりでおったのだ！ それを快く思わん奴が、辰巳を殺しよったのだ！」

理が様子を窺うとみんなうんざりした顔をしている。頑固な老人の妄言と、誰も真に受けていないようだ。

そんな空気を物ともせず、会長はニヤリと不敵に笑った。

「フン、そうしてしらばっくれておれ、じきに化けの皮をはいでやる。のう、理君や」

非常に敵対的な視線が理に集中した。

「紹介しよう。まあどうせおまえらみんなもう知っておるのだろう

が。

辰巳が恋人との間に作った一人息子、理君だ」

一族の冷たい視線に理は、ああ嫌だなあ、と思った。

「彼は非常に頭がいいそうだ。わしは彼に実の父親を殺した犯人を突き止めるように依頼した。彼が見事犯人を暴き出し、父親の敵をとったなら、わしは佐津川グループの正当な後継者として彼にグループ総裁の全権を譲るつもりだ」

正当なる遺産相続者たちは驚き、怒りと憎しみの籠もった目で理を睨んだ。

冗談じゃないな」と理は高美に助けを求める視線を送った。

「会長。それはいくらなんでも性急すぎるかと。理さんのお気持ちもありますし…」

「そうよ!」

と金切り声を上げたのは化粧の濃いご婦人、妹の星華さん。きつと高級な化粧品を使っているのだろうが、豪華パーティーでもあるまいにCMの女優みたいな完璧すぎてCGのようなメイクをしている。

「お父さん、いい加減にしてよ! 死んでまで兄さん可愛さを続ける気? 辰巳兄さんは病気で死んだのよ! 殺人の犯人なんてこの中にいやしないわよ!」

と、もろに理を睨み付け、

「遺産ほしさにえん罪を被せられて犯人にされるなんてまっぴらだわ!」

と憎々しげに言い放った。まあこの人たちも迷惑だろうなあと思っただけ。だが頑固会長は。

「やかましいっ! おまえらが辰巳を殺したという動かぬ証拠があるのだ!」

と懷から黒革の手帳を取りだして、開いてメモを読み上げた。

「『馬場 理を調べるのはやめろ。彼は佐津川家とは無関係だ』」

「か、会長、それは……………」

高美は青くなつてうろたえ、会長はどうだ？と一同を見渡した。
妹星華が言った。

「それが何？ なんなの、それ？」

「フンッ」

と会長は不機嫌に手帳を閉じて閉まった。

「高美」

「はっ、はい……………」

「おまえ昨日何者かに襲われたな？」

高美はギクツとし、皆もギョツと高美に注目した。高美はうろたえながら会長に訊いた。

「どうしてそれをご存じなのです？」

会長は高美を横目に睨んでこともなげに言った。

「おまえを見張らせておった。わしに隠れてこそこそ動き回っておるようだったのな。わしが問いつめなんだら理君のことを黙っているつもりだったのだろう？」

「いえ、それは、彼と辰巳さんの関係がはっきり分かってからご報告申し上げようと……………」

「まあよい。わしはおまえの忠誠心は疑っておらん。だが、」
ギロリと他の者どもを睨み回した。

「昨日高美は何者かに襲われ、薬で眠らされてポケットの中を探られ、今読んだ脅迫文を入られた。高美を見張らせていた探偵によると賊の男は素早い身のこなしのプロであるらしいと言うことだった。後をつけたが、残念ながら巻かれたそうさ。

どうだ？ 大樹！ 星華！ おまえらの雇ったごろつきの仕業だろう！？」

兄と妹はお互いを疑うように顔を見合わせ、兄が言った。

「冗談じゃありませんよ。どうして僕らが……………」

「兄の後がまを狙つてに決まっておろうが」

「ですからそれは、」

さすがに怒りが抑えられず、うんざりを露骨に表して言った。

「お父さんが僕らから取り上げるおつもりなんでしょう？」

と、大樹氏は憎々しく理を睨んだ。こっちに当たらないでほしいな―と理は思った。

「どうせ甘ったれなおまえらのことだ、いざとなればわしが路頭に迷わすような事はしないと思っておるのだろうが、あいにくだな、わしは本気だ」

「だったら僕らが兄さんを殺すわけ……」

「フンッ」

会長は馬鹿息子の意見など聞く耳持たず宣告した。

「わしは辰巳を殺した者を絶対許さんからな！ 覚悟しておれ！

理君。それでは探偵をよろしく頼んだぞ。実のある成果を期待しておるぞ。

高美。理君にこいつらを紹介してやれ」

言うとう会長は執事に顎をしゃくり、開かれたドアを杖をつきながら出ていった。

14、財閥の一族

しょうがないなあと理は皆に話しかけた。

「お断りしておきますが、僕はまだ辰巳さんの実子と決まったわけではありません。それを検査で調べてもらうところでして」

すると大樹氏が言った。

「知ってるよ」

そして、ため息をつくように表情を崩すと、

「ああ、知っている。我々が探偵……とは言わないが、グループ内のコネクションを使って色々……君のことを、探っていたのは事実だ。な？」

と妹とその旦那にやけた顔で同意を求めた。

「そりゃあねえ、だって、わたしたちの問題ですもの。わたしたちや子どもたちにも当然お父さんの財産を相続する権利があるわ。そりゃあ兄さんの個人的な財産まで図々しく奪い取ろうなんて思っちゃいけないけど」

と妹は、洋装の喪服の夫人を見た。美人の未亡人、佐津川裕子さん、高美さんの妹さんだ。辰巳さんの妹星華は不満に口を尖らせて続けた。

「でも、兄さんのポストは、裕子さんがもらったってしょうがないでしょう？ グループの大事な仕事は、大樹兄さんやうちの人に任せていただかなくちゃあ。ねえ、あなた？」

星華の夫は頷くでもなくただ渋面のまま黙って立っていた。元々はエリートのなかなかのイケメンなのだろうが、日頃奥さんの尻に敷かれて面白くないのがおでこのしわに染みついている感じがする。社会人らしい長男と、大学生らしい次男と長女もちやちやらとおしゃれをして、母親の影響が如実に伺える。

「我々はむしろだねえ、」

大樹氏が理に媚びるような笑顔を作って言った。

「君が兄さんの子であつてもらった方がいいんだよ。取りあえず兄さんの跡継ぎが現れれば、あの頑固爺さんの機嫌も良くなって、まあ当座はグループ解体なんて馬鹿な考えも収まってってくれるかと期待しているのでねえ?」

理は現金な態度に呆れたが、当人たちにしてみれば必死なのだろう。

「じゃあ、昨日高美さんを襲ったという人物は本当にあなた方が雇った人ではないんですね?」

「とんでもない! 我々はあくまで社内で情報を集めさせていただけで……」

と、大樹氏はまた妹を疑うような目で見たが、すぐに思い直して続けた。

「そんな外国のスパイ映画みたいな真似はしないよ。そりゃあ、犯罪だろう?」

と、恐ろしそうに高美を見た。理も高美に訊いた。

「大丈夫でしたか?」

高美は面目なさそうに言った。

「ええ。まったく抵抗できずにすぐに薬で眠らせてしまいましたから」

「相手は見ませんでした?」

「いえ、まったく。大きな、力の強い男、という感触だけで。口を押さえた手さえ見えませんでした」

「そうですか。まあケガもなくよかったです」

「はい。ありがとうございます」

理が『ねえ?』と同意を求めると大樹氏はおどけた表情で肩をすくめた。理も、少なくとも大樹氏や星華さんが直接「そうしろ」と命じたことはないだろうと思った。この二人は我が身可愛さの固まりで、自分がそのような「犯罪者」になるのは絶対避けるだろう。

理も、ま、万が一にも親戚づきあいすることにもなるかも知れないので、あまり彼らの人物を悪く取らないように心がけた。

「それではですね、僕も一応『依頼』されちゃったのでお訊きしますが、実際どうなんですか？」

と、これはやはり高美に訊いた。

「辰巳さんが誰かに殺された可能性ってあるんですか？」

高美は困りながら答えた。

「まったくゼロではないでしょう。ですが、大樹さんがおっしゃった通り、辰巳さんが亡くなってもデメリットしかなく、誰も得なんてしやしないんですよ」

大樹も星華も同意して頷いた。どうやら理が佐津川家乗っ取りなど企てる極悪人などではないようだと言ったようで、協力的な態度を見せてくれている。

「得をする人間は、いませんか？……」

そうなのかなあ？と一応理は考えた。

ありそうなのと言え、

高美と裕子の兄妹くらいか？

二人とも辰巳さんとの仲はたいへん良好だったらしいが、少なくとも当面辰巳さんの財産を管理するのはこの二人だろう。きつと莫大な財産を残しているだろうから、金が絡むと人間分らない。………まっ、ないか、と理はあっさり考えるのをやめた。

すると、どちらの子なのか、他の若手から離れて大学生くらいの男性が理の視線を捉えてニコツと白い歯を見せて笑った。

理はムムツと思った。なかなか感じのいいハンサムじゃあないか？彼はさておき、理は聞き取りを続けた。

「無菌室で何か外から無断で持ち込まれた物はありましたか？」

「いえ、ないはずですよ」

「確認はしたんですか？」

「特に疑って言うことはないですが、管理はきちんとされていますので」

「そう……」

ちなみにこの中で無菌室に入ったことのある方は？」

理は自分で手を上げて挙手するように求めた。きよろきよ周りを伺いながら星華が手を上げた。

「だって、当然じゃない？ お兄さんなんだから」

と勝手に言い訳して、大樹から

「どうせ爺さんを説得するように頼み込んだんだろう？」

と笑われ、

「なによおっ、大樹兄さんのためでもあるでしょう！」

と怒った。理は案外この二人の兄妹は仲がいいのかもな？ と思った。

「私も入ったよ」

と星華の旦那も手を上げた。

「私はきちんと仕事をしているのでね、難しい、内々の相談をね。もつとも、それは3ヶ月も前のことだが。辰巳君はその頃はまだずっと元気だったよ」

そこで妻星華の方に目を向けると。

「わ、わたしは…、1ヶ月前…、いえ、3週間前…だったかしら？ もちろん、辰巳兄さんは元気だったわよお！」

3週間前で元気は怪しい気もするが。星華の長男も手を上げた。「僕も会ったよ。僕も3ヶ月前だな。就職活動中なんでね、なんとか口利きを願えないかと期待したんだけどね」

と肩をそびやかした。

「わたしも入ったわ」

と手を上げたのは大樹の高校生（制服着用）の娘。巻き毛の茶髪をしているが目がとろんとして可愛く、この子もなかなか感じいいいっしょにいる母親似だが、大樹氏も間の悪い憎まれ口ばかり叩いているが、元々はこのピュアな感じの娘同様、気のいいお坊ちゃんだったのではないか？ と思わせた。大樹氏には娘の上に大学生らしいブランドスーツの派手な姉と、やはり大学生らしいラフな感じの長髪の兄がいた。だいたいみんなこの不愉快きわまりない状況にうんざりした顔をしているが、改めて向き合ってみるとそんなに不愉快

快な人たちでもない。さて、妹。

「わたしは何回か入っているわ。一番最近だと、亡くなる1週間前ね」

「その時はわたしも窓の外から」

と大きな垂れ目のお母さん。小柄で可愛らしい感じの人だ。

「この子は辰巳さんになついていたから。あの、なんだかわたしたち、辰巳さんとずいぶん仲が悪かったように思われているかも知れませんが、そんなことはないんですよ？　ねえ、裕子さん」

美人の未亡人、裕子さんが頷いた。

「ええ。あの人が入院してから樹里ちゃんわたしのところへよく遊びに来てくれて。大介さんも知美さんも子どもの頃はよく遊びに来てくれたものねえ？」

樹里ちゃんが高校生の妹で、大介さんが長髪の兄ちゃん、知美さんがブランド姉ちゃんか。ま、理は全員の名前を覚える気もない。代わりに眉根を寄せてジロリと高美を睨んだ。理にその兄弟仲が悪くいがみ合っているような印象を持たせたのはこの人の情報だ。高美は困って目を瞬かせた。この人は会長のお付きだから、会長の言動に影響を受けているのだろう。

なんだ、一番問題なのはやっぱりあの頑固爺さんじゃないか？

理は樹里ちゃんに訊いた。

「その時辰巳さんの様子は？」

「ずいぶん痩せてました」

樹里は悲しそうに言った。

「スポーツマンでかっこよかったのに……」

父の大樹が面白くなさそうにすねた顔をするのを理はそっと盗み見た。樹里は言う。

「でも、まだ元気でした。わたしに心配させないように笑顔を見せてくれましたから」

辰巳がどういう段階にあったのかはよく分からないが癌の化学療法Ⅱ強い薬の投与と放射線投射は副作用が強く、ずいぶん苦しいら

しい。

「はい」

ともう一人、理のライバル視するハンサム青年が手を上げた。

「多分ね、辰巳おじさんの容態が急変する前、最後に面会したのは僕だと思うよ」

理はこめかみに人差し指を当て、ちよつとしやがれ声で尋ねた。

「ええーと、あなたは？」

「ああ、それは、」

と高美が言った。

「わたしの息子です。高美尚大（なおひろ）と申します」

「息子です」

と尚大はにこやかにお辞儀した。表情も仕草もスマートで、なるほど、高美氏の息子である。

「尚大さん。あなたが辰巳さんに面会したのはいつ？」

「亡くなる3日前、お昼からだよ。その翌日になって急に容態が悪化したんだよ。……困ったねえ、僕が一番犯人として疑われるかな？」

と、尚大はまったく困っていないように笑った。

「あなたは、ただのお見舞い？」

「そうだよ。僕は辰巳おじさんのテニス友だちだったからね。それに、僕はもう佐津川グループの会社に内定もらってるから」

と、あっけらかんと言った。理が父親の高美氏に『コネ？』と尋ねると高美氏は眉を寄せて『違います』と首を振った。二人のやりとりを見て尚大は言った。

「ちゃんと会社訪問して、採用試験を受けて、面接を受けて、見事内定を勝ち取りました。僕はこれでも優秀なんだよーん？」

と、尚大は理をからかうように笑った。理はまたムムツと思ったが、あちらも理をライバル視しているようだ。余裕のありそうな態度がちよつと気に入らないが。それにしても辰巳さんのテニス友だちとは、辰巳氏も多喜子の父親とテニスをしたり、樹里ちゃんを可

愛がったり、案外暇な人だ。まあきつと忙しいなか心身共にリフレッシュを図ってのことだろう。元プロスポーツマンらしいエネルギーな人だ。

理は今度は星華の息子たちがいじけたような面白くない顔をしているのを盗み見た。母星華も相当面白くなさそうに白い目で尚大を見ている。なるほど、兄弟仲は噂ほど悪くないようだが、一方兄の嫁の実家である高美家とはあまり仲がよろしくないようだ。やはりけっこう裏にはドロドロした感情が渦巻いているようだ。

理は高美に訊いた。

「尚大さんが最後の面会人というのは、確かでしょうか？」

「はい。その通りです。お見舞いに来てくださった方、面会された方、無菌室に入室された方はみな控えてもらっています」

「そうですか」

まあいずれにせよ病気には潜伏期間というものがあるから「誰が病気を持ち込んだ犯人か？」特定は難しいだろう。その潜伏期間は普通の健康な人よりずっと短いにしてもだ。

「ああ、そう言えば多喜子…代根のお父さんが面会したとか？」

「左様です。意識を取り戻された辰巳さんが是非と希望されて、ご連絡さしあげました。わたしは他に所用がございましてお会いできませんでしたが」

「面会は、ガラス越し？」

「左様聞いております。中で看護師が電話を取り次いだと。代根様はそれまでもちよくちよく来てくださっておられました、特に最後の方は二日三日ごとに。その内何度かは入室もされております」

「そう。ちなみに高美さんはその後辰巳さんと直接は？」

「亡くなる間際に。医者がもうよいだろうと判断されて、会長や大奥様、奥様と」

「その時は我々もいたよ」

と大樹氏が不服そうに口を挟んだ。高美は頭を下げ、
「そうでした。大樹様、奥様、星華様、旦那様も、いらっしゃって

おいででした」

理も尋ねた。

「代根のおじさんおばさんも来たようなことを言ってたけど？」

「ああ、申し訳ありません。そのようでしたね。他にも直属の部下の方々がお見えになられておりまして、その、あまり広い所でもございまして、わたくし個人も、混乱しておりました」

と、高美は誰ともなく頭を下げた。

臨終なんて家族だけで迎えるもののように思うが、通夜の席でも涙している女子社員たちも多くいたから、せめて同じ場所で見送りたいという部下や友人もいただろう。つくづく幸せな人だと思う。

理は聞き取りなんてもう十分だろうと思った。一応探偵としての格好も付けたし、後はあの頑固老人をどう納得させるかの方が問題だと思う。

「あのー、皆さんはこれからどうなるとお思いですか？」

大樹氏、星華さんは、お互い、伴侶や子どもたちと顔を見合わせ、大樹氏が代表して言った。

「我々としてはいかんともしがたいよ。何せあの偉大なワンマン会長様のお決めなさることだから。もし、だよ、もし、今あの老人が心臓を悪くしてポツカリ逝ったとして、」

息子の不遜な仮定に高美氏が注釈した。

「会長ご自身も心臓を悪くされて、去年手術を受けておられるのです。今現在も毎週医者との検診を欠かさず受けておいでで、ご自身も健康に不安を強くお持ちだろうと思われます」

大樹氏が続ける。

「そうなんだよ。自分がそんなだから意固地になりやがってあの意地悪爺い。もし、今ポツクリ逝って、公言しているようにグループを解体して我々子どもたちを放逐なんてして、我々はその『遺言』に不服申し立ては出来るのか？」

高美が答える。

「遺産相続権利者としてそれは当然出来るでしょう。しかし、どうやら判例では故人の意志が明確な場合、故人の遺言が優先される場合が多いようです。会長には有能な弁護士団が付いておられますし、正式な遺言を覆すのは難しいかと」

「あーあ、まったく」

大樹氏は天を仰いで嘆いた。

「そりゃあな、俺たちは裕福な家で生まれ育って幸せなんだろうぜ。でもなあ、好きでこの家に生まれたわけでもないんだぜ？ 偉大な父と優秀な兄貴に上に立たれて、同じように期待されたって、そりゃあ…、俺たちの罪でもないだろう？ なあ？」

兄に同意を求められて妹星華は顔を背け悔しそうに言った。

「やめてよ、みっともない。惨めだわ」

「ああ、そうさ、俺たちは惨めさ！」

「やめなさいよ！子どもたちの前でっ！」

妹のヒステリックな叫びに大樹氏はビクツとして、

「なんだよ、おまえだって……」

とすねてそっぽを向いた。理はその子どもたちの心情を思っていたたまらない思いがした。

何とかしてやりたいとは思いうけれど、そもそも自分にそんな権利があるのかどうか、理には分からなかった。

「理くん」

ハンサムボーイの尚大が寄ってきてポンと肩を叩いた。

「僕んちにおいでよ。夕飯、食べて行ってよ」

ね？と父親に顔を向け、高美氏も

「ああ、是非そうしてください。ああ、皆様も、ここはひとまずこんなところでよろしいかと思うのですが？」

と、皆に解散を尋ねた。

「ああ、もう帰ろうぜ」

と誰か男の子が言い、

「そうだな」

「そうね、そうしましょう」

と、大樹氏が、

「老人のご機嫌伺いもいいかげんうんざりだな。よし、帰ろう帰ろう」

と皆を手で仰ぎ、

「なあ理君。どうか我々を見捨てないでくれたまえよ？」

と下手くそなウイंकをした。

執事が

「皆様、お食事のご用意が」

と言ったが、誰も乗っていなかった。ああ、もったいない。

皆勝手にぞろぞろ部屋を出ていき、

「さ、僕らも行こう」

と、尚大は理と父親を促した。尚大は、

「どうです？ 裕子おばさんもいらっしゃいませんか？」

と尋ねたが、

「いえ、わたしは」

と未亡人は弱々しい微笑みで断った。高美氏は妹に向かい合って
氣遣った。

「裕子。来たくなったらいつでもうちに来なさい。喜んで歓迎する
から」

未亡人は兄の優しさに素直に微笑み、

「ありがとう。希世子さんにもよろしくね。わたしは大丈夫ですか
ら、心配しないでください」

「心配するさ。本当に大丈夫か？」

「さっちゃん…、お手伝いさんもいますから。あの子を一人でおい
ておくのも可愛そうですし」

「そうか。じゃあ帰ってあげるといい。その内俺も遊びに行くよ」

「はい。歓迎しますよ」

妹は兄を安心させるように笑った。兄も大事そうに妹の頭を撫で、

しかめっ面みたいにして微笑んだ。

理はいい兄妹だなあと微笑み、この人が奥さんなら人格者の辰巳さんが浮気なんてするわけはないなと思った。辰巳さんと母の情事を疑っている高美氏は身内故に妹に対する評価が辛いのだ。

理も未亡人に

「失礼します」

と挨拶し、ああそうかと気付いて言い訳した。

「僕の母と辰巳さんはなんの関係もなかったと思いますよ。僕の母は、クリニックの研究員だったんです、その、産婦人科の」

と、適当に言いつくろって、これで通じるか？気休めにもならないかな？と思ったが、

「ああ、そうでしたの？」

と、未亡人は綺麗な顔で微笑んだ。理は、なんだ、この人も夫の事なんて全然信じているんじゃないか、とほっとして微笑み、もう一度お辞儀をし直した。

15、家族の食卓

尚大の運転するセダンカーで城下町に下り、駅前の一等地の住宅に着いた。さすが会長室室長はかなりの高給取りらしい。

尚大が先頭で

「ただいまー」

と玄関の戸を開けると、

「ねーねー」

と若い女の子の声が奥からパタパタ駆けてきた。

「お兄ちゃん今日……」

尚大がお客を連れていているのを見て高校生らしき女の子は目を丸くした。

「えっ、本人?!」

キャー、どうしよう!?!」

女の子は顔を赤くにやけさせて手足をバタバタさせた。尚大がニヤニヤして言った。

「妹の瑞希（みずき）。ごらんの通り君の大ファン」

「瑞希です! よろしくね?」

妹瑞希はかしこまって挨拶したが顔はこみ上げてくるにやけ笑いが収まりきらない。

「お邪魔します。馬場理です。こちらこそよろしく」

理が挨拶すると瑞希はぽろっと見とれ、また『キャーッ』とバタバタした。かなり可愛い妹の狂乱ぶりを見て、理は兄貴に『フッ、勝ったぜ』と思った。

奥から母親も出てきた。

「お帰りなさい」

夫に挨拶し、

「うん。ただいま」

「あら、よくいらっしやいました。どうぞお上がりください」

と理を招き、息子にニコツと笑い掛けた。どうやら二人の間では最初から理を招く計画が出来ていたらしい。

理は手洗いをさせてもらって、テーブルと椅子の食卓に招かれた。テーブルにはしっかり理の椅子と料理が用意されている。

「理くんは瑞希の隣でいいよね？」

普段は4辺を一人ずつ使っているらしい。十分大きなテーブルだが、大人5人になるとちよつと狭く感じる。

「はい」

と理が返事をする。と尚大はニヤツと笑って、

「さすがスター。まったく気後れがないね？」

と皮肉に誉めて、よかったな？と妹をニヤニヤ見た。瑞希は、

「裕子お婆さんが来るんだとばかり思ってた。となりじゃ顔が見られないなあ……」

と言いながらニヤニヤ嬉しそうだ。席は奥から時計と反対回りに、お父さん、お母さん、尚大、瑞希と理、となっている。

「あなた。お酒はどうします？」

「いや、今日はいいよ」

と、妻は夫の分もご飯をよそい、父高美は

「では、いただきますか」

「いただきます」

と、皆食事を始めた。高美家の今日の食卓は揚げ物と冷や奴だ。

まだ熱々のカニクリームコロッケを食べて理は、ああいいなあ、と思った。

瑞希は高校2年生で理より一つ上だ。

「理くんが辰巳おじさんの子でもわたしは関係ないもんね？」

と言う瑞希に父高美は何故か渋い顔をして妻と顔を見合わせた。兄尚大がニヤニヤ言った。

「残念でした。理くんには彼女がいるぜ。ね？」

「ええ、まあ」

理も照れ笑いを浮かべながら言うと、瑞希は負けずに

「わたしより可愛い？」

と挑戦的に訊いてきた。理はうゝむと考えた。

「そりゃあ瑞希さんの方が美人だけど、あいつとは幼なじみの、まあなんと云うか、いいなずけみたいなものだ」

「ふうーん、じゃやっぱり可愛いんだ？」

「可愛いっちゃ可愛いけど、どちらかって言うんじゃじゃ馬って言うか……」

尚大が口を挟んだ。

「通夜の時理くんの前にご焼香してただろう？」

「あつ、あの子？ うゝむ、そうかあゝ……」

瑞希はしかめっ面で考え込んだ。理は尚大に訊いた。

「そうか、皆さんも通夜に出席されていたんですね？」

「うん、いたよ。まあ僕らは目立たないようにひっそりしていたからね。妹が君を見つけて、えゝなんでなんでえ？、ってこっそり大騒ぎしてたんだよ？」

「だってびっくりしたんだもん」

と瑞希は大きなくっきりした目を丸くして理を見た。

「あの時はなんで理くんがいるのか分からなかったから、きつとお父さんが会社の偉い人で、家族で来たんだろうなって思ったのよ」

通夜の席順は高美の計らいで前の方で「偉い人たち」に混じって座っていた。

「妹さんだと思ってたのよね。あの子ならわたしの方が勝ってると思うんだけど？」

と、まだ諦めずにアピールした。

「けっこうキャラ被ってない？ 美人度ならわたしの方が上よね？」
さすが尚大の妹、かなりの自信家だが、確かに美貌が裏打ちしている。

困っている理を兄貴が助けてくれた。

「理くんはストイックに彼女が大好きなんだよ。ね？」

「そんなこと言ったらまっ赤になってグーのパンチが飛んできそう

ですけどね」

理のおのろけ(?)に瑞希が羨ましそうに言った。

「あーあいいなあー、わたしにも理くんみたいな可愛いくてカッコいい幼なじみがいればよかったのになあー」

「瑞希さん、もてるでしょ?」

「そりゃもてるけどね。兄貴ほどじゃないもん。あーあ、わたしは男を見る基準が高すぎるのよね。なにしろバレンタインデーのチョコ500個の伝説の男だから」

と呆れたようにむっとり兄を睨んだ。理もまたライバル心を燃やして尚大を見た。尚大は余裕で、

「はっはっは」

と笑った。

「いやあー、登校の道々で女の子たちの待ち伏せに合って、すっかり遅刻して担任に怒られてしまったなあ。もっともチョコのお裾分けで買収したけどね」

とぬけぬけと言った。こういうことを言っても爽やかで嫌味な感じがしないのがまた嫌味だ。理とは別の意味で男子からも人気がありそうだ。

父も母も困ったようにニコニコしながら子どもたちを見ている。高美氏もかなりのハンサムだが、奥さんもこれまた感じのいい美人で、こちらもなんとも恵まれた家庭である。

「尚大さんは、大学はこちらなんですか?」

「青陵だよ。佐津川は未だ古くさい体質で地元採用を好むからねえ?」

と皮肉に父を見た。理は尚大に訊いた。

「じゃあ最初から佐津川グループに就職するつもりで大学を選んだんですか?」

「そうだよ。まあこちらも佐津川なら雇ってくれるだろうって腹づもりもあって、父上様の希望でもあったからねえ」

理はふうーんと高美を見た。

「やっぱり息子さんに跡を継いでもらいたいものですか？」

「ええ、それは…」

高美は気まずそうにしながら、微笑むと、嬉しそうに言った。

「やはり息子に自分の仕事を認めてもらって跡を継いでもらえるのは嬉しいですよ」

理は、例えば伝統工芸の職人なんかでなくても、サラリーマンでもそういうものかなあ？と思った。まあ、理がコンビニの店長を引き継いでも父は嬉しくはないだろうが。

食事が終わってすっきりしたハーブティーを出してもらって、居間で話した。

「高美さん。あの脅迫文のことですが……」

理は奥さんと娘さんの前でいいかな？と思ったが、尚大が

「そうなんだよ、父さんの所に理くんの素性を調べるなって脅迫文が送られてきたんだ」

と父が襲われたことは伏せて注釈した。女性二人はまあ？と驚いた顔をして、理はありがたく頷いて、尋ねた。

「弟さん妹さん以外に誰か心当たりは？」

「いや……、わたしも考えたんだが、どうも思い当たらないねえ」

「ですよねえ？」

理も頷いて言った。

「僕のDNAと辰巳さんのDNAを比べて、配列に共通点がなければ、はい、他人でした、で終わっちゃう話ですものねえ？ 調べるなどと言う意味が分からない」

「そうだね。その脅迫者は遺伝子検査という物を知らないのか？ いや……」

犯人は理の祖母の髪の毛を奪い取っている。知らないということはないだろう。

「遺伝子に関する知識がないのか？ それとも、ひょっとして……」

「なんです？」

「いや……」

高美は言いづらそうにしながら言った。

「もしや会長自身の差し金ではないかと」

「それはまたどうして？」

「辰巳さんが殺されたという疑惑を強固にし、徹底的に大樹さん星華さんたちを排斥する機会にしよう……」

理は呆れた。

「自分の子どもでしょう？　会長さんはそんなにあの二人を嫌っているんですか？」

「それはだねえ……」

高美はあまり子どもに聞かせる話でもないだろうと渋ったが、尚大が言った。

「駄目だよ、探偵さんにちゃんと情報を与えなくちゃ？　それに、俺も後学のために確認しておきたいねえ」

と、尚大はだいたい事情を知っているようだ。高美氏は渋々話した。

「会長と、奥様のご実家との関係も影響しているんです。」

佐津川グループは大吉会長が一代で築いたように言われていますし、実際事業を拡大して定着させたのは会長なんです。その元々の資金は奥様のご実家、齋藤（さいとう）家から出ていたのです。齋藤家は戦前からの地元の大地主だったのですが、戦後は他の土地持ち同様大部分を接収されて、お大様でありましたので没落の一途を辿るところだったのを婿の大吉様の商才に助けていただいたて、その資金源でありながら頭が上がらないと言う状態だったんです。

辰巳さんが生まれて、大事な跡取りの長男ですから会長はそれはそれは大事に可愛がって育てました。あんまり会長が辰巳さんを可愛がるものですから、次男大樹さん、長女星華さんが生まれると今度は奥様の実家齋藤家があるこれと手を出して可愛がって、会長も

辰巳さんの秀才ぶりに満足して放っておいたんです。それが……

時が経ち、子どもたちが独り立ちすると、それぞれの器量の差が歴然として、会長はますます辰巳さんを頼みとし、後のお二人を遠ざけ、お二人をバックアップする奥様の齋藤家も二人が能力を発揮できず失敗したのは会長の意地悪な冷遇のせいだと憎み、会長はますますお二人を邪険にするようになったんです」

「うわー、嫌ねえー？ あたしあっちに生まれなくてよかったあー」

と瑞希が肩をぶるぶるさせて言った。理は訊いた。

「会長の奥様はお元気ですよねえ？」

通夜の席で会長のとなりに座り、渋い顔をしていた。見たところ夫に負けじとまだしっかりして、お年の割りには背筋もしゃんとして大柄なお婆さんだった。

「ええ。ご健康です」

「旦那さんとは仲はいいんですか？」

「それは……」

高美は苦笑した。

「まあ背後にそうした対立がありますからねえ、お二人の間にもピリピリとした空気が張り詰めることもあります、長く連れ添ってこられたお二人ですからね、お互いに対する理解と尊敬は当然あります」

結局仲がいいのか悪いのか今ひとつ分からないが。

「奥様は会長の決定をどう思っているんでしょうか？」

高美はまた顔を曇らせて言った。

「もちろん反対されてます。齋藤家の反発も強いです。お二人を切り捨てるとするのは実質的にバックアップする齋藤家を佐津川グループから追い出すことにもなりますから」

「やっぱりそうしたドロドロしたものがあるんですねー」
理もため息をつきなくなった。

それでも理を佐津川家に近づけさせないようにする「脅迫文」を

書くのは、弟妹たち同様メリットがない。

メリットがあるのは二人を憎む会長だけ、ということか。あーあ、なんて嫌な話だろう。

「あのさー」

と瑞希が訊いた。

「遺伝子検査って、そんなに簡単に出来るものなの？」

嫌な話題から逃れることが出来て父高美氏は笑顔で娘に講義した。

「遺伝子というものがどういう物か？ 学校で習っただろう？」

「苦手分野」

父親は勉強しろ！と笑って。

「遺伝子が生物の体を形成する設計図だというくらいは分かるな？ 全ての体細胞の核の中に存在する。」

遺伝子とはDNAと言う物質であると言っていい。

DNAはAⅡアデニン、TⅡチミン、GⅡグアニン、CⅡシトシン、の4つの塩基で構成されている。

この、ATGC、4つの組み合わせり方で、人間という生物種が成り立ち、それぞれの個人が成り立っている。

ATGC4つの組み合わせは人間という種として共通した部分と、一人一人個人で違う部分がある。

この一人一人で違う部分を参照して、親から受け継いだ部分を比較して、親子関係が成立するか判定するわけだ。

その比較する部分もDNA全てを読みとって比べるわけではない。人のDNAは22対（つい）プラスXYの計46本の染色体に、およそ30億対の塩基、2万2千のDNAがあるからね」

瑞希はちんぷんかんぷんの顔をした。

「塩基というのはATGCで、そのいくつか組み合わせた1ユニットが1DNAだ。染色体はそのDNAの鎖を納めた棒状の袋と考えればいい。」

人の染色体は2本の袋が途中でくつついていて、それぞれの染色体には途中にくびれがあって23本ずつ、計46本に分かれる、と考えればいい」

父親に目で確認され、瑞希は

「XYって何？」

「性染色体だ。XXの組み合わせで女性、XYの組み合わせで男性。Y遺伝子は男性しか持たないから通常YYの人間は生まれない」

「了解」

コクンと頷いた。

「男女が結婚して、子どもが出来ると、23本ずつの染色体がそれぞれから受け継がれて組み合わせられ、新たに46本の染色体を持つ子供が生まれるわけだ」

「結婚して、じゃなく、エッチして、でしょ？」

「こら。」

23本の染色体は対になった2本の染色体からランダムに選ばれる。つまり、2の23乗の組み合わせだ。これが両者から持ち寄られて……、まあ、膨大なパターンの子どもが生まれる確率になるわけだが、親と子と比較した場合にはある遺伝子は2分の1の確率で父親母親どちらかから受け継がれた物であるわけだ。

さて、今度は世の中にどれだけ『同じ遺伝子』を持つ人間がいるか、という問題で、どれだけの遺伝子を比較すればその2者を親子と判定できるか、と言うことになるが、

現在信用できるDNA鑑定法としてSTR5システムというのが採用されている。

STR || Short Tandem Repeat、縦列反復配分と言ってな」

またもちろんぶんかんぶん。

「DNAには同じ塩基の組み合わせパターンが繰り返し現れる物があるんだ。それは座、つまり全体における位置が決まっていて、その長さと組み合わせパターンを調べることでいくつかのタイプに分

類できる。その代表的な5つのDNAを調べることによって、計算上、50億通りの組み合わせがあり、両者が合っていれば、その親子関係は99・8パーセントの確率で保証されることになる」

「ふうーん」

「だから1週間から2週間あれば検査できるそうだ」

と、思い出したように高美は理を見た。

「理さん。真偽のほどは分かりませんが、何者かがあなたの遺伝子を調べるな、と警告しているのです」

「正確には『馬場理を調べるのはやめろ。彼は佐津川家とは無関係だ』でしたね？ この文面を素直に受け取れば、相手は僕の素性を知っていて、ご丁寧に佐津川家の人間ではないよ、と教えてくれているわけですね？ 佐津川家とは別に僕が拙い出生の秘密を持っている、ということでしょうかねえ？」

面白がって言う理を高美は心配そうに見つめて言った。

「相手にこういう事情があるのかは知らないが……、万が一、君に危険の及ぶようなことがあれば、わたしは君の父上に申し訳が立たない」

「でしたら」

理はあっけらかんと言った。

「さっさと調べちゃいましょう。僕が佐津川家に無関係だと分かれば、そちらは用無しで、それ以上親切に僕の身元捜しなんて続けないでしょう？」

「それはそうですが……、ではやはり辰巳さんの息子だったら？」

「それならその脅迫者は嘘をついていて、やはり佐津川家に何らかの利害関係のある者だ、ということになるでしょう？」

「そうですねえ……」

「ですからはっきりさせましょう。元々高美さんもそれをご希望なんでしょう？」

「ええ……。わたしはあなたを辰巳さんの息子さんだと思っています」

ので……」

「では、そうしましょう。決定。よろしいですね？」

「分かりました。それでは、明日、青陵大学病院に来ていただきましょう。車を迎えに行かせます」

「リムジンはご勘弁を。乗り心地が良すぎまして。

青陵大学ですか？」

「はい。公正と正確を期しまして。あちらとは特につながりはありませんので」

「と言うことは……、例えばカネギ製薬なんかは？」

「ええ。取引があります。それもあってお母様のことはすんなりと」

「ふうん、そうか。じゃあなおさら母さんと接点はあったわけだなあ……。

ああ、そうそう」

と、理は高美に父忠穂の「代理出産説」を説明した。高美は、あ、と言う驚いた顔をした。

「代理出産ですか……。なるほど…、その方が事情は肯けますねえ……。」

辰巳の精神と肉体の潔癖さが保たれて、高美は嬉しそうに納得した。

理は意地悪に笑って言った。

「これで母さんが生きていたら、辰巳さん殺害は母さんを犯人に出来るんですけどねえー」

不遜な謎掛けに高美は顔をしかめて聞き返した。

「お母様が辰巳さんを殺すとは、どうした理由で？」

「辰巳さん夫妻は不妊治療を受けていて、辰巳さんの精子は元々検査用に提供された物だったんです。ところが、母さんは相手があの佐津川家の御曹司だと知り、しかも夫人に子どもが出来ないのを知ると、奸計を案じたわけです。佐津川家にいずれ後継問題が起ることを見越し、自分が検査用に提供された精子を使って辰巳さんの子どもを身ごもったんです。そうして後継問題が起ったときに、

実はこの子こそ佐津川辰巳その人の子どもである、と差し出すわけです。この時に辰巳さんに生きていてもらっては話がややこしいので、死んでもらって、自分が実は辰巳さんの秘密の恋人であったと名乗り出るわけです。大財閥の莫大な財産を狙っての犯罪です。いやあ、悪い女ですねえ、うちの母さんは？」

理はあははと笑ったが、高美家の人々は暗い顔で理を見つめていた。

「いえ、冗談です。母はそんな人ではありません」

と、理は言い訳せねばならぬ羽目になり、故人をネタにした冗談はその人をよく知る人相手ではなくては通じないなあと反省した。

16、出揃ったヒント

理は尚大の運転する車で家まで送ってもらった。学校の応接室から直接来たので教室にカバンがそのまま置きっぱなしだが、今さらどうしようもない。尚大は大学近くでアパートを借りて一人暮らししているが、こうして何かとちよくちよく実家に帰ってきているそうだ。理は尚大はきっとあの妹ちゃんが可愛くてならないに違いないと思った。

「尚大さんは学部は？」

「お定まりの経済学部だよ」

「今4年生？」

「いや3年」

「それでもう就職内定ですか？」

「いにしえのバブル期みたいだね？」

尚大はアハハとハンサムに笑ったが、そりゃあ本家の子息たちに恨まれるのも無理ないなと思った。

「実は僕も既に青陵入学が内定しているんですよ？」

「へえ？ 君もなかなかやるねえ？ やっぱリスポーツで？」

「ええ。陸上部のコーチに入学決定を請け負われてまして。亀潟って人なんですけど、知ってます？」

「いや。僕はテニスのちゃらちゃらサークル会員だからね、陸上部のコーチなんて知らないなあ」

「そりゃそうですね」

しばらく運転をした後、赤信号で止まると、

「いや……」

と尚大は首を傾げた。

「亀潟さん、だっけ？」

「ええ」

「陸上部のコーチで？ どんな人？」

「50くらいの、人を食った丸顔のゴリラ、って感じかなあ？」

「ハハハ。愉快的描写だね。……………亀潟って人は一人知っている。その人が陸上部のコーチをしているかは知らないけれど、僕が知ってる亀潟って人は教授だよ。医学部の」

「教授？ ……そう言う感じには見えなかったけど……」

「いかにも教授らしく見える教授もいるけど、まったく教授らしく見えない教授も多いよ。亀潟教授は白衣を着ているから教授らしく見えるけどね。医学部の友人が『謎の休講が多い人だ』って言った」

「先週の月、火、水曜は？」

「3日間とも休講だった」

「大学の教授って部活のコーチなんかするものなんですか？」

「いや。サークルと違って部は本格的にやっているとところが多いから、専門分野の先生以外は、中学高校のように顧問に付くようなことはないと思うよ」

「病院の方にいるんですか？」

青陵大学は郊外に広い本キャンパスがあり、街中に大学病院がある。「いや」と尚大は言った。

「青陵大学の場合医学部は大きく分けて2つあるんだ。医者育てる部と研究者を育てる部だ。医学部の中心は医者を育てる大学病院キャンパスの方だけど、研究者を育てる部は本キャンパスの方が本部だ。」

亀潟教授の担当は医学部生体理工学科だ」

「どんなことを教えているんです？」

「僕はまったく専門外だから詳しくは分からないけれど、それこそ、ヒトDNAの解析なんかやってるようだよ？」

家に着くと灯りがついていた。

「ただいまー」

と玄関に入るとパジャマ姿で頭をバスタオルでくしゃくしゃ拭きながら忠穂が出てきた。

「おう、お帰り」

行きにリムジンから留守電にメッセージを入れてある。

「めしは食ってきたんだな？ どうだったい？ 将来の我が家は？」

「ああ、まるで竜宮城だったよ。佐津川一族の面々にも会ってきたよ。」

あの子、母さんって、大学で何勉強してたんだ？」

「言っただろう？ だからあ、遺伝子だよ」

「医学部生体理工学科、でか？」

「おう、そうだ。母さんがその第1期生だ」

「新設されたばかりだったの？」

「ああ。えーとな、ヒトゲノム計画ってのがあって、人の全DNAデータを解析するプロジェクトが世界規模であつたんだよ。で、そのー、塩基配列？ ってのはすべて読み出されたんだが、それはまあ膨大な一続きの訳の分からない記号の羅列なわけで、その意味するところを解析する作業がその後、現在も、延々と続けられているわけだ。母さんも授業でその研究をしていたようだな？」

「父さんは亀潟って人、知ってるかい？」

「さあ？ 分からないな」

「母さんの大学時代の写真はあるか？」

「あるぞ。待ってろ」

忠穂は夫婦の寝室だった部屋に行き、押入を開けてごそごそしていたが、やがて茶色い書類ケースを持って来た。「理花／大学」とラベルに書かれている。

「母さんはなんでもかんでもとっちらかしでな、俺が整理しようとする文句を言ったが無理矢理これだけはやらせた」

とふたを開けた。数枚ずつ専用のビニールに入った写真がざっと30セットくらい無造作に入れている。

「父さんたちが学生の頃はフィルム写真？」

「いや、とつくにデジタルだ。これは多分誰か仲間がプリントして母さんにくれた物だろう。机の引き出しとか本棚とかあちこち適当に放り投げてあった。どうも母さんは写真を撮ったり撮られたりって趣味はなかったみたいでな」

「そうだった？ 俺はいっぱい撮られたけど？」

「子どもは特別なんだよ」

「父さんは？ 学生時代母さんの写真は撮らなかったのか？」

「撮ったよ。父さんが撮った分はちゃんとアルバムとかCDにしてとってある。だが、おまえが見たいのはそういう写真じゃないんだろ？」

「うん：」

理は写真を物色していった。日付も何もない。母は本当に自分の記録に関してはまったく興味なかったようだ。袋の一番上の写真を見て目当ての写真の見当をつけていく。女友達で旅行に行った物や学園祭ではしゃいだ物や何かのパーティーで着飾った物や、母の青春時代の若々しい姿に興味はあったが、それはまた改めて楽しむとして、

研究室らしい所で白衣を着た写真を見つけ、中身を出して1枚1枚見ていった。2つ接眼レンズのある顕微鏡をしかめっ面で覗いている母の横顔がある。何か実験の記録のついでに学生たちの様子をスナップしたといったところだろうか。

十数枚ある内、何枚かグループでカメラを向いて記念写真に撮った物がある。

理は母も写っている一枚を指さし、父に見せた。

「この人、知ってる？」

忠穂は眉を寄せてじいっと見て、

「いや：。俺は母さんの学部の人間はかわいい女の子しか知らないからなあ」

と言った。

「これが亀潟さんだよ」

髪が濃く、肌も張りがあって、真面目な顔つきをして白衣を着ているが、確かに、20ほど若い亀潟だ。

「この人か。学生じゃあない感じだな？　じゃあ、講師か研究助手か？」

「今は教授だったさ」

「へえー。そのまま出世したのかな？」

写真を懐かしそうに見ていた父は、うん？、と別の写真に見入った。

「あれえ？　母さんの同科生だったんだ？……」
「誰？」

忠穂は一人の女子学生を指さした。

「今じゃすっかり丸くなっちゃってるけど、店の常連の近所のおばちゃんだ。なんだ、知り合いだったのかよ……」

「俺も会ったことあるな。ニコニコ学校のことなんか色々訊かれたけど。父さんは母さんのことを話したことないの？」

「一度もないな。おまえのことはよく話すけどな。2つ上の男の子がいるそうだけど、俺は分からないな」

理は他の写真も念入りに調べた。理の顔が曇った。別の写真も調べる。

「あと二人、知った顔がある」
指で示して父に教えた。

「この人は中学の保健室の先生で、この人は小学校の保健室の先生だ。ここでは見あたらないけどもしかすると今の保健室の先生も関係者かもな」

「別におかしくもないだろう？　ここらで一番医者を出しているのは青陵医学部だろうか？」

「おかしいよ。この学科は医者じゃなく研究者を育てるための学科だろう？」

「ああ、そうか……。医者の研修も受けたんじゃないか？　保健室の先生なら……、看護師くらいの資格でなれるんじゃないか？」

「そうかもね。でもさ、なんか、見張られてるような感じがしない？」

「うーん……。気のせい……なんじゃねえか？ あっちだって案外、あら？ って思いながら、遠慮して言わないだけかも知れないぞ？ 母さんによく似たおまえを見て、内心じゃあ懐かしがってるんじゃないか？」

「うーん……。そうかな？」

「そうだろうぜ。ほら、もう遅せえぞ？ さっさと風呂入って寝ろ」

「うん。そうする」

理が写真を元に戻そうとすると、

「俺がやつとくよ。さっさと行け」

と忠穂は息子を追い払った。

「んじゃ。父さんも頑張り過ぎるなよ？」

「おう」

理が行ってしまうと、忠穂はじいっと写真を見つめていった。

『どういう事なんだ？ こいつら、いったい何してやがるんだ？』

とうそ寒いものを感じながら。

翌日放課後になると理はバスで青陵大学病院に向かった。けっきよく車の迎えは断り、代わりにタクシー代をもらい、安いバスで料金を浮かせて残りを小遣いにせしめるのだ。

病院の入り口で忙しい高美に代わって部下の若い男性が待っていて、理を研究室の方へ連れていった。そこで口の内側の粘膜を採取され、しばらく確認で待たされた後、オーケーと言うことで解放された。

理はその研究員に訊いた。

「こちらにも医学部生体理工学科の教室はあるんですか？」

「教室はありませんが、研究室は共同で使ってますよ」

とのことだった。

それから数日、理は浮かない顔で過ごした。陸上部の練習もどうも身が入らず、「燃え尽き症候群か？」と先輩たちからかわれた。来週に地区大会が控えていてそんな余裕はないのだが……。

多喜子にも

「どうしたの？」

と顔を覗き込まれて心配された。

「いやあー、俺という人間存在に疑問が生じてしまっとな」

「なにそれ？」

多喜子は笑ったが、すぐになおさら心配そうな顔になった。

「何かあった？ 辰巳さんの子じゃなかったの？」

「それはまだ結果は出てないけどね。なんかね、もう分かっちゃった気がする。真相を示すヒントは全て出揃った。読者の挑戦を待つ！、ってな感じでね」

グラウンドで声を上げて走る陸上部の仲間たちやサッカー部、ラグビー部、スマッシュを打つテニス部女子のアンダースコートをぼんやり眺めながら、

「おーい」

と多喜子に目の前で手を振られて、ぼーっと多喜子の顔を見つめた。

「なに？ マコ、本当に大丈夫？」

「やっぱり瑞希さんより俺にはタッキーなんだよなあー…」

「誰よ？ 女？」

「うん。超アイドル級に可愛い高美さんの娘さん。高2でおまえより背が低くて胸がおっきいの」

「悪かったわね、でかくて、ぺったんこで！」

「いや、ぺったんこでもないぞ。うん、ちゃんと成長してるよ」

「スケベ！ 目が覚めたか？」

「いや、まだなんか夢うつつな感じ」

「そうとう重症ね？」

「タツキー。俺のこと好き？」

「な、なによ、急に。場所柄わきまえないよ？」

「俺さ、もしかしたら研究室で作られたサイボーグかも知れないぞ？」

「はあ？」

「いや、どうもマジでそうみたい」

「じゃあせいぜい世界平和のために戦ってよね。ほれ、加速装置！」
多喜子はバシン！と理の尻を叩いた。

「セクハラ女」

「喜べ、ヘンタイ！」

多喜子に追いかけて理は笑いながら走った。そのままグラウンドの外周をすごいスピードで。

追いかけるのをやめた多喜子は眩しそうに目で追い、ふと、暗い顔になった。

「あんたが特別な人間だって言うのは分かってるよ。でも、わたしは、ずっとあんたといっしょにいるからね……。いいよね？」

1周して戻ってきた理に多喜子は笑った。

「やれば出来る！ さぼるな！」

「よし。これから試合前にはおまえに気合いを叩き込んでもらうことにしよう」

「いいわよう？ 思いっきり手形つけてあげる」

二人は顔を見合わせて笑った。いちゃいちゃしとるな、バカもーん！と先輩の声が飛んできた。

17、影の軍団からの挑戦状

金曜夜、理が一人でいるところに高美から電話があった。

『理さん。申し訳ありません。研究室から検査中のあなたの細胞組織が盗難しました』

「ああ、そうですか」

『……あまり驚いていないようですね？……』

「いえ。」

どうも青陵大学病院はセキュリティに問題があるようですね。他の専門業者か、国際悠久カレッジに依頼しましょう」

『……続けますか？ どうやら相手はあくまであなたの身元を調べるのを妨害するようですよ？』

「だったらこっちだって意地です。白黒はつきりつけてやろうじゃないですか？」

『そうですか。あなたがそう言うなら……。明日のご都合は？』

「午前は授業です。午後1時半以降なら」

『では、今度はわたしが直接迎えに行きましょう』

「あれ？ 高美さん運転できるんですか？」

『しますよ。あまり機会もなく、この間襲われたときはお母様のご実家を訪ねるのに道が不案内でしたし駐車場も心配でしたので。運転は上手いつもりですのでご安心を』

「では安心して。よろしく願います」

『はい。では明日、学校にお迎えに上がります』

しかし。

外来者駐車場で待っていた理は携帯電話に高美から電話を受けた。高美の声は最初から怯えていた。

『理さん。やっぱり駄目です、彼らは本気です！… わたしは、殺される！』

「どうしたんです？ 何がありました？」

『そちらに向かっている途中、後ろから走ってきたオートバイに追い抜きざまフロントガラスに真っ赤な塗料を投げつけられたんです！ 危うくブレーキを踏んで、わたしは…、危うく死ぬところでした！』

「彼ら、そこまでしましたか？ 警察へは？」

『い、いえっ。し、しかし、これは会長や大樹さんたちの差し金ではないでしょう？ いくらなんでも、わたしまで殺すなんて…』

「会長の雇った探偵はいませんか？」

『あっ…、ああ、しばらくして追い抜いていった車がありましたが、あれがそうだったのかも…。ああ、やはり警察に報せましょうか？ これはもう、明らかに危険な犯罪だ！』

「高美さん、落ち着いてください。分かりました。ひとまずあなたは僕の件から手を引いてください。それで彼らもあなたには手を出さないでしょう。彼らとは僕が話を付けます」

『え？ あなたは、相手が誰か分かっているんですか？』

「ええ。脅迫状の通りです。僕は佐津川家とはなんの関わりもない人間です。彼らは、僕に、用があるんです」

『あなたが危険な目に遭うことはないんですか？』

「それはまずないですから、どうぞご安心を。高美さん」

『はい』

「危ない目に遭わせてしまっただけで申し訳ありませんでした。もう、大丈夫ですか？」

『ええ…。すみません、落ち着きました。塗料も、水性のようで、薄くしか残っていませんから運転も大丈夫です』

「では気をつけてお帰りください。本当にすみませんでした」

『いえ、とんでもない。あなたも、けっして無茶はなさらないように』

「ええ。僕は、大丈夫です。では」

通話を切った理は、

ちくしょうめ、バス代いくらかかるんだ？ とんだ散財だぜ、と腹を立てた。いや、腹が立つのは、いや、まっ赤な怒りがこみ上げてくるのは、無関係の高美を危険な目に遭わせたからだ。

『母さんは、交通事故で死んだんだぞ！』

めらめらと瞳に炎を燃え上がらせ、理はかの地を睨んだ。

待ってやがれ、今、会いに行つてやるぜ！

バス代を800円使つて理は国立青陵大学のキャンパスに着いた。何度か表の国道を通つたことはあるが、中に入るのは初めてだ。

理は門の守衛に「亀潟教授と約束がある」と申請し、ノートに名前を書き、外来者パスを首に掛けて入場を許された。

広いキャンパスを所々案内図を見ながら歩いた。学生ズボンの理を物珍しそうに眺め、陸上のスターだと気付く者もいたようだが、理の怖い顔に恐れをなして声を掛けてくることはなかった。

医学部に入る棟に入り、捕まえた学生に亀潟教授の所在を訊き、4階の医学部生体理工学科教授室をノックした。

「どうぞ」

と声がして、理はドアを開けた。

「失礼します」

窓をバックに、パソコンを置いた横向きの机から椅子をくるんとこちらに向け、白衣の亀潟が理を見て、笑った。

「やあ、理くん。訪ねてきてくれたのかね？」

「僕が来るのを知ってました？」

「いや、我々もそれほど暇じゃないのでね、まあ、予想はしていたが」

「高美さんを襲撃したお仲間からの連絡はあつたんですね？」

「まいったね」

と亀潟は顔をしかめて頭を掻いた。

「まったく、これじゃあやぶ蛇だ。事故にならない場所を選んでや

ったと聞いたが？」

「高美さんはひどく怯えていましたよ。殺される、ってね」

「そんな大げさな」

「大げさなんかじゃない！ あんたら、仮にも医学部の人間だろう！？」
人の命を軽々しく見てんじゃねえぞっ！！」

亀潟はむっつり困った顔になった。

「すっかり怒らせてしまったねえ。すまん。馬鹿な仲間になんて代わって謝るよ。この通り」

と、亀潟は開いた膝に手を置いて、深々頭を下げた。顔を上げ。

「体育科の人間で、調子に乗ってスパイ気取りになっているんだな。帰ってきたら厳しく叱っておくから、まあ、その、警察沙汰は面倒なんで勘弁してくれたまえ」

理は視線を逸らし、はあと怒りの感情をため息といっしょに吐き出して、亀潟に目を戻した。

「ええ、せいぜい叱っておいてください。佐津川会長の雇った探偵が追っていったようですからね、これ以上ちよっかいを出したら、本当に拙いことになりますよ？」

「分かった。あちらにももう決して手を出させないよ」

「母、明川理花を知っていますね？」

「ああ、よく知ってるよ。彼女は学生たちの憧れの的、マドンナだったからね。かく言うこのわたしも惚れていたよ」

「その母に、いったい何をしたんです？ 僕はいったい何なんですか？ 母も、あなた方のメンバーだったんですか？」

亀潟はゆっくり手を振った。

「何も。我々は何もしていないよ。我々はただ……、彼女の熱烈なファンだっただけだ。彼女が亡くなったのは本当に残念だ」

と、それが決して嘘でないように悲しそうな顔をした。表情を明るくして続ける。

「だが、君という種を残していつてくれた。彼女が亡くなった今、我々は君の熱烈なファンだ」

「それでストーカーですか？　あなたや、近所の人のいいおばさんや、小中学校の保険医や？」

亀潟は勘弁してくれと言うように両手を上げて理を抑えた。

「分かった。悪かったよ。だが、我々は何もせず、ひたすら静かに、君の成長を見守っていたただけなんだ。それは本当だ。信じてくれたまえ」

亀潟は困ったようにしながら、あまり悪びれた風でもなく、優しい微笑みを称えた目で理を見つめた。理は困惑した。亀潟は言う。

「では、お詫びの印に君にヒントをあげよう。優秀な君のことだ、自力で真相に辿り着くことを期待するよ。」

我々は君のお婆さんの頭髪を調べられるのを阻止し、君の細胞を調べられるのを阻止した。共にDNAを調べられるのを恐れてのことだ。

さて、どうしてだろうねえ？

まずは第1問だ。答えはお祖父さんお祖母さんに言いたまえ。彼らの話を聞いたら、またここへ来るといい。待っているよ」

18、関係X

理は大学から祖父母の家を訪ねた。

理を迎える祖父母の顔は嬉しいようでもあり、何かを恐れるようでもあった。

麦茶を出されて、理は二人に言った。

「亀潟教授から問題を出されました。大学で母さんの講師だった人です。」

お祖母さんのDNAと僕のDNAを調べられて困るのは何故か？
ごく単純に考えて、お祖母ちゃんの遺伝子の半分が母さんに受け継がれ、母さんの遺伝子の半分が僕に受け継がれ、ま、単純に考えればお婆ちゃんの遺伝子の4分の1が僕に受け継がれているはずですよ。

その両者を比べられて困る事態とは、

両者に共通点が全くない場合じゃないですか？」

祖父と祖母の顔から笑みが消え、実に悲愴な顔になった。理は努めて冷静に言った。

「母は、お祖父ちゃんお祖母ちゃんの実子ではないんですね？」

「違う！ それは違うぞ！」

祖父が感極まったように言った。

「理花はわしとこれの娘だ。誰がなんと言おうと、わしらの娘だ！」

理は冷静に言う。

「お祖父ちゃんは高美さんの遺伝子検査の申し出を頑なに断ったそうですね？ 母にはお祖父ちゃんの遺伝子も受け継がれていないんでしょうか？」

「理……………」

祖父はなんと哀れな目で孫を見た。理は言った。

「母はお二人をとっても慕ってましたよね？ お二人もこんなに母を愛してくださっている。母は、」

祖母を向いて。

「受精卵の提供を受けてお祖母ちゃんが生んでくれた子だったんじゃないませんか？」

祖母は頷いた。

「そうだよ、理。理花は確かにわたしが生みました。理花はわたしの子で、わたしたち夫婦の子です」

理は言った。

「ええ。母はお父さんお母さんに感謝しています。僕もです。ですからね、

単純な興味で訊くんですけど、母さんの遺伝的な両親は誰なんですか？」

祖父が答えた。

「それはわしらも知らない。ただ、非常に優秀で健康な両親だと聞かされた」

「どういう経緯で母さんを生むことになったんです？」

「わしのせいなんだ。」

わしは無精子症で、元から子どもを作れない体だったんだ。医者でそう診断された。わしらががっかりしていると、その医者に大学の病院を紹介された」

「青陵大学病院ですか？」

「そうだ。そこで薦められたのが、人工受精卵を使って妊娠する方法だ。今から40年以上前の話だ、当時も既に体外受精の方法は使われていたが、まだそうしたことには抵抗があり、成功の確率……妊娠することもまだ低かったように思う。それに、費用も高かったしな。」

だが、大学の研究室から秘密裏に提示されたのは、あちらで提供する受精卵を使って妊娠すれば、費用は全てあちら持ち、最高の環境で出産していただく、ということだった。我々は心身共に健康な両親を捜していた、あなた方はとても幸運ですよ、と。

わしらも馬鹿じゃない、いったいどんな種なのだ？と怪しんだ。

彼が説明したのはこうだ、

これは日本国に優秀な人材を生み育てるプロジェクトであり、その受精卵は最高の父親の精子と最高の母親の卵を掛け合わせた物で、非常に優秀で健康な子どもが生まれるのは保証されている。我々はこの子に成長する、日本国民として一般的な良い環境を与えてあげたい。あなた方は我々の設定する条件にぴったりのです。あなた方はただその子を我が子として可愛がり、育てていってくださいばよい。その成長に関して、我々は一切の干渉をいたしません、と。

わしらも迷った末、その条件を受け入れることにした。どうしても自分たちの子が欲しかったし、自分たちの子として育てればよいということ、決心が付いたのだ」

理は祖母に訊いた。

「お祖母ちゃんはそれで良かったの？ お祖母ちゃんの側に子どもを作る上での問題はなかったんでしょう？」

「わたしは、かえってその方が気が楽だったわ。こう言ってはなんだけど、自分の体に他の男性の種を受け入れるのは抵抗が強かったから。いっそ最初から出来上がった受精卵を自分の体で育てる方が気が楽だったわね」

祖父が言った。

「そうだな。養子をもらうことも考えたが、妻がお腹を痛めて生んだ子を自分たちの子として育てる方がずっと愛情を持てるだろうと思っただ」

祖母はうつむいて静かに微笑み、祖父は見つめながら照れくさそうに渋い笑いを浮かべた。祖父が言う。

「結果的に選択は大正解だったよ。理花は、それはもう可愛い、利口な子で、性格も穏やかでいつもニコニコしているようないい子だった。特に病氣らしい病氣もせず、高校生まで育てるのにほとんど手は掛からなかったな」

祖母も頷いた。理が訊く。

「母さんが青陵大学に入学したのは？ 自分の意志で？」

祖父が答える。

「そうだろうと思う。もしかしたら、裏で何らかの手が回っていたのかも知れないが、理花がそのことで何か悩んでいるようなことはなかったな。とにかくやたらと頭のいい子だったから、自然とわたらの実の子ではないと気づき、自分の与えられた役割を考えていたのかも知れない」

「母さんが与えられた役割…ねえ？」

理はちよつと氣に入らなく思った。それだけ優秀ならもつとレベルの高い、トップの大学にだって入れたんじゃないかと思うが、自分の出生にまつわる地元の大学のしかもルートである医学部に入学するなど、ちよつと出来過ぎで、裏で何らかの意志が働いていたんじゃないかと疑われる。例えば競技場で熱心に入学を誘ってきた亀潟教授のように……。新設された医学部生体理工学科なんてまさに母のために用意されたようなものじゃないか？

理はもう一度訊いた。

「母さんの両親が誰か？ 具体的には分からないんですね？」

「分かん」

祖父も祖母も首を振った。

「あちらもそれは教えられないと言ったし、あなた方も知らない方が自分の子として愛せるでしょう？ と言い、むしろその通りだなと思ったから、敢えて追求もせんかったよ」

「そうですか。そりゃちよつと残念だなあ」

「なあ、理」

祖父が遠慮がちに顔色を窺うように言った。

「おまえの父親のことなんだが……」

「ああ。お祖父ちゃんたちは知らなかったんですよね？ 父さんも気が利かないなあ。まあ、佐津川家の跡取りかも知れない、なんて騒ぎになっちゃって、潮時と思ったんでしょね。あーあ、高美さんは貧乏くじだ、かわいそうに」

ニヤニヤする理を祖父母は心配そうに見た。

「じゃあ、本当に……。理花の奴、なんで自分まで父親のいない子を産もうなどと考えたのか……」

落ち込む祖父母を理は明るい顔で慰めた。

「ああ、それも多分分かってます。母さんの名誉のために申しますが、母さんは、僕を本当に生みたくて生んでくれたんだと思いますよ？ 自分たちのために」

「自分たちのため？」

首を傾げる二人に、

「ええ。まあ、その答えは教授をとっちめてやりますよ」と悪戯っぽく笑い、麦茶の残りを飲み干した。

「ごちそうさま。また遊びに来ますよ」

「ああ、いつでも来なさい」

ほっとしたように微笑む祖父母に、理は、あ……、と思い出して愛想笑いを浮かべた。

「あのー……、お小遣い、いただけませんか？」

19、母の決断

理は高いバス賃を使って再び青陵大学にやってきた。電話を受けて待っていた亀潟教授は呆れた顔で言った。

「ずいぶん早い再訪だな？ 月曜まで待てなかったのか？」

「知ってるでしょう？ 僕は来週末に地区大会ですよ？ こっちはさっさと片づけて、練習に専念しなくちゃ。教授は、どうするんです？、応援はもうよしますか？」

「君が許してくれるんなら行きたいがねえ？」

「熱心なファンですねえ？ 観覧は無料ですからどうぞお友だちお誘い合わせの上。」

で、訊きたいんですけど、母の遺伝上の両親は誰なんです？」

「ノーベル賞物の天才とオリンピックメダリスト級のアスリート、と言ったところかな？ 実は我々も知らん。前任者から受け継いだだけだからね。国家的プロジェクトだったとも言うし、実は一研究グループの単なる趣味だった、とも思えるしね。わたしも調べたが、よく分からん。ただ、

同じ受精卵が複数あったらしい。

この意味は、分かるね？」

理もさすがにビリッと戦慄して言った。

「クローン……」

「そうだ。分裂を開始した受精卵を8つに分けた1つが、君のお母さん、明川理花だ」

「受精卵のクローンって、そんなに簡単に出来るんですか？」

「それが限界だ。それ以上は胚として機能しなくなる。」

学界の噂を総合するとこの世には時をずらして8人の明川理花が生まれたはずだが、他に突出した明川理花は世の表舞台に登場していないようだから、君のお母さん以外は失敗作だったらしいねえ？」

「ひどいことを言いますねえ？ まるで実験動物扱いだ？」

「わたしのやったことではないんだがねえ？　じゃあもつと教えてやろう。明川理花はプロジェクトの第1世代ではない。人工授精の技術が開発されたから一気に8人もの実験体を生むことが出来たが、それまでは一世代一世代、昔ながらのやり方で『天才』を生み出す組み合わせがなされてきたのだよ」

「そうした天才同士を結婚させて、子どもを生ませる？」

「そう。だが人間は感情の動物だ、なかなか当人同士は周りの思惑通りの行動は取ってくれなくてねえ、うまく子どもができてもなかなか期待通りの天才には育ってくれなかったようだ」

「そりゃそうでしょうよ。そもそもそんなことを考えるのがいびつなんです」

「その点、今はいい。」

精子と卵さえ提供してもらえれば、数度に渡って異なった組み合わせの受精卵を作ることができ、さらにそれをクローンし、複数の同じ人間を作り、異なった両親、異なった環境で育てることが出来るからねえ」

「そんなことやってるんですか？」

「いや、やってない」

教授はあっさり否定した。

「出来るようになった、ら、他でも同じようなことを始めた。別に研究機関が頼まなくて天才科学者やトップアスリートや人気俳優の精子は高額でギャラで精子バンクに買われ、彼らの子を欲しがる母親たちに高額で売れ、天才の子どもがごろごろ世に生まれるようになった。まったく、馬鹿馬鹿しい。」

そして、天才の子は天才の素質を持つが、育つ環境によって必ずしも天才に育つものではないということが分かって、天才の種計画はすっかり目標を失ってしまった、というわけだ。

けっきょく明川理花がその方法を試された最初で最後だったと思われる。そして君のお母さんが証明した。

人が育つのは、環境だよ」

「当たり前前の結論に、ずいぶん遠回りして辿り着きましたねえ？」

「そう思うかい？」

教授の思わせぶりな微笑みに理は首を傾げた。

「わたしの目の前に、その例外がいるじゃないか？」

「僕は、母さんみたいなすごい天才じゃありませんよ？ 母さんが

人類史上まれにみる超天才だとしたら、僕はその50パーセントのハーフサイズのそこそこの天才に過ぎません。がっかりでしょう？」

教授はニヤツと笑って理を見つめた。

「いいや、とんでもない。君は天才だ。君は自分がどれだけすごい天才か、まだ気付いていないだけだ」

理は教授が何を考えているのか怪しみ、その不気味な微笑みに、ゾツと背筋が寒くなった。

「わたしの立場から順を追って話そうか。」

わたしは元々理学部の院生で、そのまま研究員として講師を務めていた。その時やっていたのが日進月歩の研究開発の行われていたバイオ工学だ。平たく言ってしまうえば遺伝子組み替え技術の商品化だ。

そんなわたしに新設される医学部生物理工学科への移動が打診された。医療とは畑違いのわたしに何故と思ったが、要するにバイオ技術のヒト細胞への応用を見据えたものだった」

「人の遺伝子の組み替え、ですか？」

「研究は必要だ。遺伝子治療も遺伝子組み替えの技術が必要とされる。単純に入れた取った、切った貼ったは出来ないのですね。」

わたしはそちらへ移動し、1期生として君のお母さんが入ってきた。

日が経つに連れ明川君の優秀さは際だっていった。単なる秀才ではなく、常識の連続をいとも簡単に、まったく別の飛び石を蹴って、飛び越え、結論に到達する、天才にしか持ち得ないひらめき力がずば抜けていた。彼女の前では、我々は原始時代のサルに過ぎなかった。

たよ。

そうすると、わたしや優秀な研究員や学生が選抜されて教授の下へ集められ、彼女が何者か、教えられた。さる国家機関の機密プロジェクトの産物だという」

教授は可笑しそうに笑った。

「我々は命じられ、その場でチームを結成し、明川君の観察を開始したのだ。

君に断っておくが、我々は彼女を突然変異のミュータントやモンスターといったグロテスクかつネガティブな目で見ていたわけではない。我々は皆彼女の天才に憧れ、崇拜していたのだ。美人だったしな。実際彼女のしでかすことを見ているのは楽しかった。我々研究者にとっては、毎日がハプニングの連続で、発見の連続で、毎日浮き浮きしていたよ。あの頃は…、本当に楽しかった………」

昔を懐かしむ教授は目にうつすら涙を浮かべていた。

「そうそう、君のお父さんだ。まったく、腹立たしい」

教授は笑いながら睨んだ。

「なんである天才明川理花が馬場忠穂なる凡人を恋人に選んだのか、まったく、彼女のすることはさっぱり訳が分からん。我々、特に男どもが、どれほどあいつを妬ましく思っただ嫉妬に狂ったことか」

あつはつはつは、と教授は喉で笑った。

「あいつがアメリカに留学したときはなんて馬鹿な奴だと大喜びしたよ。

だからね、我々は本当にあるんだかないんだか分からない国家機関なんてどうでもよく、純粹にファンとして、彼女を見守っていただけなんだ。そう、熱烈な明川理花ファンクラブだよ。ファンクラブの会員は、崇拜するアイドルに決して手を出してはいけないのさ」と、教授はちよつと寂しそうに笑った。

「彼女は卒業するとカネギ製薬に就職した。教授はいずれ彼女を教授に迎えるからと約束までして引き留めようとしたが、彼女の才能に目を付けたあちらさんに即刻もつといい条件を提示されて、引き

抜かれてしまった。条件もそうだが……我々の監視から逃れたかったんだろう。彼女は研究しかできない研究馬鹿ではなかった。もっと広範に、自分自身の人生を楽しみたかったのだろう。

後に、彼女が我々の監視から逃れたかった一番の原因が、君だ、ということが分かった。

彼女も我々を仲間だと思ってくれていたと思う。我々は彼女が相談してくればなんだって喜んでお手伝いしただろう。しかしその我々にも秘密で、彼女は君を生みたかったのだ。

君を生んで、恋人馬場忠穂と結婚した彼女は……、幸せだったのだろうねえ？」

教授の優しく寂しい目に理は頷いた。

「ええ。息子の僕が保証します。母は、毎日楽しそうに笑ってましたよ」

「そうか。……まったく、羨ましい……」

教授はわざと悪ぶった憎々しい笑いを浮かべた。理は訊いた。

「母が僕を生んだのは、父と結婚するためでしょうか？」

「多分、そうなのだろうね」

「何故そうしなければならなかったのか、知っているんですね？」

「うん。知ってるよ」

「父が原因なんですね？」

「いや、違う。忠穂君は正常だ」

理は眉を寄せて首を傾げた。教授は愉快そうに言った。

「推理が外れたか？　じゃあ、君の推理を言ってみたまえ」

「母は、父が留学した後、流産したんじゃないですか？」

教授は頷き、続けるよう促した。

「流産の原因は父の精子の遺伝子異常でした。父自身に異常は発現しないが、その子どもには、何か重大な疾患が生じる。」

母は父の精子を使ってその疾患を生じさせる遺伝子を除去する研究をし、そうして完成させた精子で受精し、僕を身ごもったんです。

僕の父は、馬場忠穂です」

「どうやってアメリカにいる忠穂君の精子を手に入れたんだね？」

「あらかじめ冷凍保存していたんでしょう。元々恋人同士だったんですから、精液を採取する機会ならいくらでもあったでしょう。何かの研究用にと手っ取り早く取っておいたのでしょうか」

「何かの研究に、ねえ？　ちょっと弱い気がするが、では、何故忠穂君が帰ってくる前に妊娠してしまったのだね？　結婚してから妊娠すれば良かったじゃないか？」

「子どもの安全が確認できなかったからでしょう。母は流産の悲しみを味わっていますから、父に同じ悲しみを味わわせたくなかったのでしょうか。おそらく、十分成長し、遺伝子検査でも異常が出ず、生んでも大丈夫と確認できてから父に会ったのでしょうか」

「何故父親が忠穂君だと言わなかったのかね？　どうしてわざわざ他に父親がいるようなことを匂わせなければならなかったのかね？」

「それこそ実験動物のように、遺伝子をいじくったからでしょう。生命倫理に反すると、父に嫌悪感を抱かれるのを恐れたんじゃないですか？　僕が大人になって十分色々なことを理解できるようになったらその時に僕にも父にも本当のことを明かす、という約束だったそうですから。その時まで僕が十分健康に、お利口に、育っていれば、父も僕や母に嫌悪感を抱くこともないでしょうから……」

「どうしたね？」

理は、ぎょっとした、張り詰めた目で教授を見た。

「母は……、自分で墮胎したんじゃないやありませんか？……　あらかじめ遺伝子検査して、お腹の子どもが重大な疾患を抱えて生まれてくることが事前に分かってしまった。当時母はまだ3年の学生で、お金もそうないでしょうし、重大な疾患を持った子どもを育てていくことは不可能と判断して……、自らの手でその子を堕ろしたんです……。その罪の意識もあって、今度こそ、絶対に、健康な赤ん坊を生まなければならなかった。だから、そうした倫理的に問題のある研究を敢えて行い、実践した……。それを、父に言うわけにはい

「かなかったんじゃないですか？………」
教授は、

「ま、60点というところかな？」
と言った。

20, XY

理は眉をひそめて訊いた。

「あなたは僕の父親が誰か知っている。そうですね？」

「まあね」

「それは、馬場忠穂である」

「まあね」

「じゃあ…、どこが間違ってます？」

「質問しよう。君は自分が佐津川辰巳の実の子どもではないかと思
ったかね？」

「……いいえ」

「その根拠は？」

「なんとなく……」

教授は笑ってチツチツ、と指を振った。

「ごまかすなよ？　じゃあわたしから一つ、完璧な君の、明らかに
他人より劣った、肉体的弱点を指摘してやろう。

君は、左右の視界の統合失調がある。簡単に言えば、物を立体的
に見るのが苦手だ。違いかい？」

理は黙って、認めたがらなかった。

「まったく駄目なわけじゃないから日常生活に支障を来すことはな
いが、速いスピードで目の前に迫ってくるような物を捉えるのは苦
手だ。距離感が掴めない。だから、君は人一倍運動神経がいいから
経験的な計算で誤魔化しているが、例えば、テニスなどの球技は苦
手だ」

「どうだ？と教授は得意そうに笑った。

「それは必ずしも遺伝するものではないが、同じく高い運動能力を
持ちながら、元プロテニスプレーヤーが父親とは、君はなかなか思
えなかったのじゃないか？」

理は、ふうつとため息をつき、認めた。

「その通りです。どうやら僕は物を見るのが苦手らしいです。実は球技は大の苦手です。」

どうして分かりました？」

教授は左右の目に指で作った丸を当て、

「明川君も立体顕微鏡を覗くのが大の苦手でいつも苦勞していたよ」と、それがヒントだ、と言わんばかりに笑った。

「それは、必ずしも遺伝するものではないんですね？」

「ああ、そうだよ」

理はなんだか本当に自分の存在が恐ろしくなってきた。

「僕は、いったい誰なんですか？」

教授はちよつとがっかりしたように頭を振った。

「確かに、君は明川君に比べるとまとも過ぎるなあ。まあ、仕方ない、今後に期待と言うことで教えてあげようか。」

と、偉そうなことを言いながら、我々が君の正体を突き止めたのは割と最近のことだ。明川君の生前は彼女のガードがきつくて君からサンプルを採取することが出来なかったからね。

君は、98パーセントの明川理花だよ。

つまり君は、

男版の、明川理花だ」

「僕は、母さんのクローン？」

理は考えた。

「まあ、子どもの頃からさんざんお母さんそっくりと言われてきましたからね、僕もそう考えたことはありますが、母さんが僕をそういう風に作ったとは思えませんねえ？」

「何故？」

「第一、僕は男です。母さんのクローンではあり得ません」

「だから98パーセントと言っただろう？ 確かに、君は馬場忠穂君の息子だよ。わずか2パーセントだけね」

「それはつまり、Y染色体ということですか？」

「その通り。よく勉強しているね？ そもそもY染色体は男性しか持たず、男親からしか遺伝しない。だから男の子の君が女親のクロールンではあり得ない。と言うのは既に数十年前の常識だ。やろうと思えば、その程度のこと、机の上のシャーレの中で出来てしまうのだよ」

「出来るとなればやってしまうのが人間でしょう？ そういう風にして生まれた人間なんて、聞いたことありませんよ？」

「そうだね。可能ではあるが、精度が著しく低い、と言うのが現在も現状だろう。そもそも人間のクロールンを作るのだって、倫理面はさておき、技術的に問題は多い」

「それでも僕は母さんの『ほぼクロールン』なんですか？」

「その通り。それは、既に遺伝子検査で確認済みだ。君の遺伝子は98パーセントどころか、99パーセント以上明川理花君と同一だ。Y染色体の遺伝子数はX染色体の遺伝子数のわずか7パーセントに過ぎないからね」

「母さんは『出来損ないの自分』が出来る危険が大きいのを承知の上で自分のクロールンを作ったんですか？」

「だから我々は興味深く君を観察している」

教授は冷徹な研究者の目で理を見て言った。が、すぐにその目を柔和に笑わせた。

「君は君のお母さんが君をそんな出来損ないに生んだと思うかい？」

「いいえ」

「我々もだ。」

我々は明川君の天才性の足元にも及ばない。正直彼女がどのような君のような完璧なクロールンを作り出したのか？、見当は付いても具体的な方法はさっぱり分からん」

「見当は付くんですか？」

「単なる憶測だ。

何故、クローン生物は短命なのか？

理由、と言うか、原因はいろいろあるだろう。原因となるのは単なる技術的洗練が足りないと言うことかも知れない。

しかしそれ以前に、クローンは長生きしないように『出来ている』、生物の仕組みがあるのだろう。

クローンを作るのは簡単だ、受精卵から核を抜き取り、クローンの親の体細胞を入れてやればよい。

動物の設計図が遺伝子であり、細胞は遺伝子によって活動を制御されているのだから、その遺伝子を入れ替えれば細胞はその遺伝子に従って活動するはずだ。が、

果たして生き物の仕組みというのはそう単純なものだろうか？

生まれたての赤ん坊の遺伝子と、90過ぎの老人の遺伝子が、はたして、同じなのだろうか？

生き物の肉体を制御しているのははたして一方的に遺伝子なのだろうか？

遺伝子は、肉体の影響を受けないのだろうか？

わたしは遺伝子も制御している肉体⇨細胞からのフィードバックを受けて何らかの変化を起こしていると考ええる。

遺伝子そのものもヒトの生涯において不変ではないのだ。

年寄りの遺伝子は、やはり年寄りなのだ」

教授は、おっと、つい講義が過ぎたかなと肩をすくめた。生徒の理が問う。

「その理屈なら、僕は母さんの寿命から僕を作った年齢を引いた寿命しかない、ということになりますか？」

「普通のやり方なら、そういうことになるのじゃないかと思う。

だが、天才明川君がそんなレベルの低いことをするわけがない。細胞と遺伝子の関係がわたしの推測通りなら、明川君は、遺伝子の年齢をゼロに設定する方法を作り上げたのだろう。

おそらく明川君はまず自分の遺伝子と子どもの遺伝子を比較検討

したと思う。しかしおそらくそこに年齢差の謎を解く鍵は見つけられなかったと思う。受精卵に体細胞を入れ替えると遺伝子のその体細胞の部位特有のコードがクリアされることは分かっている。しかしそれでも動物のクローンは短命に終わり、年齢に関するなんらかの変化はクリアされない。

そこでおそらく明川君が行ったのは、ゼロから、自分の遺伝子と同じ塩基配列を持つ新しい遺伝子を作ったのだろう」

「人工遺伝子、と言うことですか？ 出来るんですかそんなこと？」

「遺伝子を形成する物質はとくに分かっているのだ、配列コードが決まっていれば、それを機械的に作ることは出来るよ」

「じゃあ…、出来るんですか？」

「いや。これまた複雑な多細胞生物を成長させる事に成功した人工遺伝子は現在も報告されていないよ。せいぜいウイルスやバクテリア程度だ。だが、そんなものでも、可能であることは可能なのだ。」

わたしは、明川君は受精卵の方にもなんらかの手を加えたのではないかと思う。生命発達を円滑に促す、いわばスーパー受精卵とも言うべきものを作り上げたのだろう。

と、まあ、いかにも大げさな超最新化学を導入して、いかにもまるで生物ロボットを作り上げるような印象だが、肝心なのは、これは彼女自身の遺伝子であり、卵であり、父親由来の精子であると言うことだ」

「さっきは僕の冷凍精子説を否定的に採点したじゃないですか？」

「だって不自然だろう？ 彼女は、おそらく、胎児からそれを作ったのだよ。墮胎した胎児の細胞からiPS細胞、つまり人工多能性細胞を作り出し、そこから精子を分化させたのだろう。君の男性たるY染色体の出所もそこだろう」

「……それはまた、ずいぶん悪魔的な考えじゃありませんか？」

「そうだねえ。天才明川理花君と言えども精神的な葛藤がなかったとは思わないよ。これを悪魔の所行と呼ぶか、我が子を生き返らせようとする母親の執念と呼ぶか、人それぞれだろうが、君は、どう

思うね？」

「さあ？　僕は自分を否定することは出来ません」

「そう。最終的に彼女も自分を否定しなかった。研究の末、出来る、と自信があったから、実行したのだろう。」

それでだね、結局のところ彼女がやったのは、自分という生物のリフレッシュなのだよ。遺伝子のリフレッシュ、受精卵のリフレッシュ、胚のリフレッシュだ。わたしはいかにもそれらしく彼女のしたことを自分の知識で解説したが、彼女のことだ、我々がまったく思いも寄らない方法でそれを行ったのかも知れない。

いずれにせよ彼女はこの凄まじい技術を、ひたすら自分のためにだけ作り上げたのだ。そして、最終的に自分の死によって封印してしまった。彼女がカネギ製薬の研究室に残した研究は、今も引き続き行われているはずで、いつか我々もその恩恵に預かれる日が来るとは思うがね。：ちと、時間が掛かりすぎて歯がゆいね。まったく、彼女の死が惜しまれてならないよ」

理は教授の話を考えてみたが、さすがに高校1年生の知識で検証できるレベルの問題ではなかった。教授もニヤニヤ笑い、

「全てわたしの推測だ。実は君が性別を入れ替えただけの明川君の単なるクローンと考える方がずっと楽だし、もしかしたらその通りかも知れない」

「そう思いながら僕を観察しているんですか？　いつおかしくなつて死んでしまうだろうか？　って」

「可能性としてはあると思うが、そんな残念な結果は期待していないよ。我々は今も明川理花の天才性のファンなのだ」

と、その作品である理を愛しそうに眺めた。

「さて。第2問の解説はこんなものでいいかい？　それでは、次の問題が何か、分かるかね？」

「僕が何故男なのか？」

「ふむ。何故だろうね？」

「僕が自分と同じ人間では父さんの子として困る。いずれ成長して自分と同じ『女』になってしまったら、父さんが娘をどういう目で見るか心配だ」

「ハハハ。そうだね。他に理由は？」

「遺伝的にもやはり父さんの子にしたかった」

「他には？」

「妊娠した子どもは遺伝的疾患があった。それは母親由来なんですね？」

「うん」

「では、X染色体の遺伝子に問題があったんです。減数分裂で半分になった精子と卵の染色体が合わさって通常の染色体に戻るとき、半分ずつの染色体が単純にくっつくのではなく、遺伝子の交換を行い、2本の染色体の遺伝子の配列が変わり、個体のさらなるバラエティーが増える。だが違う染色体であるX染色体とY染色体の遺伝子は交換が起こりづらく、男性としてY遺伝子の方が優先的に発現する。だから母さんのX遺伝子を発現させないために僕を男にする必要があったんです」

「0点。君らしくもない。それなら君にも前の子と同様の疾患が起きるだろう？」

「あ…、そうか。でも、それじゃあ……」

「悪い。意地悪をした。明川君が君を男の子にした理由は君を馬場忠穂君の子どもにしたかっただけだろう」

「でも、それじゃあ……」

「そうだね。君は遺伝子に、母親の遺伝子の問題点をそのまま受け継いでいることになる。君自身には問題はないが、君の子どもに引き継がれる問題がね。」

事実を教えよう。

明川君イコール君の遺伝子は、普通の人間の遺伝子と比べ、異常

に数が多く、位置にズレが生じているのだ、全般的にね。それが細胞に発現すると、ズレにズレが重なって、体組織になると形質や機能におかしな点が出てきて、ついに重大な疾患を引き起こす、というわけだ。当人はずれているのが当たり前で、それでバランスが取れているが、他の凡人の遺伝子と組み合わせるとそのズレが疾患になってしまうのだよ」

教授は皮肉に頭を振って言った。

「数世代に渡り天才に天才を掛け合わせた末に誕生したのが明川理花だ。天才の遺伝子というのは、やはりどこかおかしな物なのかねえ？ 遺伝子レベルで既に我々凡人とは別物なのだよ。彼女には元々、子どもを作る相手がいなかったのだ」

「では、僕も自分の子どもを作ることは出来ないんですね？」

「第4問。」

そこで、明川君は、どうした？」

「『どうした？』」

理は怪しみながら教授を見つめた。

「それも調べて『答え』を確認しているんですか？」

「うん。確認済みだ」

理はじいっと教授の目の奥を見つめた。

「僕と母さんには誰にも秘密の約束があるんです。それが母さんが僕のために用意した『答え』なんですね？」

「君と明川君の約束は知らないが、ま、そうなんだろうね」

その答えを予想して、理はキーンと耳鳴りがした。

「XXXXXは君の母親によってXXXXXされている」

21、父への告白

自宅付近まで帰ってきた理は携帯で多喜子を家の外へ呼びだした。時刻は8時を過ぎている。

「こらサボリ」

素直に出てきた多喜子は部の練習をさぼったことを怒って口をとがらせ、心配そうな顔になって理の顔を覗き込んだ。

「何かあった？ 顔がまじめだよ？」

「なんだよ、その訊き方」

理は笑った。

「悪いんだけどさー、おまえに聞かせられない話があるんだよなー。しばらく父さんの店で遊んでてくれないか？」

「わたしに聞かせられない話ってなにによお？」

「だから、それは言えない。辰巳さんのプライバシーに関わることなんadena、おじさんと、おばさんにしか話せない。おまえは知らなくていい話だから、どうしても聞きたければお父さんから聞け」

「うん……。分かった……。マコ、やっぱり辰巳おじさんの子じゃ……」

「それは俺の問題だから、迎えに行ったら帰りに教えてやるよ」

「うん……」

と、理は多喜子を父のコンビニまで送っていった。

多喜子の家を訪れると、父母は笑顔を見せながら緊張の色を隠せず理を迎えた。

居間のテーブルで向かい合い。

「ご報告します。」

僕は佐津川辰巳さんの子ではないことがはっきりしました」
多喜子の父はがっかりした顔をして、

「そうか。それは、残念だったねえ」

と言った。理は多喜子の母にも訊いた。

「お母さんもやっぱり残念でした？　僕が辰巳さんの子どもじゃなくって？」

多喜子の母は笑いながら言った。

「わたしは別にかまわないわよ？　マコちゃんはマコちゃんですもの」

理は指を顎に当て、「フム」と考えるふりをした。

「僕は嬉しかったですよ。辰巳さんの子どもじゃなくて。最初からまさかなあと思っていたんですけれどね。本当はお二人もほっとしているんじゃないですか？　僕が辰巳さんの子どもじゃなくって？」

「何故だね？　わたしは正直がっかりだよ？」

渋い笑いを浮かべて認めない父に、理は不満そうに言った。

「お二人には是非喜んでもらわなくちゃ困るんですけどねー」

これで僕は正々堂々お嬢さんとおつき合いです」

二人の顔が引きつった。

「それはいったいどういうことかな？……　君たちはまだ高校生になつたばかりだ。そういうことは……」

「そういうこと、でしょう？　お母さん。」

理にジロツと視線を向けられて母親は恐ろしそうな顔になった。

「何故急に僕がタツキーに近づくのを恐れるようになったんです？」

「それは誤解よ。だってもう高校生なんだから、やっぱり、その、ねえ？　母親としては心配しちゃうじゃない？」

「そりゃ心配でしょうねえ。血を分けた姉弟かも知れないんですから」

「理君！」

父親が恐ろしい顔で身を乗り出した。

「いったい何を言い出すんだね？　そんな、そんなこと、どうしてそういう馬鹿げたことになるんだい？」

「だって」

理は二人を見比べて言った。

「多喜子さんは辰巳さんとお母さんの子でしょう？」

母親は蒼白になって口をわななかせ、父親はまっ赤になって怒った。

「理君。冗談でもそれは許さないよ。わたしや妻や、娘を、愚弄するようなことは許さないよ」

理は困った目で父親を見て言った。

「愚弄する気なんかありませんよ。僕はタツキーが大好きですし、お二人もいいお父さんとお母さんだと思っています。」

辰巳さんが自分の子どもがいるかも知れないと、何故僕の母さんの名前を出したのか？、僕は辰巳さんの子どもじゃありませんし、辰巳さんが母さんに関係することで子どもがいるかも知れないと考える理由を考えると、お嬢さんしか思い当たらないんです」

「単なる当てずっぽうだろう？ それこそ君のお母さんとの関わりなんてないじゃないか？」

「辰巳さん夫婦は不妊治療に通っていて、辰巳さんは検査のため精子を提供しているんです。その検査を母の研究室が引き受けた。辰巳さんと母の接点はそれだけです」

「それで、どうして多喜子になるんだね？」

「僕の父たちは辰巳さんが母に代理出産を依頼したんじゃないかと考えたんですが、辰巳さんの人物から僕にはどうもそうは思えなかったんです。辰巳さんは奥さんを愛してらして、奥さんに黙って自分の子を代理出産させようなんて考える人じゃない。それならそれできちんと奥さんに相談したと思いますし、あの奥さんなら反対せず、むしろ積極的に賛成したでしょう。僕が考えるに、辰巳さんは絶対奥さんにそれは言わなかったと思います。これには絶対そうしない理由があるんですが……、ま、ここは奥さんをとっても愛していて奥さんを傷つけるようなことは絶対しなかった、と了解してくだ

さい。

浮気の心当たりのまったくない辰巳さんが何故自分に子どもがいると思ったか？ そうではないか？と疑う具体的な心当たりがあったんじゃないでしょうか？ しかし浮気などしたことのない自分に他の女性との間に子どもがいるわけがなく、唯一の心当たりと言えば、クリニックの研究室、母さんに提供した検査用の精子だけです。辰巳さんはその精子がその心当たりの子どもに使われたのではないかと考えた。

しかしこれは、明らかに犯罪でしょう？ いったいどういった罪状になるのかは分かりませんがね。

僕は母の子どもですからねえ、母が何か悪質な意図を持って……例えば将来の佐津川家の後継問題とか…を狙って検査用の精子を転用したとは考えたくありません。では何故医者倫理にもとるそのような行為を行ったのか？

辰巳夫婦と同じように不妊治療を受けている夫婦に、特に辰巳さんの精子を希望する夫婦、がいたのじゃないでしょうか？

結果から考えて、その夫婦は夫の方になんらかの子どもを作れない原因があったと考えられます。彼女は母親そっくりの特徴のある耳をしています。耳の形は遺伝しやすいそうですからね。

彼は辰巳さん夫婦が不妊治療を受けているかも知れないことは知っていたが、たまたま、関係する研究室に親友である辰巳さんの精子が保存されていることを知り、辰巳さんの奥さんが子どもを産めない体になってしまっていることを知った。辰巳さんのことをよく知っている彼は辰巳さんが奥さんの心を傷つけてまで自分の子どもを持つとはしないだろうことが容易に推測された。一方で、自分と同じように子どもを持ちたいと強く願っているだろうことも推測できた。だから彼は自分の奥さんと相談して、辰巳さんの遺伝子で自分たちの子どもを生むことにしたのです。辰巳さんには内緒ですね」

「君の話は、たまたま、が多すぎないか？」

「仕方ありません。結果からの推測ですから。

彼は成長した子ども……娘を、たびたび趣味のテニスに連れ出して遺伝的な父親である辰巳さんに会わせています。最初親友の娘を羨ましくただ可愛がっていた辰巳さんも、だんだんと、おかしい違和感を感じるようになった。違和感どころか、妙な親密感を覚えるようになっていった。辰巳さんは戸惑いましたが、おそらく、親友は、『子どもを持ってない悲しみは自分もよく分かる』とでもいったように言外に自分も不妊治療を受けていたということをほのめかしたんじゃないでしょうか？ それで辰巳さんは親友がどうにかして自分の精子を手に入れ、この娘を生んだのだと分かったが、それを親友に問いつめることはしなかった。その後も二人の親交が続いたことを思えば、二人とも納得した上で、自分たちの娘の成長を温かく見守っていたんじゃないでしょうか？ お互い暗黙の内にこの秘密を決して公にしないと誓い合いながら」

多喜子の父は額を抑えて悩ましく言った。

「……何もかも、君の当て推量じゃないか？」

「辰巳さんを死なせたのは、お父さん、あなたでしょう？」

父親は弾かれたように顔を上げた。その目は張り裂けそうに血走っていた。

「俺が……、何故あいつを……」

「お父さんは辰巳さんがまだ元気な頃……とは言ってもすっかり痩せ衰えていたでしょうが……ともかくまだ容態の安定していた頃、無菌室に入室して直接辰巳さんに会っていますね？」

辰巳さんは、あなたに謝罪したんじゃないやありませんか？ 病に気弱になってつい子どものことを話してしまったと。あなたは驚いたでしょうが、辰巳さんが話したのは『いるかも知れない』という推測と精子を提供した母さんの名前だけだった。

ひとまずほっとしたあなたに、辰巳さんは言ったんじゃないでしょう？、自分を死なせてほしい、と。残念ながら辰巳さんは癌の転移こそなかったが、待望の骨髓液の提供者は見つからず、薬漬け

の体はもはや限界までぼろぼろになり、意識がもうろうとすることが多くなっていたんじゃないでしょうか？　また子どものことを口走る危険を感じ、もうこの苦しい闘病生活を終わりにしたいと願ったのではないのでしょうか？

当然あなたはとんでもないと断ったでしょう。すると辰巳さんは今度はあなたに、何か多喜子さんの持ち物をくれないか？と願いだ、できたら、彼女が直接身につけたような物を」

父親はますますぎょっと目を血走らせた。赤かった顔が青黒くなっている。理は申し訳ないように悲しく言った。

「あなたは、その意味が分かった。多喜子は辰巳さんが入院してから一度もお見舞いに来ていない。辰巳さんが断ったのでしようが、会いたくないはずがない。いよいよ危なそうだと見てあなたも連れてきたかったが、たまたまその時は都合が悪かった。あなたはつい言い訳をした、娘は今風邪をひいていてね、と。」

大会前、風邪ひいてましたよね？、タッキー。たいしたことはなさそうだったけど、マスクをしてましたから」

父親は、ううむ…、と思わず悲惨なうめき声を上げた。理は申し訳なく思いながら続ける。

「あなたはさんざん迷ったでしょうが、けっきょく、辰巳さんの望み通り娘の持ち物を無菌室に持ち込み、辰巳さんにあげた。しかしきちんと管理された無菌室に無断で持ち込まれた物はなかったそうですから、仮にあってもそれと気付かれない物と言うと、……………あの、やっぱりマスクをあげたんですか？」

父親は両手で顔を覆い、うつむいた。

「そうだ！……………俺が、あいつを殺したんだ！……………」

多喜子の母も悲愴な顔で、うう、と涙をにじませた。父親が言う。「俺が殺した。俺は、娘を、多喜子を、失うのが怖かったんだ。真実を知って、娘の心が俺から離れ、俺たち夫婦から、佐津川家に取り上げられるのが怖かったんだ！　だから、だから、俺が、殺した

んだ……………」

ううう…、と父親はわななく指の間から涙をこぼした。

理は、

自分が追いつめておきながら、困ったなあというように力なく笑って言った。

「違うでしょう。」

辰巳さんは死を前にして、せめて娘さんのぬくもりを感じたかっただけでしょう？

それがマスクとはねえ。清廉潔白なハンサムガイの辰巳さんともあろう男が、最後になって女子高生のブルセラにはまるなんて、ねえ？、かっこわるい」

理はアハハと笑った。

「かっこいい辰巳さんの、最期の最後のかっこわるい姿を、秘密にしておいてあげましょうよ？　ねえ？」

多喜子の母は夫をすぎるように見つめた。

「しかし……」

うめくように言う父親に、理は言った。

「あなたは、子どもを抱くことの出来なかった父親の、最期の、切ない願いを叶えてあげただけです。その辰巳さんも、願っていたのは自分の娘が幸せな生活が続けていくこと、これに尽きるんじゃないですか？　辰巳さんが亡くなったのはとても残念で悲しいけれど、彼が願ったとおり、みんな平和に、幸福でいられるのですから、それでいいじゃないですか。ね？」

ようやく、父親が言った。

「マスクを渡すと、あいつは『恥ずかしいから見な』と言った。それで俺は後ろを向いていたが、あいつが泣いているのが分かった。だがそれは、悲しくて泣いているんじゃない、嬉しかったんだ、自分の血を受け継ぐ子がこの世に生きていることが。自分が死んだ後も、健やかに生きていくことが。あいつが悲しんでいなかったことが、罪を犯した俺の、せめてもの慰めだった……………」

「あなた…」

と妻が夫の背を撫でた。父親はうつうつとむせび泣き続けた。
理は微笑み、

「じゃ、僕はそろそろ」

と立ち上がった。

「タツキーを迎えに行きますから、あんまりいつまでも泣いていないでくださいね？」

「理君。わたしは本当に……」

「いいんですよ。タツキーの幸せを考えること、それが第一ですね、お父さん？」

父親はむっと怖い顔になって理を睨んだ。

「まだまだ君に気安くお父さん呼ばわりされんぞ」

理は怖そうに肩をすくめて、笑った。

「はい。約束します。僕は多喜子さんが大好きです。彼女を傷つけるようなことは、絶対にしません」

「それじゃ答えになっておらんぞ」

理はイヒヒと笑い、母親に助けを求めた。

「どうしましょう、お母様？」

母親は笑い、言った。

「ま、高校生らしく、ほどほどにね？」

理は

「はい」

とかわいこぶって答え、

「では、娘さんを迎えに行って来ます」

「理君」

父親は言った。

「ありがとう」

理は笑い、玄関へ向かった。

店の休憩室でテレビを見ていた多喜子を呼んで、理は再び代根家へ向かった。

「ねえ？ お父さんに話ってなんだったの？」

と多喜子は知りたがったが、

「おまえには教えてやらん」

と理は誤魔化した。

「いや、実はな、おまえとの結婚を前提にしたおつき合いのお許しをもらいに行った」

「またあゝ、馬鹿なことやってえー」

「あのさ、おまえ店で何か食べたか？」

「おじさんにアイスおごってもらって食べたけど？」

「何味？」

「ストロベリーチョコ・アンド・ジャム」

「じゃ、ちようどいいや」

理は立ち止まり、多喜子に向かい合うと、肩を抱いて唇を合わせた。

「ファーストキス…だろうな？」

びつくりした顔の多喜子がコクンと頷いた。

「そっか。俺もだ」

理は嬉しそうに優しく微笑んだ。

「なによ、急に……」

すねたように、ちよっぴり悲しそうに多喜子は言った。

その顔を、とても女らしいと理は感じた。

「今日はさ、俺にとって特別な日なんだ。

父親が分かったんだよ。

俺の父親は、父さん、馬場忠穂だった」

多喜子はうん？と首を傾げた。

「でもそれはあり得ないんじゃない？……」

理は悪戯っぽく笑って言った。

「母さんがちよっとした手品を使ってね。ま、俺たちも子作りする

頃になったら種明かししてやるよ」

「なによそれえ？ 誰があんと……」

「なんだよおー、俺の子ども生んでくれないの？」

「マコトの………バカあ~~~~っ!!!!」

理は「あはははは」と笑って多喜子の平手打ちを避けたが、回し蹴りを尻に喰らった。

「イッテえー！」

「フーンだ。浮気なんかしたらこんなものじゃないからね！」

「あはは、しないしない、愛してるぜ、多喜子」

「バカアっ!!」

賑やかにわあわあ騒ぎながら、二人は父母の待つ温かな家路を辿るのだった。

22、80パーセントの真実

父が帰ってくると理はテーブルの向かいを示し、

「まあそこへお座りください」

と父を座らせた。

「なんだい、あらたまって？」

「遺伝子検査の結果が分かりましたのでご報告を」

「うん」

いつも通りいささかふやけた顔をしながら、さすがに緊張した目でまっすぐ息子を見た。

「検査の結果、僕の父親はあなたであることが判明しました。おめでとうございます」

神妙な面もちで頭を下げる理に、忠穂は『はあ？』と多喜子と同じ反応を顔に表した。まじめくさった息子の顔を胡散臭そうに見ながら。

「だからよお、それはあり得ないってのがそもそもの前提だろうが？」

「ところが検査の結果がそうなんですから仕方ありません。あなたが僕の父親です。父さん」

「おかしいだろう？ だいたいいつ俺の遺伝子なんか調べた？」

「うーん…、理は困った顔をして、父親を上目遣いに見た。」

「ですねえ。まあ、父さんも馬鹿じゃないからそう簡単には納得してくれませんか」

「当たり前だ、馬鹿もん」

「じゃあ教えますが、僕は基本的に母さんのクローンです。『男』の部分だけが父さんの子どもなんです」

さすがに忠穂も固まった。

「……理花のクローンだと？…… だが、どうして？ それに俺の子どもって、いつ？……」

「仕方ないですねえ。ショックな話ですが気を確かに持って聞いてくださいよ？」

父さんがアメリカ留学に旅立ったとき、母さんは妊娠していたんだ。ところがその子どもは流産してしまった。その原因を調べたところ、母さんは自分がふつうの男性相手では子どもを作れない遺伝子の持ち主だと分かってしまったんだよ」

忠穂は手を上げて理の話を止めた。

「…そうか、それであんなメールを……」

「メール？」

「ああ。俺が留学してから半年後、母さんからメールで別れを告げられたんだ。『ごめんなさい。あなたとわたしは合わなかったようです。わたしたちはもう会わない方がいいと思います。さようなら』ってな。突然でなんのことやらさっぱり分からなかったが……、そうか、合わないってのはそういうことだったのか……」

しばらくその意味を噛み締めて、忠穂は息子に先を続けるよう促した。

「母さんはずっと父さんを愛していたんだよ。でも二人の間に子どもは作れない。悩んだ母さんは、科学者として、答えを出したんだ。自分の知識と頭脳と技術を最大限生かしてなんとしても自分たちの子どもを生もうってね。そこで……」

理は事実を整理するふりをして考えた。

「……そこで、母さんは自分の遺伝子の改造をしたんだ。自分の遺伝子から問題のある物を取りだし、正常な遺伝子と入れ替えたんだよ」

忠穂が頷いた。

「そういう技術で母さんは論文を発表してたんだもんな」

「そうだったね。そうして作った遺伝子に、保存しておいた流産した子どもの細胞から父さんのY染色体を取りだしてX染色体と入れ替えて新しい子ども、つまり俺の、遺伝子を完成させたんだ」

「えーと、ちょっと待てよ」

専門外の話に顔をしかめて忠穂は考えを整理させた。

「なんで自分のクローンにしくちならないんだ？ 流産した子どもの遺伝子があるなら、それを使えばいいじゃないか？」

理は、それでもよかったかな？、と考えたが。

「死んだ子どもだよ？ ゾンビじゃん？」

「うーん…、そうか……。じゃあだな、正常な遺伝子が出来たんなら、俺の精子とふつうに受精させればいいじゃないか？」

「さすがの母さんも完全に成功した自信がなかったんだよ。母さんは一度流産を体験している。その辛い思いを父さんに味わわせたくないかったんだよ。だから父さんと再会する前にお腹の赤ん坊の十分な生育と健康を確認しておく必要があったんだよ」

「にしてもなあ？ ずいぶん極端な発想じゃないか？ 俺の子なら、なんでそれを隠すんだよ？」

「実験室で遺伝子をいじくり回して生まれた子だよ？ まるっきりフランケンシュタイン博士みたいじゃないか？」

「それでもなあ…、話してくれりゃよかったのに……」

「いずれは話すつもりだったんだよ、事故にさえ遭わなきゃね」

「そうか……。でも…、なあ？ おまえに訊くのもなんだが、クローンって言うのは何か病気を持っていたり、短命で死んでしまうんじゃないか？……」

「いや、いろいろやって、大丈夫みたいだよ？ この通り健康そのものだし」

「そもそもこんな話誰から聞いたんだよ？」

「亀潟教授。母さんの講師だった人」

「ああ、そうか」

「教授は事前に調べて全て知っていたんだよ。だから本当は俺に真実を知られたくなかったんだよ」

「高美さんを脅迫したのは教授か？」

「その仲間さん。母さんのファンクラブだってさ」

「なんだいそれ？」

「今は俺のファンだって。あ、そうそう、父さんずいぶん恨まれてたぜ？よくも俺たちのマドンナを、ってね」

「へへへ、そうかい？」

忠穂は暗く笑い、しばらく沈黙した。

「おまえ、本当に俺の息子なのか？」

「そうだよ、パパ」

「やめろ、気色悪い。どうせなら女の子のクローンにしてくれりゃよかったのに」

「父さんにそういう目で見られないように男の子にしたんだよ。それに、父さんの本当の子にするには男にするしかなかったんだ」

「うん……、そうなのか……」

忠穂はまだよく理解できていないし、いくら考えてもとうてい理解なんて出来そうにないと思った。忠穂は諦め、肩をすくめた。

「ちくしょう、孫を葵ちゃんにする計画がおじやんだぜ」

「へっ、残念だったな、ヘンタイ親父。俺はほっとしたぜ」

父子は不敵な笑いを浮かべて睨み合った。女の子には父親のY染色体は受け継がれないからかまわないのだが、教えてやらない。代わりに、睨み合いは息子が折れて、訊いた。

「母さんを恨んでないか？」

「なんで？」

「異常があったのは母さんの遺伝子だ。父さんは、他の女性とならふつうにふつうの自分の子が持てるんだぜ？」

「ああ、そういうことなのか……」

忠穂はじつと過去を振り返った。

「大きなお腹の母さんと会ったとき俺はぎょっとしたよ。母さんを置いていった自分の馬鹿さ加減に腹が立った。その時母さんは言ったんだ、『この子を受け入れてわたしと結婚して』って。俺は迷ったが、受け入れることに決めた。それを後悔したことはねえよ。真実を知った今ならなおさらな。母さんの他の女の子どもなんて欲しくもねえよ」

理は微笑み。

「いや、今からでも遅くないから。俺も可愛い妹が欲しいぞ?」

「ばーか。もう子作りなんかする元氣残ってねえよ」

「嘘つけ。枯れた爺いみたいなこと言ってんじゃねーや」

親子は笑い、

「……そうか、おまえは俺の本当の子だったのか……」

父は嬉しそうに事実を噛み締め、息子に訊いた。

「おまえは、生まれてきて幸せか?」

「もちろん」

「そうか。じゃあ、母さんに感謝だな」

「うん」

美しき世紀のマッドサイエンティストに、と言おうとして、余計な茶々はやめた。

母の医者としてあるまじき犯罪はまだ残っている。

それは自分のためであり、父には教えなくていいだろう。

23、大団円

翌日曜日、理は電車とバスを乗り継いで佐津川会長の屋敷を訪れた。さんざんな出費で帰りは是非探偵料をたんまりいただいていこうと思っている。

朝一番に高美に電話して会長に屋敷で待っているよう言付けた。お約束の調査が完了しました、と。

執事に案内されて書斎で会長と会った。調査報告は会長一人だけに行く。

「犯人が分かったかね？」

「分かったのは、犯人なんかいない、ということです。辰巳さんは病死です。誰かに殺されたんじゃないやありません」

「フン。つまらん結論だな」

「不満ですか？」

「ああ、不満だとも。まあええ。掛けなさい」

と、会長はソファを指さし、自分は立派な机に大きな窓を背にふんぞり返った。

「では失礼して」

理はソファに腰掛け、報告を続けた。

「僕の素性の結果も出ました。僕の父は佐津川辰巳さんではありません。僕は佐津川家とはまったく無縁の人間です」

「ではどうして辰巳は君の母親の名前を出したのかね？」

「病に冒されての妄想です。自分に子どもがいたなら、と思って、ずっと以前不妊治療の検査のため研究室の母に精子を提供したのを出したんです。その時自分の精子を使って代理出産を頼もうかという考えを持ったのでしょう。けれどそれは愛する奥さんの心を傷つけるだろうと断念したんです。それを、病に朦朧とする頭でそれを行っていた、と誤った記憶を思い出してしまったんです。ですから後でそれを思いだして『やっぱり自分に子どもはいない』と訂

正したでしょう？」

「フム……」

会長は不機嫌な目で理を睨むように見ている。

「君の報告はそれだけかね？」

「ええ。それだけです。僕なりに、徹底的に、調査しましたけれど、結論は述べたとおりです。」

辰巳さんは病死ですし、

僕は辰巳さんの息子ではありません。

以上です」

むつつり不機嫌な会長に理はニコニコ笑い掛けた。

「これでいいんでしょう？ 僕の役割は？」

「なんのことだね？」

「あなたは、悪人ですね？」

「なんのことだ？ たしかに悪人面しとるだろうが、天下の佐津川グループ会長に向かってその無礼きわまりない言い方、わしを悪人呼ばわりする理由を言えるんだろうな？」

会長はギロリと目を剥いて理を睨み付けた。

「おお、怖い」

理は震え上がって見せ、悪戯っぽい目で理由を述べた。

「あなたは最初から僕を利用したんだ。なんのためかと言うと、いがみ合う一族の和睦のためです。」

あなたは出来の悪い次男と長女を齒がゆく思い、いろいろ愚痴も言ったが、父親として我が子が可愛くないわけがない。ただ、彼らのバックに齋藤家が付いているいろいろ要らぬ口を出してくるのであなたとしても手の差し伸べようもなく齒がゆい思いをしていた。病に倒れた辰巳さんもずいぶんそのことを気に病んでいたんじゃないありませんか？ どうも噂に聞くほど彼ら兄弟の仲は悪くもなさそうですのでねえ？

多分、辰巳さんが倒れて、どうもいけないらしいとなった時に、齋藤家の方で次男大樹さんを辰巳さんに代わる当主にと言う声が拳

がったんじゃないですか？ 辰巳さんに子が無く当然と言えば当然ですが、あなたは大樹さんがその器ではないと既に見切っていた。佐津川グループの将来を大樹さん、及びバックの未だ旧華族気取りの齋藤家に預けるわけにはいかない。

そこであなたは芝居を打った。佐津川グループを解体するぞお！、と言う極端な宣言をしたんです。まさかと高をくくる大樹さん、星華さん、齋藤家に、あなたはあくまで本気だという態度を崩さず、彼らもそれを信じ、すっかり落ち込んでしまった。

あなたが彼らに伝えたかったのは、彼らがいかに甘やかされた安泰な場所にいたかを思い知らせること、だったんじゃないやありませんか？ ショック療法で甘ったれた目を覚まさせて、真剣に生きるよう促す。齋藤家にもいい加減にしろ、と自分たちの立場を思い知らせる。そういう狙いじゃありません？

狙いはそうなんですが、彼らに本気で信じ込ませるために芝居も本気でやらなければならず、やった結果が、さてあなたはこの状況をどう回収しようか、困ってしまったんじゃないやありません？

そこで僕を利用したんです。

高美さんが辰巳さんの息子らしい男の子を見つけて、どうもそれがかっこよくて頭のいいスーパーウルトラ高校生だということを知ったあなたは、彼を使って事態の收拾を図ることにした。

あなたはもう一つ、辰巳さんが殺された、という事件を無理矢理作り出し、弟妹たちを兄を殺した極悪人と疑った。そして辰巳さんの息子の僕に事件を解決させて佐津川グループを後継させるという無茶苦茶なことを言いだした。

みんなあなたがどうかしたんじゃないかと疑い、老人の言い掛かりに呆れ返ってしまった。

で、

結局、事件なんかなかった、辰巳さんの息子なんかいなかった、と言うことがはっきり分かって、あなたは、みんなに謝罪するつもりなんでしょう？

わしが悪かった。どうか許して欲しい。これからも兄弟一族協力して、佐津川グループを守っていつて欲しい、と。グループ解体の話は無し。みんな良かった良かったとほっとして、辰巳さんという大きな柱を補うよう協力して頑張っていこうと。めでたしめでたし。いやあ、よかったですねえ？」

じいっと理を睨んでいた会長は、ニヤリと笑った。

「期待以上だよ、君は。

まったく、あいつらも君くらいわしの考えを読んでくれれば苦労せんものを」

会長はすっかり上機嫌になって机に身を乗り出して言った。

「どうだ？ いっそ本当に辰巳さんところの養子に入らんか？ わしがみっちりしごいてやるぞ？」

「ああ、それはお断りします。どうせもう辰巳さんの後継者は決めているんでしょ？」

「ふうん？ わしが誰を考えておるか、分かるのか？」

「お孫さんでしょ？ 尚大さん。で、当面高美さんに辰巳さんの仕事を任せるつもりでしょう？」

「君は我が家の家系図を誤っておるぞ？ 高美は辰巳の妻の兄だ。

子の尚大はわしの孫ではない」

「ですから高美さんがあなたの息子さんなんでしょう？」

会長がまた怖い顔になって理を睨んだ。

「高美がしゃべったか？」

「いいええ。ところでそれは皆さんはご存じなんですか？」

「知らん。と言うことになっておる。表向きはな。それを公にするのはわしの逆鱗に触れることになるのでさすがに黙っておるわ。言え、何故分かった？」

理は肩をすくめた。

「辰巳さんが兄のように慕っていたと聞いて、あなたの重用ぶりと合わせてそうなんじゃないかなと思ったんです。

昔のお殿様じゃないですがね、佐津川家長男の辰巳さんにとって跡取りは重要な問題でしょう。佐津川グループは未だに昔ながらの縁故を大切にする気風が強いようですからねえ。ところが奥さんのためとはいえあまり執着した様子もなく、実際自分が死んでこうした騒ぎになっているのに全然それに対する備えもしていない。切れる者の辰巳さんらしくないですが、それは、自分の後を任せられる人間が既にいるからじゃないですか？

実の兄である高美さんと、その優秀な息子の尚大さんです。

辰巳さんは、実の兄でありながら自分の陰に隠れて一社員であり続けている高美さんに申し訳ない気持ちを抱いていたんじゃないでしょうかねえ？

あなたの今回のお芝居の一番の目的は、実は、尚大さんを円滑に跡継ぎに迎えることだったんじゃないかもしれませんか？

一族の中の公然の秘密とはいえ、尚大さんを後継に据えるのは、正妻の血縁、つまり齋藤家の血縁にないことでまた面倒な騒ぎになってしまう。しかしグループ解体を打ち出して、それを納めた後ならば、彼らもなんとか大人しく認めるだろうと、それがあなたの書いたシナリオじゃないですか？

パンッ、パンパンパン、と会長は手を打った。

「見事だ。恐れ入ったよ。」

その通りだ。大樹やその子どもたち、星華の子どもたち、みな辰巳の跡を継げるだけの器量ではない。高美も優秀だが、子どもの頃から分をわきまえる習慣が身に付きすぎて発想がありきたりすぎる嫌いがある。

尚大が、唯一わしがこれと思う器量だ。あいつにならわしの跡も任せられる。

しかしまた齋藤家が四の五の言うのは分かり切っておったからな。フフ、これでなんとか尚大を後継者と認めさせることが出来るだろう」

「あの、僕からも一つ訊いていいですか？ お祖父さんは僕を辰巳

さんの子どもとは思わなかったんですか？」

「ああ、思わなかったな。君の顔は一族の系統ではない」

「あらま。やっぱりあなたは悪党ですねえ？」

「フフ。悪党ついでに教えておこう。グループはやはり解体する」

「そりゃまたどうして？」

「やはり尚大が後継者では不満が大きかろう。だからきれいに3等分して3分の1ずつを大樹、星華の家にやり、3分の1を辰巳の未亡人の裕子さんにやり、裕子さんには便宜上尚大を養子にもらってもらい、跡を継がせる。わしと高美とがその後見人となる。大樹と星華の息子たちもわしがみっちり鍛えて、将来それぞれのグループを背負って立つてもらう。というのがわしのプランだ。どうかね？」

「けっこうなんじゃないでしょうか？ 後はそれぞれの努力次第と
いうことですね」

「そういうことだ」

会長は満足そうに微笑み、落ち着いて改めて理を見た。

「君には世話になったな」

「いえいえ。会長さんの手のひらで踊らされただけで」

「どうだ？ 養子はともかく、将来うちへ来んか？ いい仕事を用意してやるぞ？ 君のためになら新しい会社を興してやってもよい。
どうかね？」

この人は何歳まで現役で頑張るつもりだろうと思いつつながら理は言
った。

「それはまた太っ腹ですねえ。しかし僕はオリンピックに出場する
ことになっていますのでね、どうなるのか分かりません」

「ほう、オリンピックか。たいしたもんだな？」

「ええ。ああそう、僕は青陵大学に入学することも決まっています
ですよ？ あそこの教授に内定をいただいております」

「はっはっは。人気者だなあ？」

「ええ、モテモテです。尚大さんにも負けませんよ？」

あの、それで今回の探偵料、取りあえずもろもろ交通費、6千円ほどいただけません？ 貧乏学生にはかなり痛い出費ですのぞ」

「もちろん、礼はきちんとするよ。100万くらいでいいか？」

「そういうお金は若者を駄目にします。1万円もいただければ十二分です」

「ま、君がそれでいいと言うなら。その代わり、将来の進路は是非うちを考えておいてくれよ？」

「ええ、そりゃあもうありがたく。そのうち高美さんのところへ遊びに行きますよ。ガールフレンドといっしょに」

「ガールフレンドか。モテモテじゃのう？」

「ええ。そうだ、辰巳さんの奥さんにも改めてご挨拶に伺わないといけませんね。いろいろご心労をおかけしてしまっただしょうから。高美さんのところに行つたついでに連れていってもらいますか」

「裕子さんのところか。フム」

会長はじいっと鋭い目で理を見つめた。怖い顔だが、さすが辰巳氏の父親だけあって元々はかなりハンサムだ。

「訊くが、君はともかく、本当に辰巳に子どもはおらんかったのかね？」

理はまっすぐ見返してはっきり言った。

「ええ。いません。間違いなく」

会長はじいっと見つめ、目を閉じると深く頷いた。

「相分かった。この話はこれで終いだ」

理はにっこり微笑んだ。

「では、後のことはどうぞ高美さんとよくご相談ください。僕は、ここでお役ご免です」

24 LAST, 母の犯罪

「僕と母さんには誰にも秘密の約束があるんです。それが母さんが僕のために用意した『答え』なんですね？」

「君と明川君の約束は知らないが、ま、そうなんだろうね。」

代根多喜子は君の母親によって遺伝子操作されている」

「どういう風にです？」

「彼女となら、正常な発育をする子どもが生めるようにだ。」

バランスの取れている配列からそのバランスを崩さないように部分部分をつまみ出すのは非常に難しい。不可能と断じていい。それに比べ、

バランスの取れている配列に、そのバランスを崩さないように無害なピースを埋め込んでやる方がずっと簡単だ。

そうして代根多喜子のDNAは君のDNAと合体してもバランスが取れるだけ、通常より数の多い遺伝子を持っている」

「そうやって生まれた子の遺伝子は？」

「数は多い、が、他の普通人と交わっても正常な子が生まれるように発現が制限される」

「多喜子は？ 多喜子が俺以外の男と結婚したら、子どもは？」

「異常が現れる危険が、君ほどではないが、ある」

「そんな……………」

理は母が多喜子に対して行った罪を思っただ蒼白になった。生まれながらにして多喜子に呪いを掛けたことになる、悪魔の息子と結婚しなければならぬという呪いを。

教授が言った。

「そうだな。明川君の行ったことでこれだけは許されない犯罪だろう。明川君にも十分罪の意識はあったと思うが、どうだろう？」

「母さんは、結婚して代根家の近所へ引っ越してきたんだ。子どもの頃から何かと俺と多喜子をいっしょに遊ばせようとした。将来俺たちを結婚させる気だったんだ」

「なるほど。君たちは生まれながらの運命の恋人たち、というわけだ。ロマンチックと言え、ロマンチックだな。彼女、なかなか可愛いじゃないか？ 良かったな？」

「良くはないですけどね、けっして」

理は考え、言った。

「どうして多喜子に目を付けました？」

「君の考えと同じだよ。あの明川君がこの問題を放置しておくわけないと考え、その解決法を残しているはずだと、その答えを求めた。君たちはご近所の幼なじみで、たいへん仲がよろしい。第1候補として調べたら、ビンゴだったというわけだ」

「僕や多喜子のサンプルを集めるのは簡単だったんでしょねえ？」

「明川君の死後はね。馬場忠穂のサンプルを手に入れるよりずっと楽だったよ。小学校の保健室の田上先生」

「ええ。よく知ってますよ」

「では、そういうことだよ」

「母は最初から僕と対になる女の子を作るつもりだったのでしょうねえ？」

「そうだろうね。君の遺伝子から問題を除去するのは不可能だ。君に結婚して子どもを作るという普通の人間の幸せな人生を送らせるためにはどうしても君専用のパートナーを作る必要があった。」

明川君はコネクションを用い精子を手に入れやすいクリニックを訪れる不妊治療の夫婦に網を張っていたのだろう。天才研究者として無理も利いたんだろうな。そこで目を付けたのが代根夫婦だったというわけだ。彼らのどこを気に入ったのかは知らないがね。代根多喜子が母親の遺産を引き継いでいるのは一目瞭然だが、父親が誰かは知らない。当然そちらとペアで選択したのだろうが……。今回の騒ぎで見当は付いたが、父親は、そうなのかね？」

「ノーコメント。そちらが興味を持つことでもないでしょう？」

「了解。そうしよう。これ以上君に嫌われたくない。」

明川君は研究室で精子と卵を受精させ取りだした遺伝子に手を加え、新しい受精卵に入れ替え、なに食わぬ顔で代根多喜子の母親に受胎させた。

代根多喜子は君より8ヶ月お姉さんだね？ 明川君は検診で女の子の成長と健康を確認し、いよいよ自分も君を妊娠したんだ」

「用意周到で、悪魔の所行ですね？」

「悪魔か神か。彼女も最後まで結果を見届けたかっただろうねえ」

「母が事故で死んだのは、罰が当たったんですかねえ？」

「事故は事故だ。と、わたしは思いたいね。それを罪というなら、生まれながらにその宿命を背負わされた彼女が可哀想じゃないか？」

「そうですね。でも……多喜子は……」

「それを母親の罪と思うなら、」

教授は物のよく分かった大人の微笑みを浮かべて理に言った。

「君があがなってやるがいい。幸せになりなさい。彼女といっしょにね」

理も、他にどうしようもないかと、頷いた。

「ええ。そうします」

教授は笑って言った。

「では、我々はまた観察を続けられるな」
理は呆れた。

「暇な大人たちですねえ？」

「我々のライフワークだ。趣味のね」

笑い、静かな顔になると言った。

「明川理花は人類が作り出した奇跡であり、君はその明川理花が生み出した奇跡だ。我々は、君たちがこの世に生を受けたことを祝福するよ」

理は頷いた。

「ありがとう」

教授も目を閉じ頷いた。

「いやいや」

理はソファから立ち上がった。

「では、僕はこれで失礼します。色々教えてくださってありがとうございます
ございます」

「ああ。君と話せて楽しかったよ。

……来週、応援に行ってもいいかい？」

「どうぞどうぞ。もうコソコソしないでいいですから、お暇なら皆
さんごいっしょにどうぞ」

「ありがたい。皆に声を掛けるよ。では、またスタジアムで」

「ええ。では、また」

理は笑顔で手を振って、教授の部屋を出た。

辰巳夫妻と代根夫婦が共に不妊という問題を抱えていたのは偶然だが、両者を結びつけたのは母だ。

母はきつと息子の花嫁候補を念入りにデザインしたに違いない、父親の遺伝子と母親の遺伝子のカップリングを。おそらく最初に目を付けたのは父となる佐津川辰巳だろう。恋人馬場忠穂とは違ったタイプのいい男だ。きつと気に入ったのだろう。では彼とどの母親を組み合わせるか物色したところ、代根夫婦に目が止まった。夫が辰巳の高校時代の同級生で、テニスでダブルスを組み、親友であるらしい。母は両夫婦の事情を調べ、辰巳と親友の妻を遺伝的両親に選んだ。

決め手になったのはおそらく子どもが成長する環境だろう。人がどういう人間に成長するかは環境こそが一番の要因となる。母は考えた末、代根夫婦を女の子の両親に決定したのだ。

母は代根夫婦を招き、医者としては許されない患者のプライバシーを明かした。佐津川辰巳を子どもの遺伝的父親にすることを薦めたのだ。夫婦は迷っただろうが、おそらく、辰巳夫妻の事情をよく知る夫が決断したのだろう。彼は親友の事情を考え、親友に黙って、彼の子どもの父親になることを決意したのだ。

全て母さんの思惑通りだが、自分も、多喜子も、最大限親たちに愛されて生まれてきたのだ。それは明らかに親たちのエゴだが、その愛情を受け、こうして幸せに生きている自分にそれを否定するとは出来ない。

40分ほど待って多喜子が来た。

「お待たせー。ねっ、いくらもらったの？ 20万くらい？」
「1万円」

「ええーっ？ たったのー？ ケチねえ？」

「100万くれるって言うのを断ったんだ」

「ええっ！？ もったいない」

「そんな金もらっちゃったら後が怖い」

「ま、結局なんの役にも立たなかったんでしょ？　じゃ、しょうがないか？」

「そういうことだ。なに食べたい？　なんでもいいぞ？」

「ハンバーガーでいいよ」

「なんだよ、もっと豪勢にパアーツと行こうぜ？」

「豪勢に顎が外れるくらいのウルトラビッグバーガーを頼んでやるわよ」

「じゃあ、服でも買ってやろうか？」

「なに？」

「なにが？」

多喜子はじつと怪しむような目で理を見つめた。

「なーんか妙に優しくない？　なんか昨日うちに帰ってからお父さんもお母さんも妙にぎこちない笑顔でさー。なんかわたしに関することであつたわけ？」

「なんでおまえなんだよ？」

「そう……だよねえ？　あたしは関係ないもんねえ？」

「色々考えるところがあつてな、周りの人間関係を改めて見直しているのさ。おまえは、みんなに愛されてるんだよ」

「なんだかなー、恥ずかしいじゃん」

多喜子は頬を赤らめて下を向き、ニヤニヤした。二人はエスカレーターを上がり休日のおしゃれなかつこうをした若者が多く行き交う華やかなコンコースを歩いている。理は多喜子の横顔を見下ろし、言った。

「おまえ生まれながらの運命って信じるか？」

うん？と怪訝そうに多喜子は顔を上げた。

「あんたそういうタイプだったっけ？」

「ああ。実は俺はロマンチストなのだ。」

俺が、おまえに巡り会うためにこの世に生まれてきた、って言うたら、信じるか？」

多喜子はじいーっと目を細めて理を眺めた。

「信じるわけないでしょ」

「なんだよ、女のくせに」

理はがっかりしたが、

「あ、かわいい子発見！」

「ほら見ろ！ 信じられるか浮気男！」

肘で脇腹を突かれて理は笑った。

「楽しいな？」

「……まあね」

多喜子はあっけらかんとした理を見て、仕方なく呆れたように、笑った。

理は微笑み、ふと窓から青い空を見上げ、
天の母に言った。

俺たちは、幸せだよ。ありがとうな、母さん。

幼い頃、小学校に上がるときだった。理は母に笑顔で訊かれた。

「マコちゃん、多喜子ちゃんのこと、好き？」

まだ幼い理は素直に頷き、言った。

「うん。好きだよ」

母はニコニコし、言った。

「じゃあね、お母さんと秘密の約束をしましょう？ 二人だけの秘密で、絶対誰にも言っちゃ駄目よ？」

悪戯っぽい目をする大好きな母に二人だけの秘密と言われて理は喜んで頷き、ドキドキと母の言葉を待った。

「多喜子ちゃんはマコちゃんの許嫁なの」

「いいなずけ？」

「大人になったら結婚する人。多喜子ちゃん、美人になるわよー？ お母さんが保証してあげる。どう？ 多喜子ちゃんがお嫁さんだったらマコちゃん嬉しい？」

「……うん……」

理は顔を赤らめて頷いた。自分と多喜子が大人になってお父さんお母さんみたいにずっといっしょに仲良く暮らせたらいいなと思っただ。母は満足そうににっこり笑い、

「じゃ、指切り」

と理と小指を絡めた。

「お母さんとマコちゃん、二人だけの秘密の約束。マコちゃんは大人になったら多喜子ちゃんと結婚するのよ？　だから、ずうっとずうーっと、多喜子ちゃんを大切にして仲良くするのよ？」

「うん」

そうして母と指切りしたのだった。

あの時母はとても嬉しそうだった。

小学2年生のとき母が自動車事故で死んで、すっかり表情を無くして黙り込んでしまった自分に代わってぼろぼろ涙をこぼしてくれている多喜子を見て、理は母との秘密の約束を思い出していた。當時は言葉の意味もよく分からなかったがあの約束が母の遺言だったように思ったものだ。

それ以来多喜子は理にとって誰にも代え難い特別の女の子になった。

理は多喜子の手を握った。多喜子はびっくりしたが、顔を赤くしてしっかりと握り返してきた。

理は、

手を握り合える相手が多喜子で良かったと嬉しく思った。

終わり。

あとがき

この物語はミステリーとしては卑怯なトリックを使っています。遺伝子の仕掛けでいろいろ無理なことを書いていますが、これは今から16年後を想定……と言いますか、言い訳にしておかなり無茶な嘘を書いています。もっと単純にしてもよかったんですが、そうできなかったのは作中に書いたとおりです。

この話が未来を舞台にしているというのははっきり書いています。気づきましたか？

400メートル走のアナウンスと翌日の新聞記事を巡る会話で年数を言っています。

ま、それにしても主人公の誕生したのが小説を発表している今現在ですから、やっぱりでたらめですね。ごめんなさい。

ここに書いたようなことが、もし行われるとして、それは30年50年100年……くらい先のことだと思います。でも逆にその頃にはこういうことが普通に行われているかも知れませんね。

社会的倫理観に反することを肯定的に描いたりして、内容に反発を感じられるかも知れませんが、

「愛」が全て。

と、言い訳しておきましょう。

全体的に無駄な文章が多く、長い小説になってしまいましたが、楽しくてつい書きすぎてしまいました。これも作者の作品及びキャラクターへの愛ゆえと、お許しください。

お読みくださってありがとうございます。

2010年6月21日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1912m/>

父を求めて殺人推理

2010年10月8日13時50分発行